

いち
一 や
夜 じょう
城

令和5年（2023）3月

長野県伊那市教育委員会



一夜城俯瞰写真（上空から、左下は第1次調査4・7トレンチ）

序

伊那市は、古代には東国の統治等を目的とした東山道が地区内を通過し、また「暴れ天竜」の異名をとる一方で大いなる恵みをもたらす天竜川を利用した水上輸送が行われるなど、古来水陸交通の要衝として栄え、豊かな歴史・文化を育んできました。人馬の往来は交通・交易に留まらず、兵馬の行き来も数多くありました。中でも、天正年間、織田信忠を総大将に武田氏討伐のため織田勢が侵攻し、高遠城をめぐって激しい攻防戦が行われたことは、あまりに有名です。『信長公記』に登場する高遠城攻め本陣として、一夜にして築かれたといつの頃からか言われてきたのが「一夜の城」です。

埋蔵文化財包蔵地一夜城については、平成17年度に富県北部保育園と富県南部保育園の統合に際し、地元から市道桜井殿島線の拡幅改良の要望が出されたことを発端に、土壘の移転復元を含め地域の皆様と事業実施に向けた話し合いを重ねてまいりました。一方で、長野県考古学会からの保存活用の要望書提出があり、長野県教育委員会から中世城館跡で重要な遺跡であるのでその保存を図ること、専門家を加え一帯と遺跡の範囲確認調査を行い歴史的な位置づけを調べることという指導がありました。こうした経過を踏まえ実施した第1次の範囲確認調査の結果、「一夜の城」の重要性が改めて明らかになり、地元の皆様のご理解をいただき、土壘を現状のまま保存できることになりました。また、周辺の個人住宅建設に際しても数度の発掘調査を実施し、記録保存を行ってまいりました。

発掘調査の結果、今では窺い知ることができませんが、土壘の外側四方に堀が巡らされていたことが確認されました。築かれた当初、敵を寄せ付けなかった堅壁は崩れ緩やかな丘と化し、深かった堀はいつしか埋まりかけていた頃、改めて修築され堅牢さを取り戻していたことが明らかになりました。残念ながら、「一夜の城」が織田軍による築城とする伝承を直接裏付ける痕跡や出土遺物は得られませんでしたが、なお「一夜の城」はそこにあり続けています。そしていつの日か、新たな知見を提供してくれるものと確信する次第です。

地域の宝として「一夜の城」が保存・継承され、本報告書が活用されることを切に願うところです。調査と遺跡の保護にご理解とご協力を賜りました貝沼地区と長野県考古学会の皆様、現地作業にあたられた皆様に、深甚なる感謝を申し上げ、発刊の辞といたします。

令和5年3月

長野県伊那市教育委員会

教育長 笠原千俊

例　　言

1. 本書は、埋蔵文化財包蔵地一夜城における第1次～第6次の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国宝重要文化財等保存整備費事業補助金及び国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金により伊那市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成23～28年度に現地作業、令和4年度に整理作業・報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり第1次調査の基準点設置及び土壠の測量を株式会社北測に委託実施した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号I Y Jを一貫して用いた。
6. 埋蔵文化財包蔵地一夜城は城館跡の周辺を含んでおり、限定された城館跡部分を指す場合は一夜城跡、また一般的な城の呼称として使用する場合には「一夜の城」と表記した。
7. 第Ⅱ章 環境の項では遺跡の所在する市内各地区名を下記の通り略記した。
伊那… [伊]（天竜川西側の竜西地区は西を、竜東地区は東を括弧内に付記）
富県… [富]、美篶… [美]、手良… [手]、東春近… [東]、西箕輪… [西箕]、西春近… [西春]、高遠町… [高]、長谷… [長]
8. 本書の記載順は調査次別、遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。
9. 土層の色調については、『新版標準土色帖』を用い、マンセル表示で示した。
10. 遺構図のうち、土坑・柱穴等に付した数値は、遺構検出面ないし床面からの深さ(cm)を示す。
11. 遺構出土の遺物のうち、他時代の混入遺物については、遺構外遺物として図版組みした。古代の土器の分類は、長野県埋蔵文化財センター(1989・1990)に拠る。また、石器実測図におけるスクリーントーンは、調査時の欠損を示す。
12. 本書に関わる図面の整理は濱 慎一・馬場保之が、遺物実測は濱 裕貴子、小池 孝、馬場が行った。
13. 本書の執筆と編集は濱(慎)・大澤佳寿子・馬場が行い、濱(慎)が総括した。
14. 本書に関連した出土遺物および図面・写真類は伊那市教育委員会が管理し、伊那市創造館に保管している。

本文目次

序

例言

| | | | |
|----------------------|----|----------------------|----|
| 第1章 経過 | 1 | 第2節 第1次調査 | 22 |
| 第1節 調査に至るまでの経過 | 1 | (1) 調査区の設定 | 22 |
| 第2節 調査の経過 | 2 | (2) 検出遺構 | 22 |
| (1) 事前詳細調査 | 2 | (3) 出土遺物 | 27 |
| (2) 範囲確認調査 | 2 | 第3節 第2次調査 | 29 |
| (3) 緊急発掘調査 | 2 | (1) 検出遺構 | 29 |
| 第3節 調査体制 | 2 | (2) 遺構外出土遺物 | 33 |
| (1) 調査 | 2 | 第4節 第3次調査 | 34 |
| (2) 指導 | 3 | 第5節 第4次調査 | 34 |
| (3) 協力 | 3 | (1) 検出遺構 | 34 |
| (4) 事務局 | 3 | 第6節 第5次調査 | 41 |
| 第2章 環境 | 5 | 第7節 第6次調査 | 41 |
| 第1節 自然環境 | 5 | (1) 検出遺構 | 41 |
| 第2節 歴史環境 | 6 | (2) 遺構外出土遺物 | 46 |
| (1) 旧石器時代 | 6 | 第4章 総括 | 51 |
| (2) 繩文時代 | 6 | 第1節 「一夜の城」について | 51 |
| (3) 弥生時代 | 8 | (1) 発掘調査結果 | 51 |
| (4) 古墳時代 | 9 | (2) 「一夜の城」の性格 | 52 |
| (5) 奈良・平安時代 | 9 | (3) 織豊期の陣城について | 52 |
| (6) 中世 | 11 | (4) 今後の調査研究課題 | 53 |
| (7) 近世 | 12 | 第2節 他時代の遺構・遺物 | 53 |
| 第3章 調査の成果 | 13 | (1) 繩文時代 | 53 |
| 第1節 事前詳細調査 | 13 | (2) 弥生時代 | 54 |
| (1) 現況調査 | 13 | (3) 平安時代 | 54 |
| (2) 歴史資料調査 | 14 | 引用参考文献 | 54 |
| (3) 地名調査 | 17 | 抄録 | 81 |
| (4) 関連城館跡の調査 | 17 | | |
| (5) 当該地の変遷 | 20 | | |
| (6) 聞き取り調査 | 20 | | |

挿図目次

| | | | |
|--------------------------|----|-----------------------|-------|
| 挿図 1 調査遺跡及び主要遺跡位置図 | 7 | 挿図14 第4次調査全体図 | 35 |
| 挿図 2 一夜城関連調査 | 15 | 挿図15 第4次堅穴建物址1、溝址1断面図 | 36 |
| 挿図 3 周辺城館跡位置図 | 18 | 挿図16 第4次柱穴平面及び断面図 | 37 |
| 挿図 4 第1次～第6次発掘調査位置図 | 21 | 挿図17 第5次調査全体図 | 38 |
| 挿図 5 第1次・第3次調査トレンチ位置図 | 23 | 挿図18 第5次土層断面図(1) | 39 |
| 挿図 6 第1次1・2-1トレンチ土層断面図 | 25 | 挿図19 第5次土層断面図(2) | 40 |
| 挿図 7 第1次2-2・2-3トレンチ土層断面図 | 26 | 挿図20 第6次調査全体図 | 42 |
| 挿図 8 第1次3トレンチ土層断面図 | 27 | 挿図21 第6次堅穴建物址1(1) | 43 |
| 挿図 9 第1次6トレンチ土層断面図 | 28 | 挿図22 第6次堅穴建物址1(2) | 44 |
| 挿図10 第2次調査全体図、溝址他土層断面図 | 30 | 挿図23 第6次堅穴建物址1カマド平断面図 | 45 |
| 挿図11 第2次堅穴建物址1 | 31 | 挿図24 第6次堅穴建物址2・3 | 47 |
| 挿図12 第2次堅穴建物址2 | 32 | 挿図25 第6次柱穴断面図 | 48 |
| 挿図13 第3次8トレンチ断面図 | 33 | 挿図26 第6次堀トレンチ1・2断面図 | 49・50 |

付図目次

| |
|---------------------|
| 付図1 第1次4・7トレンチ土層断面図 |
|---------------------|

図版目次

| | |
|---------------------------------|----|
| 第1図 第1次調査出土土器 | 57 |
| 第2図 第2次・4次・6次調査出土土器 | 58 |
| 第3図 第6次調査出土土器 | 59 |
| 第4図 第6次調査出土土器、第1次調査出土石器 | 60 |
| 第5図 第1次・4次調査出土石器 | 61 |
| 第6図 第4次・6次調査出土石器、第2次・4次調査出土金属製品 | 62 |

写真図版目次

卷頭写真 一夜城俯瞰写真

| | | |
|------|---|----|
| 図版1 | 周辺関連遺構群を望む 第1次1トレンチ南壁堀断面 第1次2-1トレンチ北壁堀断面 | 63 |
| 図版2 | 第1次2-2トレンチ北壁西辺堀外肩 第1次2-3トレンチ 同北壁 | 64 |
| 図版3 | 第1次3トレンチ北壁堀断面 第1次4-7トレンチ西壁 第1次4トレンチ西壁堀断面 | 65 |
| 図版4 | 第1次4トレンチ東壁堀断面 同西壁埋設管 同東壁土坑 | 66 |
| 図版5 | 第1次7トレンチ西壁土壙断面 同東壁土壙断面 同土壙内石列 | 67 |
| 図版6 | 第1次4トレンチ南側 第1次6トレンチ 同上 | 68 |
| 図版7 | 第2次調査区全景 第2次竪穴建物址1 第2次竪穴建物址2 | 69 |
| 図版8 | 第2次竪穴建物址2カマド前面礫 同カマド 第2次上面溝 | 70 |
| 図版9 | 第3次8トレンチ石積 第4次調査区全景 第4次竪穴建物址1 | 71 |
| 図版10 | 第4次溝址1 同上 第5次調査前 | 72 |
| 図版11 | 第5次南東隅土壙断面 第5次南側新設水路 第5次堀検出状況 | 73 |
| 図版12 | 第6次調査前状況 第6次調査区全景 第6次竪穴建物址1全景 | 74 |
| 図版13 | 第6次竪穴建物址1カマド 第6次竪穴建物址1完掘 第6次竪穴建物址2 | 75 |
| 図版14 | 第6次竪穴建物址3 第6次堀トレンチ1北壁 第6次堀トレンチ2南壁 | 76 |
| 図版15 | 第1次2～4トレンチ 4トレンチ四耳壺 第1次7トレンチ 7トレンチ灰釉陶器椀 第1次6トレンチ 第2次竪穴建物址1 | 77 |
| 図版16 | 第2次遺構外 第4次遺構外 | 78 |
| 図版17 | 第6次竪穴建物址1土師器甕 同土師器甕・羽釜 同灰釉陶器皿 同灰釉陶器椀 同段皿墨書「有」 第6次遺構外 | 79 |
| 図版18 | 第6次遺構外土師器羽釜 第6次表採 第1次遺構外石器 第1次表採 第4次遺構外石器 第6次遺構外石器 | 80 |

第1章 経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成17年度に富県北部保育園・富県南部保育園の統合に関わり、通園道路の市道桜井殿島線の拡幅改良が要望された。当初土壠の移転復元が検討され、事業実施に向けた地元説明会を5回開催したが、平成21年11月長野県教育委員会から「一夜の城」の重要性に関し住民に周知するよう指導があり、同月13日に遺跡に関する住民説明会を開催した。重要な遺跡であることへの理解は得られたが、遺跡の一部を破壊してもやむを得ないという意見が多数あった。

こうした中、同年12月22日長野県考古学会より、

- ・「一夜の城」の名称も『信長公記』に記されている歴史的出来事を地元で伝承してきたことを如実に物語るものとして注目される
- ・敵城の近くに築かれた陣城は信州では一夜城以外にはないといわれ、県内に唯一残されているとして歴史的価値は高く、東国の城郭研究上極めて重要な遺構である

として、遺構を現状保存し適切な保存整備を行い貴重な文化財として活用すべき、また、国民的文化遺産として将来的な保存・活用・復元を視野に入れつつ、一夜城跡の範囲や全容の究明公開をすべきという要望書を受領した。同月25日、

- ・現状保存及び活用について、正確な周辺地域の調査を行った上で記録保存を行うとともに、現地への案内看板設置を含め貴重な文化財として活用していきたい
- ・一夜城跡の範囲や全容の究明・公開について、今回の工事の事前の発掘調査において周辺地域の現況測量もあわせ行う予定で、その報告書・関係資料について全面的に公開していきたい

旨回答書を提出した。これを受け、平成22年1月6日、改めて県考古学会から事前の調査等への学会員の参加や、地域住民への講演会実施を内容とする要望書が提出された。

同月15日、伊那市建設課、県教委及び市教委の3者で現地協議を実施した。県教委からは、県遺跡指導委員会から中世城館跡で重要な遺跡であるのでその保存を図ることという指導があり、①一夜城一帯を調査し遺跡の範囲確認、歴史的位置づけを調べること、②調査に専門家（県考古学会）が加わること、との指導を受けた。これに基づき、「一夜の城 事前詳細調査実施計画」を策定し県教委と3月にかけて協議を実施した。なお、上述の県考古学会の再要望に対しては、県教委と協議中であり慎重に検討していく旨、1月21日回答した。こうした経過を踏まえ、同年3月28日には、県考古学会と共に講演会『高遠城の攻防と一夜の城』を開催した。

第1次の範囲確認調査については、平成23年（2011）8月調査計画書を県教委に提出するとともに、同月一夜の城調査指導委員会設置要綱を定め9月1日指導委員会を開催し指導助言を得ながら実施した。

第1次調査後、調査結果を基に市建設課・市教委が保存に向けた協議を行い、土壠以外で道路幅が狭い部分を短くするよう道路線形を変更し、平成25年5月地元区へ説明を行った。

以上の経過を踏まえ、平成26年10月、土壠に影響しない範囲で市道の拡幅と見通し確保のための工事を実施した。

第2節 調査の経過

(1) 事前詳細調査

事前詳細調査実施計画に基づき、事前の文献等関連調査を平成22年2～3月実施した。3月18日一夜城と黒河内城の縄張図を作製した。また、『伊那市の小字名』(伊那市教委 1991)を確認後、地元への聞き取り調査を実施した。

(2) 範囲確認調査

1) 第1次調査

諸協議に基づき、平成24年1月16日試掘調査に着手した。前述県教委へ提出の計画書に基づき、一夜城の堀の有無、土壘、その内外の遺構確認と築城時期の把握に焦点を絞って実施し、同年3月31日現地調査を終了した。

2) 第3次調査

平成26年1月29日、虎口南側の東辺土壘外法裾部の石積みについて、土壘に付属するか後補のものであるか確認するため、(第1次調査のトレンチ番号に続けて) 8トレンチを設定して調査を実施した。

(3) 緊急発掘調査

1) 第2次調査

平成25年9月19日～9月24日、個人住宅建設に先立ち発掘調査を実施した。

2) 第4次調査（伊那市富県4825番地）

平成26年5月28日土壘の一部が削平され敷鉄板されているとの地域の考古研究者からの通報を受け、現地を確認したところ、隣接する個人住宅の建て替えが計画されていることを把握した。事業者との協議により、一夜城に隣接する地点であることから、既存住宅解体後調査をすることとし、新たに建設する住宅の全範囲を調査対象とした。

諸協議に基づき、平成26年6月17日～7月9日現地調査を実施した。

3) 第5次調査

当初計画による市道拡幅は、一夜城の土壘の掘削を伴うものだったが、諸協議を経て土壘は現状保存とし、交通事故防止対策のための代替措置として土壘南側で退避できるよう既存水路をV S側溝に敷設替えすることとなった。

諸協議に基づき、調査を平成26年11月20日～12月25日実施した。

4) 第6次調査

一夜城の東側で個人住宅建設が計画され、平成29年3月6日～4月21日に発掘調査を実施した。

第3節 調査体制

(1) 調査

1) 第1次調査

調査担当者 早川 宏、濱 慎一

作業員 北島貴峰、北原房之、小池知子、小松勝司、原 正一

2) 第2次・第3次調査

調査担当者 早川 宏、濱 慎一、下島一志

作業員 北原房之、小松勝司、原 正一

3) 第4次・第5次調査

調査担当者 早川 宏、濱 慎一、下島一志

作業員 小松勝司、原 正一、小池文男

4) 第6次調査

調査担当者 早川 宏、濱 慎一、下島一志、登内茂利

調査員 松下則典

作業員 小松勝司、原 正一、寺平好久、伊東一隆

5) 整理作業

調査担当者 濱 慎一、馬場保之

調査員 小池 孝、松下則典

作業員 濱裕貴子、堀内百合子、大藏巳夏、竹村 泉

(2) 指導

1) 長野県教育委員会、長野県埋蔵文化財センター、市川隆之、河西克造、小平和夫、笹本正治

2) 伊那市一夜の城調査指導委員会（平成22年度）

竹入弘元、御子柴泰正、北原紀孝、丸山敞一郎、中井 均

(3) 協力

長野県考古学会

(4) 調査主体 伊那市教育委員会

教育長 久保村清一 (平成23年度～平成26年5月16日)

北原 秀樹 (平成26年5月17日～平成29年度)

笠原 千俊 (令和4年度)

教育次長 竹松 武登 (平成23年度)

原 秀夫 (平成25・26年度)

大住 光宏 (平成28・29年度)

馬場 文教 (令和4年度)

事務局 伊那市教育委員会 生涯学習課

生涯学習課長 田中 博文 (平成23年度)

森田 英和 (平成25・26年度)

小松 博康 (平成28・29年度)

北林 太 (令和4年度)

文化財係長 早川 宏 (平成23～29年度)
酒井 瑞夫 (令和4年度)

文化財係 下島 一志 (平成25・26年度)
登内 茂利 (平成28・29年度)
濱 慎一 (令和4年度)
大澤 佳寿子 (平成26～令和4年度)
飯塚 政美 (平成23年度)
松下 則典 (平成29年度～令和4年度)
有賀 敦香 (　　〃　　)
酒井 美穂 (令和4年度)
馬場 保之 (　　〃　　)

創造館係 濱 慎一 (平成23～26年度)

文化振興課

文化振興係 濱 慎一 (平成28・29年度)

第2章 環境

伊那市は長野県の南部に位置し、南東側は赤石山脈(南アルプス)を境に山梨県と静岡県に接し、西側は木曽山脈(中央アルプス)を境に木曽地域に接している。市域面積は667.93km²で、松本市、長野市に次いで県下3番目に広く、赤石山脈・木曽山脈という2つの山脈に抱かれた中央部には標高約600mの伊那盆地が開け、天竜川が三峰川などの支流を合わせて南下する。天竜川に沿って断層地塊運動によって形成された段丘が発達し、各支流は山麓部で扇状地を形成するとともに、次第に段丘を開析する。

伊那地域の中央部は南北にJR飯田線が走り、中央本線・東海道本線へ連絡しているほか、中央自動車道や国道153号をはじめ、国道361号、同152号及び県道が縦横に走り、東西・南北が結ばれている。

市域は、伊那・富県・美篶・手良・東春近・西箕輪・西春近・高遠町・長谷の9地区からなり、主に合併前の町村名・域を継承している。このうち、伊那地区は天竜川の両岸に跨っており、西箕輪・西春近(一部東春近の飛び地あり)は天竜川右岸の竜西に、富県・美篶・手良・東春近・高遠町・長谷は左岸の竜東地区にある。

第1節 自然環境

関東地方から九州地方まで1,000km以上にわたり続く我が国最大級の断層、中央構造線が伊那市北端の杖突峠から南端の分杭峠まで貫いている。中央構造線を境として、東側は主に変成岩で形成されており、南アルプス周辺部は固結堆積物が広がっている。西側は主に深成岩で形成されており、三峰川や天竜川といった河川の周辺では未固結堆積物が広がっている。また、杖突峠と守屋山の周辺部では火山性岩石が確認できる。

伊那市は、東春近地域の標高590mから塩見岳山頂の3,052mまで、標高差が約2,500mに及ぶことから、多種多様な植物が生育している。植生図によると、最も広範囲に広がるのは人が暮らす平野部や人里近い山にみられる「植林地・耕作地植生」となっており、農作物や生活利用が可能なカラマツやヒノキなどの植林が多い。「植林地・耕作地植生」より標高が高くなると、落葉広葉樹林が増える。これらの落葉広葉樹の多くは自然植生ではなく、二次林など人間活動の影響によって生まれた植生である。また、落葉広葉樹ばかりでなく、常緑広葉樹林域も西山の山麓にわずかに見られる。さらに標高が高い東西の山岳地域は、亜高山針葉樹林域となっており、元々生育していた自然の植生が多くなっている。

伊那市を特徴づける植生として、河岸段丘沿いに発達した段丘林が挙げられる。農地や市街地として開発が進んだ平野部には自然植生が少なく、平地林や山地から平地にかけて連続する段丘林は緑のベルトとして、多くの動植物の生息・生育環境になっている。

気候は、内陸特有の気候となっている。過去10年間の気象データをみると、最高気温は33~37℃台、最低気温は-14~-9℃台で推移しており、年間の寒暖差が海岸地方に比べて大きい特徴がある。降水量は年間1,100~1,880mmの間で推移しており、年間降水量の平均値は1,557mmである。長野県内南部の他地点の年間降水量と比較した場合、伊那市の降水量は少ないといえる。また、平成5年(1993)から平成22年(2010)の気象庁データによると、平均年間日照時間は2,094.1時間であり、長野県内でも日照時間の多い地域となっている。

第2節 歴史環境

市内には426か所の埋蔵文化財包蔵地が把握されており、天竜川の両岸に展開する段丘面上を中心に、旧石器時代以降各時代の多くの遺跡が分布する（挿図1。なお挿図中の数字は遺跡番号を表す）。

（1）旧石器時代

日本列島に人類が生活し始めたのは後期旧石器時代（約4万年前）であり、この時代の戸台秋葉洞窟[長]では、化石化した大型哺乳動物の踵骨が炭化物とともに出土し、人工的に縦に割られ髓が食べられた形跡が残っている。また、牧ヶ原遺跡〔伊(西)〕からは、尖頭器22点、ナイフ形石器3点、削片257点等計488点が出土し、旧石器時代末から縄文時代草創期の、主に尖頭器を作る石器製作跡と考えられる。なお、牧ヶ原遺跡の600m東の南箕輪村神子柴遺跡では、旧石器時代から縄文時代に遷り変わる時期にあたる約1万5千年前の石器が87点発見され、「神子柴型尖頭器」、「神子柴型石斧」と呼ばれる尖頭器や石斧は国重要文化財に指定されている。この他、市内には12か所に旧石器時代の遺跡があり、ほとんどが天竜川の西側にあるが、美篤・東春近・高遠町・長谷地域で旧石器時代の石器が出土したという情報もあり、市のほぼ全域で旧石器時代の人々が活動していたと考えられる。

（2）縄文時代

市内には297か所の縄文時代の遺跡があり、これらの立地をみると、段丘面の端部や山の麓に多く分布しており、ともに狩猟・採集・漁撈に都合が良く、また水の得やすい場所にあったと考えられる。

草創期の牧ヶ原遺跡からは、無文土器片が1点出土し、他に伊勢並遺跡〔伊(西)〕からも数点の土器片が出土しているとされる。井の久保遺跡（同1981、〔西春〕）では有舌尖頭器が出土している。

早期になると遺跡数も増加し、浜弓場遺跡（伊那市教委1973、〔手〕）・児塚遺跡（同1979a、〔西春〕）・三ツ木遺跡（同1967b、〔富〕）・細ヶ谷B遺跡（長野県教委1973、〔西春〕）等からは押型文土器が出土している。また、高遠北小学校建設の際に発掘調査された宮の原遺跡（高遠町教委1978、〔高〕）からは早期末の堅穴建物址2棟が見つかり、出土した土器には東海地方の土器の特徴が見られる。同時期の遺跡として、南村遺跡（伊那市教委1979b、〔西春〕）・伊勢並遺跡（同1993）・カンバ垣外遺跡（同1979c、〔西春〕）が調査されている。

前期前半には、多くの土器片を伴う住居址があり、集落遺跡として、城楽遺跡（同2001a、〔伊(西)〕）・上島遺跡（同1974、〔西春〕）の調査例がある。

中期になると遺跡数が増加する。御殿場遺跡（同1967a、〔富〕、県史跡）からは中期の建物址が22棟見つかり、中期後葉の12号住居址の床面からは、国重要文化財「顔面付釣手形土器」が完全な状態で出土した。また、月見松遺跡（市史跡、長野県教委1974、伊那市教委1968a、〔伊(西)〕）では、中期初頭から後葉にかけての住居址が103棟調査されており、集落構造の変遷が把握された重要な遺跡となっている。特に、中期中葉の28号住居址からは長野県宝に指定されている「顔面把手付大深鉢」が出土している。これら遺跡からの「唐草文系土器」をはじめとする縄文時代中期中葉から後期にかけての土器10点は、平成30年（2018）に「信州の特色ある縄文土器」として長野県宝に指定された。他に集落遺跡として、東田遺跡（同1979b、〔西春〕）・八人塚遺跡（同1979d、〔伊(西)〕）・丸山清水遺跡（同1978a、〔伊(西)〕）・石塚遺跡（同2000・2002a、〔伊(西)〕）・今泉遺跡（同2004、〔伊(西)〕）・浜弓場遺跡・伊勢並遺跡（同1995）・島崎遺跡（同1990、〔手〕）・金鋸場遺跡（同1999a、〔西箕〕）・北割遺跡（同1977a、〔西箕〕）、宮垣外遺跡（同1980a、〔西春〕）・カンバ垣外遺跡・横吹遺跡（同1983、〔西春〕）・



344.一夜城 386.高遠城跡 6.北割 11.金鋸場 31.宮垣外 34.牧ヶ原 40.石塚 41.今泉 45.月見松
 50.八人塚 53.丸山清水 69.伊勢並 75.山本田代 77.城平 79.山の根 90.大境 91.百駄刈 95.細ヶ谷B
 100.名廻東古墳 108.中村 111.カンバ垣外 112.丸山 116.児塚 117.北丘B 120.南丘A 123.眼子田原B
 131.東田 133.井の久保 135.山の下 137.西春近南小学校 138.鳥井田 139.菖蒲沢 140.富士塚古墳
 145.和手 147.城の腰 149.横吹 151.下牧経塚 160.島崎 163.辻西幅 168.下手良中原 169.大原
 177.堂垣外 178.野口 193.浜弓場 200.砂場 202.宮の平 228.荒神(大久保) 243.老松場古墳群
 253.御殿場 264.まこもが池 272.芝王 280.南村 287.三ツ木 290.福島 296.末広六道原 362.富岡

挿図1 調査遺跡及び主要遺跡位置図 (S=1/100,000)

北丘B遺跡（長野県教委1973、[東]）・山の根遺跡（同前、[西春]）の調査例がある。

後晩期には、気候の寒冷化が進み、市内の遺跡はほとんど見られなくなる。後期の百駄刈遺跡（同前、[西春]）は人頭大から拳大の礫の中に6本の石棒が立てられている配石遺構があり、これを中心に5棟の竪穴建物が建てられていた。建物址等からは、土偶の顔の部分や石棒等祀りに使う道具が多く出土し、配石遺構が大切な祈りの場であったと考えられる。中部高地において晩期遺跡は少ないが、野口遺跡〔手〕からは、石櫛状墳墓が見つかっており、長方形の墓の中7か所に焼かれた人骨31体分が葬られていた（長野県史刊行会1983）。他に晩期の遺跡としては、土坑17基が見つかった末広六道原遺跡〔美〕が挙げられ、東海地方からもたらされた条痕文をもつ土器片が多く出土している。

（3）弥生時代

弥生時代の遺跡は市内に95か所あるとされるが、これまで弥生時代の遺跡の発掘事例が少なく、調査された遺構・遺物は後期が大半を占める。

弥生文化の受容期、前期の市域の様相は十分明らかにされていないが、まだ縄文時代晩期の文化が続く一方、東海地方で受容・変質した弥生文化が天竜川沿いに北上し、伊那谷から諏訪盆地・松本平へ伝わったと考えられる。市内では、国道153号伊那バイパス建設工事に伴う大久保（荒神）遺跡〔伊(東)〕調査で、弥生時代前期末～中期初頭と考えられる大型の袋状土坑3基が調査され、そのうちの1基から、弥生文化の始まりと広がりを示す「遠賀川系土器」の壺が出土している。出土状況から墓壙に副葬品として納めたものと考えられ、東海地方の特徴を持つ土器片も出土している。この他、中村遺跡〔西春〕で弥生前期末～中期中葉の土器片が出土している。

中期は、前期同様農耕文化を受容した集落の状況はなお明らかではないが、天竜川の氾濫原に面した段丘の突端部にある中村遺跡からは中期初頭から後半にかけての土器片が多く出土しており、眼下の低湿地で水田耕作を行っていたと考えられる。

後期になると、市内でも集落遺跡が見られるようになり、これまで一部の段丘の端に作られていた集落がほとんどの段丘に広がり、山麓の扇状地にまで遺跡が見られるようになった。これは、人口増加により、天竜川や三峰川の支流の谷地形を水田に開発しながら、より山際の高い場所へ集落を移していくためと考えられる。山麓の最も奥まった位置にある宮の平遺跡（伊那市教委2012、〔手〕）は、6棟の竪穴建物址が調査され、この時期に新しく開かれた小規模集落の在り方が判明した。一方でこうした小規模集落は短期間で廃絶する特徴がある。対照的に、規模の大きな拠点的な集落があり、西春近地域の鳥井田遺跡・横吹遺跡・城の腰遺跡の3遺跡では、一部調査にとどまるものの、後期の竪穴建物址24棟が調査され、相当規模の集落が営まれたと考えられる。これらの南側は段丘崖となっており、そこからの湧水により段丘崖下に広大な湿地帯が形成され、安定した生産基盤が確保されたと考えられる。このうち、鳥井田遺跡では竪穴建物址の一つからは鉄片1点が出土し、後期には市域で鉄器が確実に用いられていたことが分かる。この他、中村遺跡では、6棟の竪穴建物址とそれを丸く囲むように幅2m、深さ1.5mの環濠がある集落が見つかり、最大の建物からは多くの土器や石器が出土した他、ヒスイ製の勾玉が1点出土している。未分化ながらも階層社会の萌芽が看取される。この他、中村遺跡・和手遺跡（長野県教委1973、〔西春〕）で後期の集落が調査されている。また、まこもが池遺跡（伊那市教委2002b、〔伊(西)〕）では方形周溝墓2基、富岡遺跡（同1999b、〔美〕）では5基が調査されている。

(4) 古墳時代

市域には、昭和36年（1961）の時点では243基もの古墳があったとされており、上伊那郡全体で当時407基の古墳があったとされるので、約60%の古墳が伊那市域に集中していた。その後、開発等で古墳の破壊が進み、現在伊那市で111基（現存87基、伊那市史編纂委員会1983）の古墳が、上伊那では176基（長野県史刊行会1981）の古墳が正式に記録されているのみである。『伊那市史』では、これら全ての古墳が古墳時代後期（5世紀末～6世紀末）の後半以降に築造されたものとされてきたが、市内の古墳で出土遺物の記録が残るもの、調査が行われたものは、名廻東古墳（同1970）・名廻東古墳（長野県教委1973、[西春]）・富士塚古墳（同前）等わずか9基のみで、その他の古墳については築造時期、他の古墳群との関係等不明である。

これまで円墳または双円墳とされてきた老松場古墳群1号墳について、地域の小学生から前方後円墳なのではないかとの疑問が出され、測量の結果前方後円墳または前方後方墳の可能性が示唆された。その後始まった市教委と関西大学文学部考古学研究室による測量・発掘調査により前方後円墳であることが確認され、築造時期については古墳時代前期末～中期初頭（4世紀末～5世紀初頭）の可能性が高まった（伊那市教委他2022）。これまで南信地方の前方後円墳は、上伊那地域では箕輪町松島の松島王墓古墳1基のみ、諏訪地域に1基、飯田・下伊那地域に24基が知られている。その全てが5世紀後半以降の築造とされており、上伊那地域では2例目の発見となるとともに、南信地方では最古、県内でも比較的古い前方後円墳であることが明らかになった。

老松場古墳群が所在する東春近の段丘端部には、老松場1号墳を最北端とし、南に円墳からなる古墳群が複数分布している。老松場古墳群を構成する3～6号墳はじめこれらの円墳は高さが1m前後の低墳丘のものが多く、築造時期や墳墓群の構成等見直しが必要となってきている。

該期の集落があったと考えられる遺跡は、現在31か所が把握され、古墳が多く見られる旧伊那市域では天竜川左岸（竜東地域）の9か所が推定されているのみで、前期の堂垣外遺跡〔手〕、後期の砂場遺跡（伊那市教委1978c、[手]）の2遺跡で1棟ずつの堅穴建物址が見つかっている。しかし、近年これまで全く集落が把握されていなかった天竜川右岸（竜西地域）でも、西春近南小学校遺跡〔西春〕における宅地造成に伴う発掘調査で、老松場1号墳とほぼ同時期の古墳時代前期末の堅穴建物址1棟を検出した。古墳群に着目してこれまで該期集落の空白域とされた地域についても見直しを行っていくとともに、前代の拠点集落や段丘上の小規模集落についても注意が必要である。

老松場古墳群がある東春近地域では、低位段丘上の端部に北から南へと41基の古墳が並んでおり、崖下の微高地に現在の集落があり、少し離れた場所に天竜川の後背湿地が広がる。三峰川以北、伊那（竜東）地域の上牧や福島についても同様で、天竜川左岸が望める、低位段丘端部の南北に37基の古墳が並び古墳群が占地している。現在、市の遺跡地図では古墳時代の埋蔵文化財包蔵地となっていない段丘直下の市街地化した平坦面に、古墳群を築造した人々の集落遺跡がある可能性が高い。

(5) 奈良・平安時代

奈良時代以前の7世紀後半には、藤原京から発掘された木簡の中に、「科野国伊奈評 大贊」と書かれたものがあり、この頃には「科野国」が成立し、天竜川流域の「伊奈評」から都へ税の貢納がなされていた。大宝元年（701）制定の大宝律令では、「国評制」から「国郡制」に改められ、信濃国には伊那郡をはじめ10の郡が置かれた。平安時代中期に書かれた『倭名類聚抄』には、伊那周辺とみられる3つの

郷が載っている。このうち、「伊那郡 福智郷」は富県の南福地・北福地・貝沼を中心とした天竜川の東側、北は三峰川、南は小渋川までの範囲とされ、「伊那郡 小村郷」は天竜川西側の小沢川以南、西春近、宮田村一帯と考えられている。小村郷から都へは布が納められており、「信濃国伊那郡小村郷交易布一段、天平十年十月」と書かれた麻布が正倉院に現存している。「諏訪郡 返良（弓良）郷」は現在の手良を中心とする郷で、天竜川の東側、三峰川以北の地で、東は藤沢川までの範囲といわれている。

都と東国諸国を内陸で結んだ官道である東山道については、『延喜式』にみえる上伊那郡内の「宮田」及び「深沢」の駅家の位置から市域では竜西を通過し、古墳時代の大和政権が東北地方の支配を目的として整備した「古東山道」を一部利用して整備されたと考えられている。この時代、交通・運輸や軍事の点から馬は非常に重要であり、その飼育が全国各地で積極的に行われた。『延喜式』には、朝廷用の馬を飼育する「御牧」が長野県内に16あったことが記されており、上伊那には笠原牧（現在の伊那市美篶笠原）、平井弓牧（現在の辰野町平出）、宮処牧（現在の辰野町伊那富、宮所）の3つが置かれていた。美篶笠原には、「駒石」「駒形」「ませぐち」「牧垣内」等の牧に関係あると考えられる地名が残る。

奈良時代以降、有力貴族や寺社の土地所有が全国に広がり、平安時代後期には、伊那周辺にも諏訪上下社領の「藤沢黒河内」や近衛基道の所領（殿下御領）「落原庄」、左馬御寮領の「笠原御牧」、「春近領」といった荘園があったことが知られている。

市内には奈良時代の遺跡が44か所、平安時代の遺跡が152か所あり、当時の人々の生活の様子が明らかになってきている。奈良・平安時代の遺跡の立地は、段丘端部や小河川沿い、山際の弥生時代、古墳時代の集落と重なる所が多く、やはり大河川流域の湿地帯や小河川沿いで水田耕作を行っていたと考えられる。菖蒲沢遺跡（長野県教委1973、[西春]）は奈良時代の集落遺跡で、10棟の堅穴建物が調査され、そのうち1棟は他より2倍近く大きなものでそれを取り囲むように集落が形成されていた。福島遺跡（伊那市教委1977、[伊（東）]）は、平安時代の諏訪郡返良（弓良）郷の集落の1つと考えられる遺跡で、天竜川の東、支流棚沢川の北にある段丘端にあり、堅穴建物址が1次調査で17棟、2次調査で10数棟検出されている。1つの集落に大小の堅穴建物があり、大きな建物は郡の下級官人の住居であったと考えられ、大量の貯蔵用土器や、官人が身に着ける革帶（ベルト）の鎍（飾り金具）、石帶（ベルトの飾り）等が見つかっている。この頃には、農民たちの中から生まれた富裕な者が政治に関わり、あるいは人々の間に主従関係が生まれていたと考えられる。これらの堅穴建物の廃絶後には、掘立柱建物が何棟も建てられていたようで、市内では他に類を見ない平安時代の大規模集落だったと考えられるが、調査範囲は遺跡のごく一部に留まり、大半は現存していない。奈良時代の集落遺跡として大原遺跡（同2001b、[手]）・山の下遺跡（同1980b、[西春]）・和手遺跡・鳥井田遺跡・横吹遺跡・城の腰遺跡、奈良時代から平安時代にかけての集落遺跡として金鋸場遺跡・下手良中原遺跡（同2001b、[手]）・大原遺跡・宮垣外遺跡（同1980a、[西春]）・芝王遺跡（同1984、[富]）、平安時代の集落遺跡として今泉遺跡・月見松遺跡・石塚遺跡・宮の平遺跡・南村遺跡（同1979b、[西春]）・東田遺跡（同1979b、[西春]）、丸山清水遺跡・辻西幅遺跡（同1998b、[手]）・眼子田原遺跡（同1977c、[西春]）・南丘A遺跡（長野県教委1973、[西春]）・大境遺跡（同前、[西春]）・山の根遺跡・城平遺跡（同前）・山本田代遺跡（同1974、[西春]）の調査例がある。このほか市内の遺跡からは、市有形文化財に指定されている和同開珎銅錢（下手良中原遺跡 [手] 出土）、綠釉陶器（金鋸場遺跡 [手] 出土）、経筒と和鏡（下牧経塚 [西春] 出土）など、地域の豊かさや信仰の様子を伺い知る貴重な資料が出土している。

(6) 中世

鎌倉時代、関東御領である伊那春近領は將軍を領家とした所領で、北条得宗家が地頭としてその所領運営や徵税を請け負い、地頭代が公田を百姓に請け負わせ年貢を徵収して鎌倉將軍家に運上していた(井原1999)。鎌倉時代初期の春近領では、鎌倉幕府の御家人で工藤氏一族の小井亘氏が小出二吉郷の地頭代として勢力をもっており、曾我兄弟の仇討に關係し伊那に流罪となった犬房丸(工藤祐時)の伝承は幕府と伊那の氏族の關係性を物語る。南北朝時代の伊那は、南朝と関わりの深い地域で、後醍醐天皇の第八皇子・宗良親王は足利尊氏に敗れた南朝方の再興を図るため、大河原(現在の下伊那郡大鹿村)に拠点を置き、地域の有力者の力を借り中央構造線の谷を行き来しながら活発に活動した。宗良親王に關わる史跡が長谷地域、高遠町地域には多く残されている。前述の中央構造線の谷から山室、荊口、芝平を抜けて諏訪盆地に至る道は「法華道」と呼ばれ、平安時代に最澄が法華信仰(天台宗)を伝えた道で、室町時代には日蓮宗の布教にも使われた。街道沿いの寺院にある遠照寺の釈迦堂は16世紀初めに建てられた建物で、内部の多宝小塔とともに国重要文化財に指定されている。これらは、日蓮宗と深いつながりがあり、優れた技術を持った大工集団・池上一門の職人が建てたものである。彼らは高遠、長谷周辺を拠点に広域に活動したが、後に甲斐の武田氏に抱えられ、技術面からも戦国大名をサポートするようになっていった。

伊那周辺は長野県内でも城館跡が多いことで知られ、早いものは鎌倉時代、大半は室町時代から戦国時代に築かれたものとみられ、地域の有力者の館跡、山城、狼煙台等様々な城館跡がある(長野県教委1983)。15世紀から16世紀にかけて、伊那市域には比較的狭い地域ごとに領主が存在し、それぞれに上下関係や協力関係の秩序を保ちながら、時に大きな勢力に向かう際には、地域が一体となった行動をとっていた。応永7年(1400)の大塔合戦に参加した「藤沢」・「笠原」・「大島」・「春近の人々」・「山田」・「小井亘」・「沢堂」、永享12年(1440)の結城合戦に参加した「藤沢殿」・「甲斐沼殿」・「小井亘殿」、武田晴信(信玄)が上伊那へ侵攻した際に最後まで抵抗した「溝口」・「黒河内」・「伊奈部」・「殿島」をはじめ、他にも「市瀬」・「浦野」・「御園」・「福島」といった多くの地侍が伊那周辺におり、これらの城を利用していたと考えられる。また、百姓の中でも上層に位置する人々が居住していた屋敷も「城」と呼んでおり、特に城館跡が多い富県地域には字名ごとに1つ程度の城館跡がある。発掘調査された城館跡として、室町時代前期から後期にかけての富岡遺跡、鎌倉前期頃成立し室町後期まで存続したカンバ垣外遺跡、鎌倉中期頃から室町後期の丸山城跡(同1980c、[西春])がある。

前述のとおり、甲斐守護武田晴信は信濃へ侵攻し、天文11年(1542)に諏訪を手に入れると、続いて高遠氏を攻め、同14年(1545)に高遠を手中に収めた。高遠は諏訪から伊那谷へ抜ける交通の要衝で、駿河や遠江に進出するための重要な地点であったことから、同16年(1547)に高遠城を修築し、城主に武田(諏訪)勝頼や武田信廉など、自分に近しい人物を置いて伊那一帯を治めさせた。信玄没後武田家を継いだ勝頼が長篠の戦いで織田信長に敗れると、武田家は急速に勢力を失っていった。天正10年(1582)、織田信長は武田家を滅ぼすため、嫡男の信忠を大将として、尾張(現在の愛知県西部)から信濃へ侵攻した。当時の高遠城主は信玄の五男・仁科盛信(信盛とも)で、織田の大軍を相手に奮戦したが、高遠城は落城し、盛信も自害した。この時に織田軍が飯田から持ってきた梵鐘、鰐口、陣太鼓や、織田信忠が陣を敷いたと伝えられる「一夜の城」、混乱から地域を守ろうとした村人たちが織田軍から入手した「禁制」等が今に伝えられている。

同年に起きた本能寺の変後領主が不在となった信濃国は混乱に陥り、高遠城や周辺領地をめぐる争いが起こったが、最終的に武田家の旧臣・保科正直が高遠城を抑え伊那周辺を手に入れた。後に保科正直が徳川家康に従ったことで、伊那は徳川勢力の下で保科氏が治める地となったが、豊臣秀吉が天下を統一すると保科氏は下総国へ移され、徳川の世に再び高遠の地を宛てがわれ高遠城主となった。

(7) 近世

江戸時代には、伊那周辺は高遠城主が治める高遠領（高遠藩）と幕府領（天領）に分けられ、保科氏・鳥居氏・内藤氏の順に高遠領を治めた。現在の手良・福島・西箕輪は概ね幕府領で、代官支配地、旗本知行所、預り地が様々に入り組み、隣村同士、支配者が異なるという状況も生まれた。

江戸時代の高遠は、政治の中心地のみならず、多くの人や物が集まる経済・文化の中心地でもあった。もともと鉢持神社や建福寺の門前町であった西高遠は、江戸時代になると城下町として発展し、伊那谷と諏訪を結ぶ杖突街道（金沢街道）の一宿駅でもあったことから、非常に賑わった。江戸時代の市域には遠隔地を結ぶいくつかの街道が通っていたが、杖突街道と直交する形で伊那街道が伊那谷を南北に走っていた。塩尻（現在の塩尻市）から三河（現在の愛知県東部）へ抜ける街道で、中山道の脇往還だった。荷物の輸送を行う民間業者「中馬」が盛んに往来したことから、別名「中馬街道」とも呼ばれ、目的地間を早く安く行き来する中馬は、地場産業の振興や商品経済の発展に一役買い、地域の流通経済を支えた。また、中央構造線の谷を南北に通る道は、江戸時代になると火伏の神を祀った秋葉神社への参詣道、信仰の道「秋葉街道」として多くの人が行き来するようになった。沿線には当時の秋葉信仰を物語る石造物等が現在も残る。街道の発達は文化の発達にもつながり、秋葉街道を通って入ってきた文化の1つに歌舞伎芝居がある。娯楽が少なかった時代に村人たちが旅芸人から歌舞伎を教わり自分たちで演じるようになったのが農村歌舞伎で、長谷中尾では「中尾歌舞伎」として現在も受け継がれている。また、街道沿いや集落の入口には、道標や道祖神・馬頭観音・庚申塔といった石造物が数多く造られ、これらの製作を担った「高遠石工」は、高い技術を持つことから伊那周辺だけでなく全国各地へ出かけ石造物を刻んだ。江戸時代末期、幕府が諸外国の脅威に備え、品川御台場を築いた際にも、多くの高遠石工が工事に関わっている。

断層地塊運動により形成された天竜川に沿う段丘面や、天竜川支流が形づくる扇状地は、江戸時代初期までは水が得にくく、荒れた原野が広がる土地であった。江戸時代後期、用水建設に尽力した伊東伝兵衛は、高遠・富県・東春近の広範囲を潤した「伝兵衛井筋（鞠ヶ鼻井筋）」を建設したことで知られている。他にも江戸時代後期から明治時代初頭にかけて、「六道の堤」や「月蔵井」「木曾山用水」「艶三郎の井」等が造られ、市内各所で新田開発が進んだ。一方、天竜川やその支流三峰川・小黒川等流域は頻繁に洪水被害に見舞われており、江戸時代以降霞堤築堤等治水対策が行われてきた。

江戸時代、地方の教育を担ったのは、藩が開き武家が通った藩校（万延元年《1860》開校）と、武家以外の人々が通った寺子屋・私塾であった。藩校「進徳館」では漢学（儒学）と筆道、武術を中心に教えられ、伊澤修二や中村弥六等、日本の近代化を支えた人材を多く輩出した。また、上伊那は全国的にみても寺子屋が多い地域であったといわれ、伊那市域にも数多くの寺子屋や私塾があった。読み書き・算盤（算術）・四書等の素読や詩歌・俳諧・謡い・作法等多岐にわたり、より高度な漢学、国学等の学問も教えられていた。このように、江戸時代後期の伊那は比較的学問が盛んな地域で、様々な学びを通して成長した人々が、地域を支えていた。

第3章 調査の成果

第1節 事前詳細調査

(1) 現況調査

1) 遺構範囲確認踏査（挿図2）

一夜城跡に関連すると考えられる遺構群の範囲把握を目的に踏査を実施した。

一夜城跡は、南北85m程度、東西60m程度の規模を有し、一辺50m程度の土壘がほぼ正方形に、現況南から東を経て北側にまわりこんでおり、この部分が主郭と考えられる。西辺は痕跡的であるが、土壘の高さ約3m、敷（しき）の幅4～5mの土壘が全周していたと考えられ、東辺中央に虎口が設けられる。土壘の東北隅に第六天が祀られる。土壘南辺は特に遺存状況が良好であり、東辺は虎口の南北で遺存状況を異にするものの郭内側から崩落した形跡が看取される。東辺土壘虎口南側には石積みがあり、虎口部分にも石積みがみられる。郭内は水田であった時期もあるが、現状は畠となっている。

北東に近接して所在する黒河内城跡は、小河川で開析された段丘端部を利用しておらず、四面に切岸が設けられ、このうち北辺から東辺にかけては比高差6～8mを測る。北側は下に県道が走っているが、「堀」といわれている。北西に3m程度の土壘状の高まりが残り、北東側については土蔵建設時に土壘が削られている可能性がある。土壘は庭石等が配置されており、内側がかなり改変されている。南西部に土壘跡があったとされるが、明らかな証拠は確認できない。表採遺物はない。全体として、北東方向の高遠城に拠った武田勢への備えを厚くし、「一夜の城」前面の防御性を高めたことが看取できる。

この黒河内城跡との間の、一夜城跡土壘北東隅に隣接する部分（A）は段丘面に囲まれた方形の平坦面で、内枡形の可能性がある。これに接する部分（B）は小河川跡や内枡形に臨み陣所の一部がおかれた可能性が指摘できる。

一夜城跡・宮ノ花八幡神社の北側、県道沢渡高遠線が通る部分（C）は、段丘崖を利用して帶郭が設けられ、高遠城に通じる三峰川に面した方向への防備を厚くする。

一夜城跡と同一面に立地する宮ノ花八幡神社（D）には、東辺を除く社殿の周囲を取り巻くように土壘状の高まりが確認できる。後述の切岸構築の掘削土を、郭の防御性を高めるために積み上げたと考えられる。東辺を欠くことは、神域であることを考慮すると、土壘が後世に削平されたのではなく「一夜の城」との連携を図る上で当初からこの部分に土壘が設けられなかったと考えられる。

宮ノ花八幡神社西側（E）は比高差2m程度であるが、人為的な切岸と考えられ、一連の遺構の西端部である可能性がある。

以上、一夜城跡周辺の踏査により、陣城を構成する可能性のある遺構群が把握された。

2) 遺構図（縄張図）作成

一夜城跡とこれに関連すると考えられる黒河内城跡・遺構群に関する上記現況調査を基に、発掘調査地の選定、遺構の状況や内容把握に使用するため、宮坂武男氏の縄張図（2002）を参考に縄張図作成を行った。

3) 地形測量

一夜城跡の土壘について測量調査を実施し、等高線図を作成した。

(2) 歴史資料調査

1) 絵図・地図（挿図2）

一夜城跡周辺を含む調査対象範囲の旧地形を把握するため、明治12年の全村略図の原本確認、関連遺構を含む地籍図を収集した。下記の資料について確認を行ったが、「一夜の城」に関する記録を確認することはできなかった。

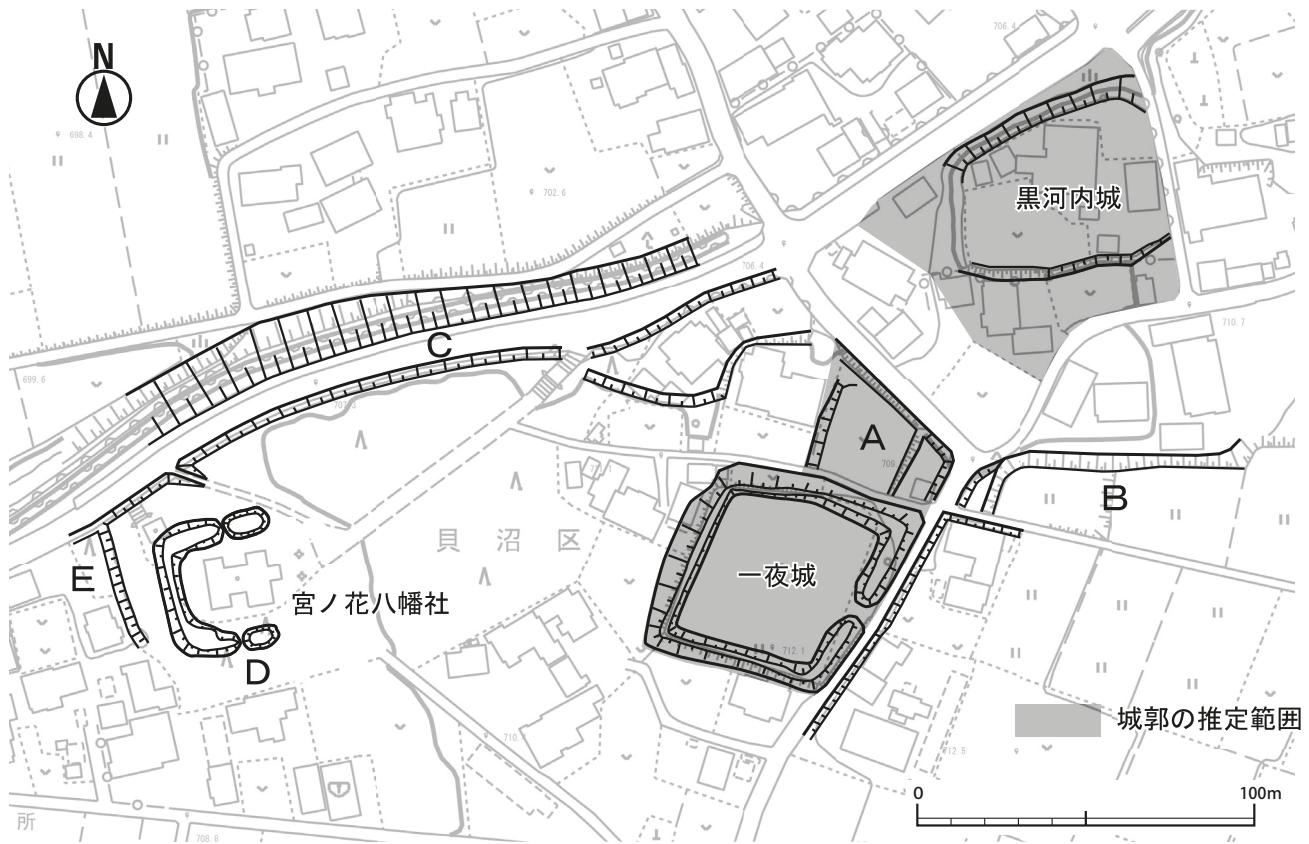
| 資料名 | 作成年 | 所収・所蔵先 | 記載の有無 |
|--------------------|---------------------|-------------------------|---------------------|
| (富県全図) | 不明（幕末～明治初年？） | 個人蔵 | 城館跡記載なし |
| 富縣村繪圖 | 不明 | 伊那市史編纂収集史料（個人蔵） | 城館跡記載なし |
| 上伊那郡富縣村全村畧図 | 明治12年 | | 城館跡記載なし |
| 村地繪圖 | 明治12年 | 伊那市史編纂収集史料（個人蔵） | 城館跡記載なし |
| 上伊那郡富縣村々（全圖） | 明治24年（地籍図調整時の全図と推測） | 伊那市役所富県支所 | 城館跡記載なし |
| 富縣村旱害地概況圖 | 大正13年 | 伊那市役所富県支所 | 城館跡記載なし |
| 国勢調査区分圖 | 大正14年 | 伊那市役所富県支所 | 城館跡記載なし |
| 富縣村全圖 | 不明（大正時代か） | 伊那市役所富県支所 | 城館跡記載なし |
| 春富土地改良區 上井地區 現況平面圖 | 昭和32年 | 春富土地改良区 | 城館跡記載なし。土地改良以前の地割あり |
| 春富地区県営圃場整備事業図 | 昭和45年 | 『春富土地改良区誌』1994年、春富土地改良区 | 城館跡記載なし。土地改良以前の地割あり |

特に、地籍図である明治24年の『上伊那郡富縣村々（全圖）』には、城館跡との記載はなく、土塁は「山林」、郭内部は「畠」と記されている。また、虎口が中央になく、やや北寄りに見られるが、明治期の測量精度による現況とのずれと考えられる。土塁の外側には、堀の痕跡と見られる形状の地籍は全く見られない。

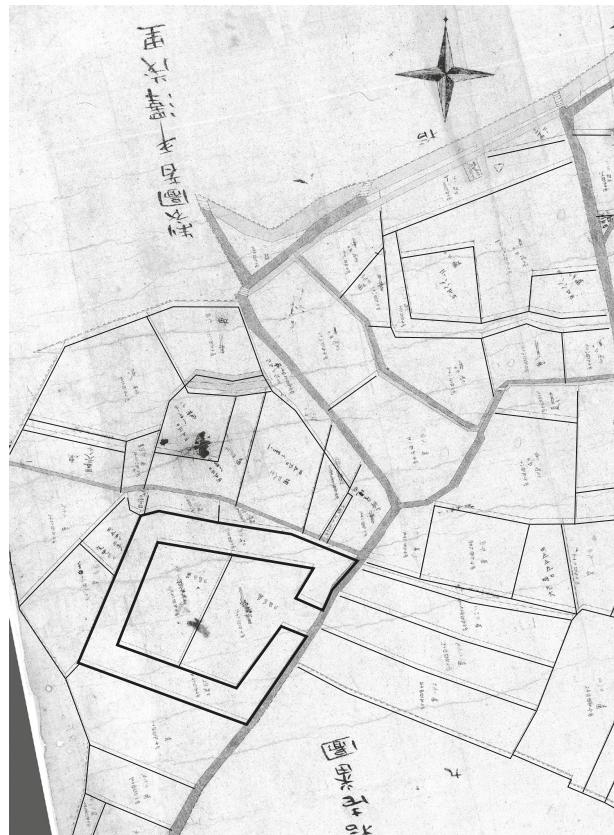
また、昭和23年9月28日アメリカ極東空軍撮影の航空写真（6倍部分引伸印画）を（財）日本地図センターから入手したが、有力な情報は得られなかった。

2) 文献資料

調査対象とした文献史料は一覧のとおりである。遺跡年代と同時代の一次史料（史料番号1から5）には、「一夜の城」という言葉は見られない。史料番号6『信長公記』には、織田軍は「貝沼原に陣取った」とあるものの、「一夜の城」という表現は見られない。各種文献史料の中で「一夜の城」という言葉の初出は、史料番号21の明治34年刊行『南信伊那史料』である。「一夜ノ城ト称スルハ天正十年二月織田信忠高遠城攻撃ノ際、一夜ニ堡墨ヲ築テ陣セシト云」とあり、ここで初めて「一夜の城」という名が見られ、この場所が「一夜の城」と伝えられてきたことがわかる。



一夜城関連遺構範囲図



『上伊那郡富縣村々（全圖）』明治 24 年



『伊那市的小字名』(伊那市教委 1991)

挿図 2 一夜城関連調査

調査対象とした文献史料一覧

| 史料番号 | 史料名 | 作成年 | 西暦 | 差出人 著編者 | 分類 | 記載の有無 | 出典・所蔵先 |
|------|----------------------|------------|-----------|------------|----------|-------|--|
| 1 | 河尻秀隆宛黒印状 | 天正10年2月23日 | 1582 | 織田信長 | 古文書 | 無 | 奥野1988 |
| 2 | 川尻秀隆宛印判状写 | 天正10年2月28日 | 1582 | 織田信長 | 古文書 | 無 | 奥野1988 |
| 3 | 河尻秀隆宛朱印状写 | 天正10年2月28日 | 1582 | 織田信長 | 古文書 | 無 | 奥野1988 |
| 4 | 河尻秀隆宛黒印状 | 天正10年3月1日 | 1582 | 織田信長 | 古文書 | 無 | 奥野1988 |
| 5 | 織田信忠宛黒印状 | 天正10年3月3日 | 1582 | 織田信長 | 古文書 | 無 | 奥野1988 |
| 6 | 信長公記 | 慶長5年頃 | 1600 | 太田牛一 | 編纂物 軍記 | 無 | 奥野・岩沢1997 |
| 7 | 信州伊奈郷村鑑 | 元文年間 | 1736～1740 | 宮崎言周 | 編纂物 地誌 | 無 | 伊那史料叢書刊行会1942年 |
| 8 | 伊那溫知集 | 元文5年 | 1740 | 閑 風嵐 | 編纂物 地誌 | 無 | 中村元恒編『藤原拾葉』卷之百三十五～百三十八』所収、 伊那市立高遠町図書館 |
| 9 | 木の下藤 | 安永8年 | 1779 | 葛上紀流 | 編纂物 地誌 | 無 | 中村元恒編『藤原拾葉』卷之百三～百五』所収、同上 |
| 10 | 高遠記集成 | 寛政12年 | 1800 | 星野葛山 | 編纂物 軍記 | 無 | 中村元恒編『藤原拾葉続』卷之一～二』所収、同上 |
| 11 | 伊那志略 | 文化11年 | 1814 | 中村元恒 | 編纂物 地誌 | 無 | 中村元起編『藤原拾葉続』卷之百三十五～百五十』所収、同上 |
| 12 | 赤羽記 | 文政2年 | 1819 | 赤羽俊房 | 編纂物 家譜 | 無 | 中村元起編『藤原拾葉続』卷之三百二十八～』所収、同上 |
| 13 | 信濃奇談 | 文政12年 | 1829 | 堀内元鑑 | 編纂物 口承伝承 | 無 | 中村元起編『藤原拾葉続』卷之六十二～六十三』所収、同上 |
| 14 | 箕輪記 | 天保4年 | 1833 | 中村元恒 | 編纂物 史誌 | 無 | 中村元恒編『藤原拾葉』卷之百四十八～百五十』所収、同上 |
| 15 | 板町落葉 | 明治2年 | 1869 | 中村元起 | 編纂物 地誌 | 無 | 編者不明『藤原拾葉続』卷之三百三十一』所収、同上 |
| 16 | 伊那武鑑根元記 | 弘化4年 | 1847 | | 編纂物 家譜 | 無 | |
| 17 | 中沢武拾四地侍 | 不明(江戸時代) | | 不明 | | 無 | 伊那市史編纂收集資料 |
| 18 | 高遠地方旧記 | 不明(江戸時代) | | 不明 | 編纂物 地方書 | 無 | 高遠史料叢書刊行会1942 |
| 19 | 学校敷地願 | 明治9年 | 1876 | | 近代行政史料 | 無 | 伊那市史編纂收集資料 |
| 20 | 長野縣町村誌 | 明治11～16年頃 | 1878～1883 | | 書籍 | 無 | 長野縣1936 |
| 21 | 南信伊那史料 | 明治34年 | 1901 | 佐野重直 | 編纂物 地誌 | 有 | 佐野1901 |
| 22 | 上伊那郡史 | 大正10年 | 1921 | | 書籍 | 有 | 唐澤1921 |
| 23 | 富県小学校前史一員沼学校沿革史一 | 昭和7年 | 1932 | | 編纂物 | 有 | 埋橋1932 |
| 24 | 上伊那誌 | 昭和40年 | 1965 | | 書籍 | 有 | 上伊那誌編纂会1965 |
| 25 | 伊那の古城 | 昭和46年 | 1971 | | 書籍 | 有 | 篠田1971 |
| 26 | 長野県の中世城館跡 | 昭和58年 | 1983 | | 書籍 | 有 | 長野県教委1983 |
| 27 | 高遠町誌 | 昭和58年 | 1983 | | 書籍 | 有 | 高遠町誌編纂委1983 |
| 28 | 伊那市史 | 昭和59年 | 1984 | | 書籍 | 有 | 伊那市史編纂委1984 |
| 29 | 富県小学校百年史 | 平成元年 | 1989 | | 書籍 | 有 | 富県小学校百年史編集会1989 |
| 30 | 定本伊那谷の城 | 平成8年 | 1996 | | 書籍 | 有 | 小林1996 |
| 31 | 桜井の四つの城について | 平成10年 | 1998 | | 論文 | 有 | 下平1998 |
| 32 | 伊那周辺の城館と村落 | 平成14年 | 2002 | | 書籍 | 有 | 飯塚2002 |
| 33 | 図解 山城探訪 | 平成14年 | 2002 | | 書籍 | 有 | 宮坂2002 |
| 34 | 伊那市富県における中世城館群の研究(6) | 平成27年 | 2015 | | 論文 | 有 | 宮脇他2015 |

(参考)

史料番号1 天正10年2月23日付 河尻秀隆宛黒印状

「(略) 高遠一城敵相拘之由、(中略) 可然所二三ヶ所伝城普請可仕事專一候、(略)

一、城介事、是も如言上、信長出馬之間ハ、むさとさきへ不越之様、滝川相談堅可申間候、此儀第一肝要候、(略)

一、高遠面可陳取之由、各令相談、あとあととの儀よく示合、少も無越度之様、調儀肝要候也、(略)」

史料番号2 天正10年2月28日付 川(ママ)尻秀隆宛印判状写

「繫之城申付度候間、於其元相尋、右之分急度可申付候、尚一左右次第可着陳者也、(略)」

史料番号3 天正10年2月28日付 河尻秀隆宛朱印状写

「(略) 道筋跡ヲ丈夫ニ候ハてハ、人足以下在陣中為氣遣候条、下条ニても駒場ニても松尾ニても大嶋にてモ、二三ヶ所相拵、人数を為警固残置、納馬候時、又は以来者用ニモ可立候間、とかく為各請取ニ候ハ、御普請尤ニ候、我々出馬以前ニ急度可出来候、(略) 相談無油断つなきの城為、以来旁以可然候、并是もつなきの城申付度候条、於其元相尋、右分急度申付度候、尚一左右次第ニ可着陣者也、(略)」

史料番号4 天正10年3月1日付 河尻秀隆宛黒印状

「(略) 跡々伝城我々出馬以前可相拵候由、(略) 其後も此儀専一候間、度々申遣候、猶々無由断、可其調儀事簡要候、(略)」

一、高遠町令調儀焼候由、可然候、尚々、色々子細等有之由候、始末示合可計策候、以是も卒爾之動、可思惟事専一候、

一、城介其外、滝川・小川・苅屋・高橋衆陣所之儀も聞届候、其よりさきへハ不可出候、猶様子可見届候也、(略)」

史料番号5 天正10年3月3日付 織田信忠宛黒印状

「(略) 次從大嶋至飯嶋陣替之由、無是非候、然者、其よりさきへハ、一切無用候、(略)」

史料番号6 『信長公記』卷十五 信州高遠の城、中将信忠卿攻められ候事

「三月朔日、三位中将信忠卿、飯嶋より御人数を出だされ、天竜川乗越され、貝沼原に御人数立てさせられ、松尾の城主小笠原掃部大輔案内者として、河尻与兵衛・毛利河内守・団平八・森勝蔵、足軽に御先へ遣はされ、中将信忠卿は御ほろの衆十人ばかり召列れ、仁科五郎楯籠り候高遠の城、川よりこなた高山へ懸上させられ、御敵城の振舞・様子御見下墨なされ、其日はかいぬま原に御陣取。(後略)」

史料番号17 中沢式拾四人地侍

- ・一夜の城に関する記述なし
- ・貝沼に関するもの「貝沼埋橋城 同所登城 桜井叶尾城」

史料番号19 学校敷地願

- ・明治9年7月に貝沼学校を新築するにあたり、筑摩県参事に提出した書類の写し
- ・貝沼学校敷地之図があり、一夜の城という名ではなく、「延院坊（えんにんぼう）城址」と書かれている。土壘の大きさが図内に記されており、東西南北、高さが全て「一間半（約2.7m）」、土壘の天端幅は「五尺（約1.5m）」とある。当初の城の規模がわかる貴重な図面である。
- ・「延院坊」とは、一夜城跡の東隣にあった宗教施設で、『伊那市寺院誌』によれば「アミダ堂」ともいわれる。明治25～35年頃に堂宇が取り壊され、現在畠地となっている。

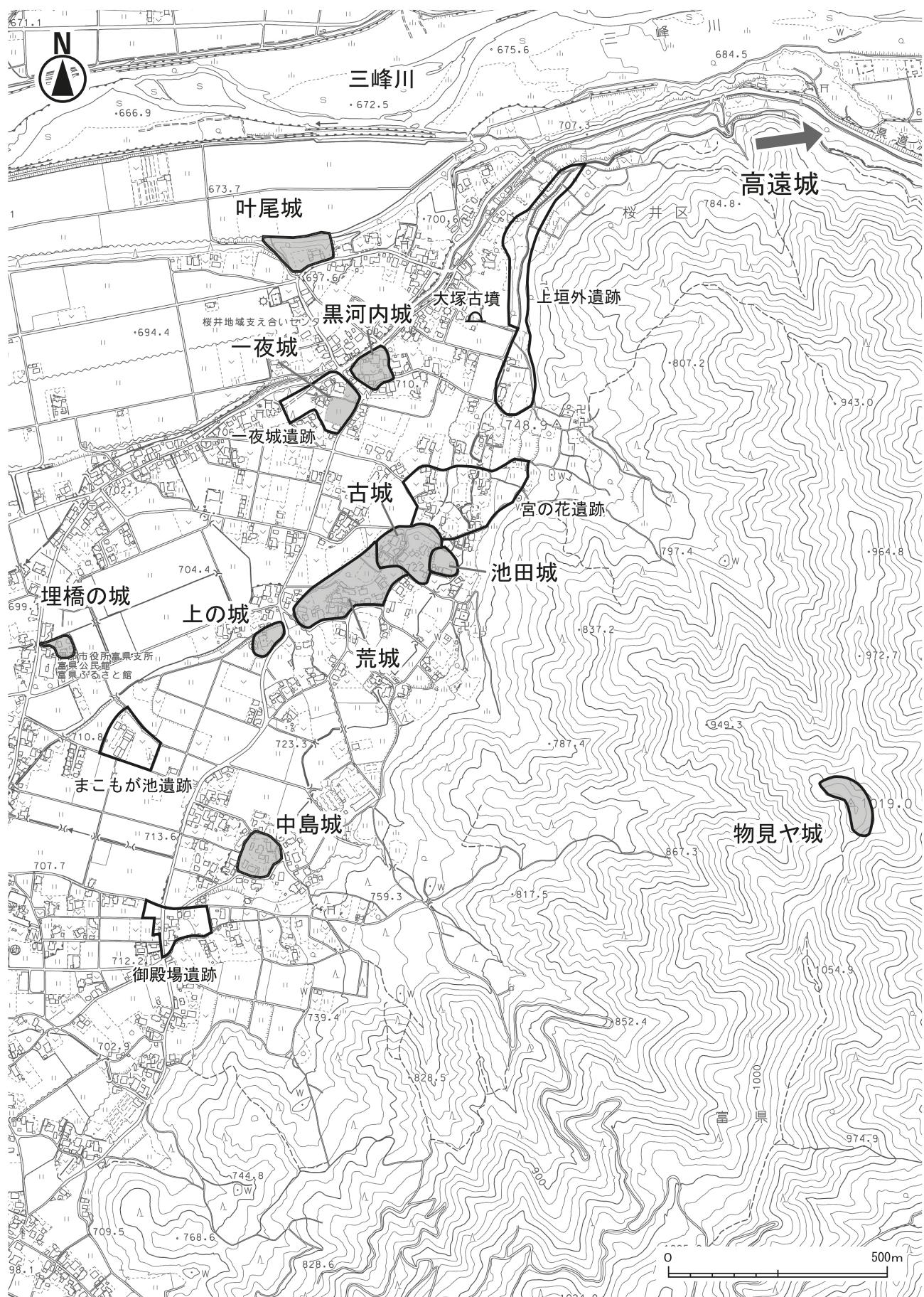
(3) 地名調査

『伊那市の小字名』(伊那市教委1991)によれば、一夜城跡の小字名は「延引畠」で、延引坊はかつて観淨寺と関係があった。「一夜の城」との直接的な関連は見られない。隣接する「大光寺」は聞き取りから判明した元禄検地水帳の「大光城」にあたると考えられ、五輪塔がある。一夜城跡西辺土壘西側に「宮原堀」の小字があり、聞き取り結果からは単に「堀」と呼ばれていた。一夜城跡の北東方向に位置する黒河内城跡の小字名は「城」である。

(4) 関連城館跡の調査（挿図3）

1) 長野県考古学会との現地確認

平成22年2月20日長野県考古学会と協働して、笹本正治氏を招いて現地確認を行った。



挿図3 周辺城館跡位置図

①一夜城跡

江戸時代の地誌に記述が出てこない点については、陣城は伝承を持たないことが多く、武田氏に仕えたものが多い地域であることを考慮すべきである。現状はとてもよく、城というより土豪屋敷と考えられる。宮ノ花八幡神社との位置関係や鬼門にあたる東北の宗教ゾーンと一体と考えても郷士の屋敷として申し分ない。

地権者によると、虎口付近に巨石があったため、それを自宅に運び庭石に据えたという。笛本正治は、屋敷を築き長期間住む時には祖先や靈のこもる三尊石を置く。一時的に使用された城跡ならばこのような巨石は用意する必要がない、ということから一夜城跡を居館跡であると考えている（笛本2011）。対して、中井均は在地の土豪たちの方形居館には必ず堀を伴う、一夜城跡には堀が無く土塁のみのため、高遠城攻めの陣城である可能性が高い、と指摘している（中井2011）。

②叶尾城跡

地表面を観察する限り、切岸や土塁、溝等の痕跡が確認できず、何を以って城館跡とするのか不明である、居館跡とするには広すぎるという所見を得た。

なお、叶尾城については、『上伊那郡史』（上伊那教育会1921）を基に、『長野県の中世城館跡』（長野県教委1983）では現地を特定しているが、下平利康は小牧氏文書に登場する叶尾城の城主が桜井茂八郎であることと「黒河内の城」に桜井茂八郎が住んだという伝承から、黒河内城跡が叶尾城ではないかとしている（下平1998）。叶尾城跡とされている平場の東西には、現在は両方とも人工の沢となっている2本の堀状の地形が見られる。この地形について上伊那教育会の調査では、「地表面観察を行ったが、積極的に人の手によってつくられたものだとは言い難く、河川の浸食によってできあがった可能性が高い」としている（上伊那教育会2017）。なお、2010年2月、市教委による現地調査時に室町時代後期の常滑焼片2点を表採している。

③池田城跡

東側に土塁の名残りがある。

④荒城跡・古城跡

ともにいわゆる城でなく屋敷跡と考えられる。

⑤中島城跡

他の城から離れている点や、城としての仕掛けがなく、中世の館跡としての理解に違和感がある。

⑥埋橋の城跡

典型的な郷士の館であり、東北の屋敷神、庭石となる石がある。北辺土塁の切れているところが虎口と考えられる。

明治24年『上伊那郡富縣村々（全圖）』の地籍図には、埋橋の城跡に当たる場所に土塁と堀と考えられる地割が見られることを中井均が指摘している（中井2011）。

2) その他の城館跡調査

①物見ヶ城跡確認調査

- ・山麓との比高差が大きく、東光寺からの古道が残る。
- ・南側尾根の切断が強く、二重の陣地状の堀を用いている。

- ・本郭とその北の郭は、郭内の土を鋤取り、東側の土塁として盛ったと考えられる。
- ・すぐ北西の広い尾根には手が付けられておらず、北（西）への備えが甘い。
- ・臨時的な施工の様相が見て取れ、最終形は戦国末まで下る可能性がある。

②「高山」(『信長公記』記載)

- ・織田信忠が「御ほろの衆十人ばかり召し列れ、仁科五郎楯籠り候高遠の城、川よりこなた高山へ懸上させられ、御敵城の振舞の様子御見下墨なされ」た所は、高遠城と三峰川を挟んだ南側にある「白山」に比定されている。

(5) 聞き取り調査

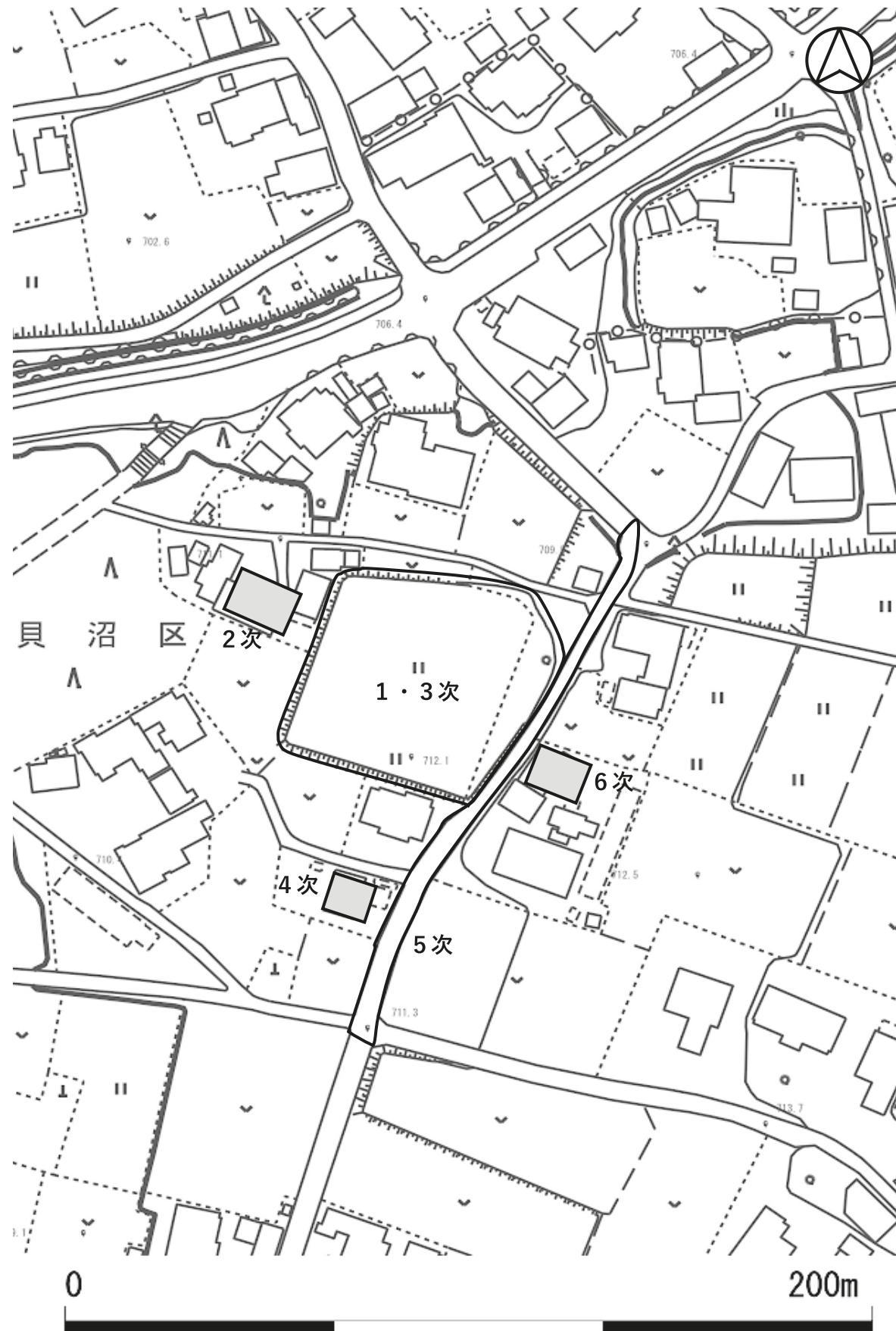
平成22年3月、地権者及び周辺住民への聞き取りを行った。その結果、

- ・西辺及び北辺の土塁は昭和30年代に削平した。
- ・土塁の上にある第六天の碑は、もともと地権者の祝殿であり、山裾にあったものを開田時に現在地に移動したものである。
- ・古銭（寛永通寶・天保通寶・文久永寶・乾元通寶・至元和寶）の出土があった。
- ・土塁の幅は広く、赤土であったためしっかりしていなかった。
- ・北辺土塁北側法面はきれいな斜面であった（切岸か）。
- ・宮ノ花八幡神社南側の堀のような部分は昭和10年代に松の根が畑に侵入するのを防ぐため削り取られた。
- ・元禄検地の記録から「大光城」という小字名を見つけた。一夜城跡あたりと思われる。
- ・織田軍が来て地元から道具を借り、小高い山を削って2～3日で土塁をつくり、道具を洗って返してくれたという言い伝えを子どもの頃、地区のお年寄りから聞いた。
- ・土塁はかなり高かった。
- ・自宅と隣の畑は登記上「ホリ」となっている。

との情報を得た。

(6) 当該地の変遷（関連調査結果まとめ）

| 年 代 | 事 項 |
|--------------|--|
| 明治8（1875）以前 | 延院坊の畑となっていた |
| 明治8（1875）年 | 敷地を貝沼学校にする計画が立つ 敷地願いを県に提出（住所に「延院坊城址」とある） |
| 明治10（1877）年 | 貝沼学校が一夜城跡に新築される (埋橋条衛1932『富県小学校前史』※個人の記録) |
| 明治28（1895）年 | 貝沼学校が現在の富県小学校の場所に移転 村が個人に土地を払い下げる |
| 明治34（1901）年 | 『南信伊那史料』に「一夜の城」の項目が立てられる （「一夜の城」の名が初めて文献に載る） |
| 昭和15（1940）年頃 | 現在の所有者の先祖が取得、土塁の一部の土を耕作に利用 果樹園（この頃、東の土塁に石垣を作る）⇒水田⇒麦畑と変遷 |



挿図4 第1次～第6次発掘調査位置図

第2節 第1次調査

(1) 調査区の設定（挿図4・9）

一夜城跡の構造・築城時期等を把握するために7本のトレントにより、関連遺構の調査を行った。特に、「一夜の城」が伝承通りに陣城であるのか、在地の土豪の居館であるのか、その重要なポイントともなる堀の有無を確認するために、土壘四辺の外側を中心に調査区の設定を行った。

1トレントは西辺土壘中央外側に、3トレントは西辺土壘南西隅外側に、2トレントは1トレントと3トレント間、それぞれ関連遺構の有無を把握するために設定した。なお、2トレントは現地の状況から連続しての設定が困難であり、3分割して東から2-1、2-2、2-3トレントとした。

4トレントは、南辺土壘外側南西寄りに、関連遺構の有無を把握するために設定した。なお、トレント東壁9層、西壁11層に水道管布設に伴う搅乱層が確認された。

5トレントは、北辺土壘北西隅外法に、関連遺構の有無を把握するために設定した。

6トレントは、東辺土壘、虎口南側内法から郭内部にかけて、土壘構築方法及び関連遺構の有無を把握するために設定した。

7トレントは、4トレントを延長し土壘から郭内部にかけて、土壘構築方法及び関連遺構の有無を把握するために設定した。

(2) 検出遺構

1) 土壘（挿図5、付図1）

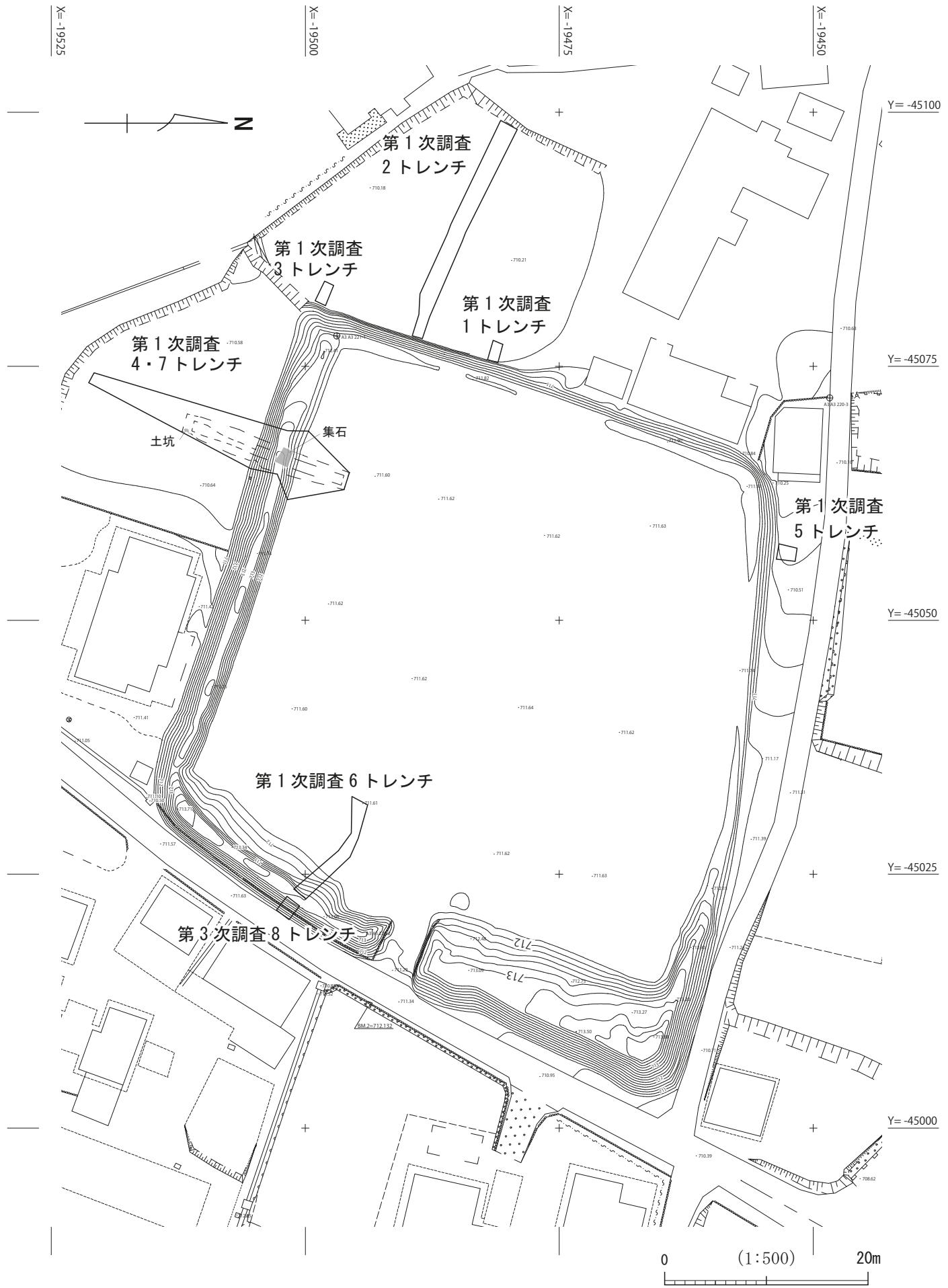
東辺及び南辺は良好に遺存するのに対し、西辺・北辺は削平を受け遺存状態は悪い。

土壘は現況外裾で東辺59.0m・南辺54.4m・西辺50.4m・北辺64.0m、四辺の方向はそれぞれN7.5°E、N71°W、N18.5°E、N79°Wの不整方形を呈する。敷の幅は東辺6.4~11.0m・南辺4.2~5.0m・西辺1.0~3.0m・北辺1.8m~4.4m、土壘と外裾・内裾の比高差は、東辺外裾約1.8m・内裾1.5m、南辺外裾約3.1m・内裾約1.6m、西辺外裾約1.6m・内裾約0.2m、北辺外裾約0.6m・内裾約0.1mを測る。東辺中央に虎口が設けられ、間口は3.0mを測る。

7トレントの調査状況を中心に詳述する。

トレント東壁断面では、地山層である明黄褐色粘土のローム層の上に、約20cmの厚さで漸移層99層（西壁110層）の堆積が見られた。その上層の98層（西壁109層）には、縄文・平安時代の土器片が含まれる水平堆積の黒色土となっており、一夜の城構築時の旧表土と考えられる。この98層の外法側は、城内の水平堆積に比べやや高くなっているが、これは土壘構築開始時に、まず旧表土を周囲から集め積み上げたためとも考えられる。また、この旧表土直上に積まれた、黄褐色土に黒褐色土のブロックが入る西壁108層中には、11~20cm大の自然石による集石が見られた。しかし、石の並びに規則性はなく、土壘を構築した際に土と一緒に積まれたものと考えられる。

土壘を構築する土層の状況は、土壘部分上部がブロック状の堆積をするのに対し、内法側61~64層が大きく片流れで堆積している状況が把握され、その下部には再びブロック状の堆積が確認できる。即ち、大きく捉えて56・57・60~64・66層の上面、57・63・64層の下面で堆積状況の大きな差が認められる。また、個々のブロックについてみると外法側のブロックは比較的細かいのに対し、内法側のブロックは片流れになる傾向がある。さらに、黄褐色土・オリーブ褐色土等と黒褐色土・暗褐色土が互層になる状



挿図5 第1次・第3次調査トレーンチ位置図

況がある。以上の状況から、①下のブロック状堆積が一氣に行われた、②長期間積上げがなされずその間に土壘の崩壊が進んだ、③修築により改めて上のブロック状堆積が一氣に行われた状況が想定される。また外法側と内法側のブロック形状の違いから、土壘外側の堀掘削土が積上げ・搔き上げられた結果、内法側に片流れとなったと考えられる。こうした状況は、トレンチ西壁の土壘断面においても同様に看取され、大きく捉えて67・71・73層上面、71層下面が上記の状況に対応する。また、個々のブロックについてみると外法側のブロックは比較的細かいのに対し、内法側のブロックは片流れになる傾向がある。さらに、黄褐色土・オリーブ褐色土等と黒褐色土・暗褐色土が互層になる状況がある。

以上の所見に基づき、土壘の規模を把握すると、現況天端幅0.8~1.0m、敷幅4.2~5.0m、高さ内法1.2~1.4m・外法2.1~2.2mであるのに対し、修築時点の土壘は天端幅0.6~1.5m、内法高さ0.9~1.1m、当初構築時の敷幅は5.6~6.2mであった。

2) 堀（付図1・挿図17）

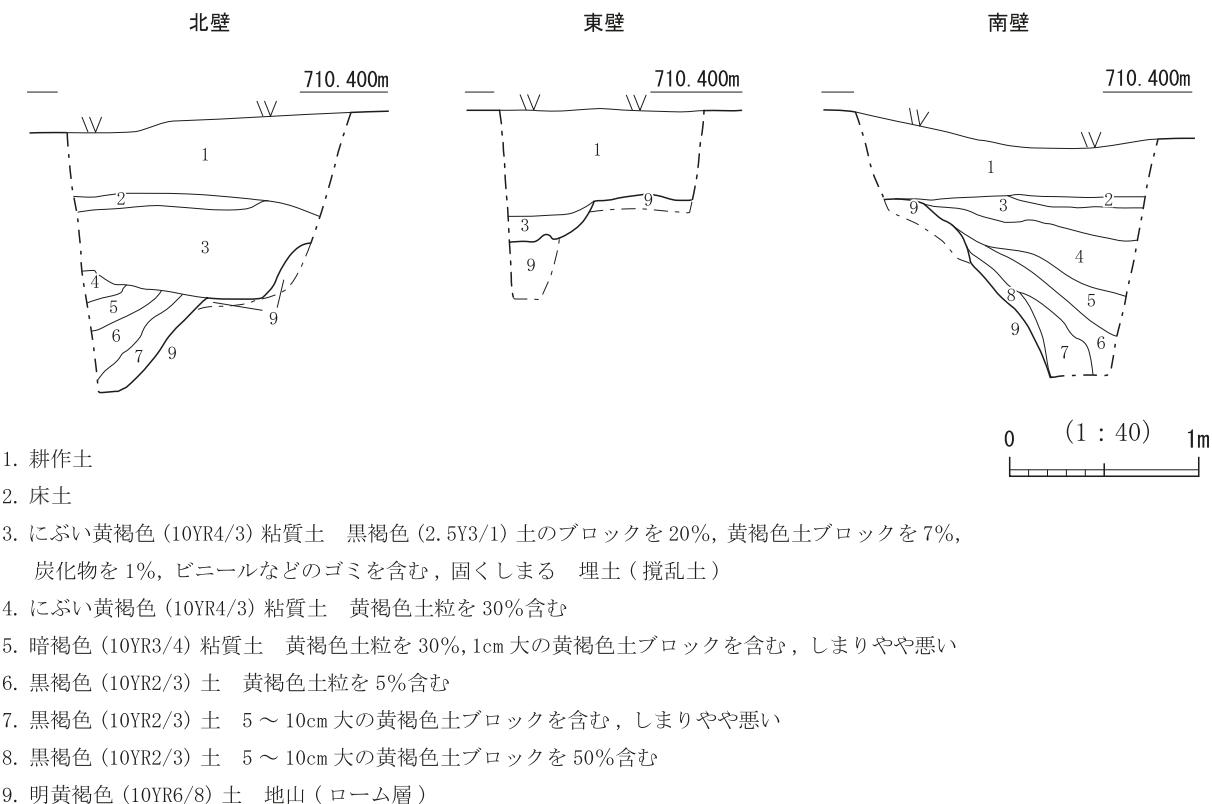
1、2-1、3トレンチの東端で西辺土壘外側に西辺堀の内側肩が確認された。また、2-2トレンチは、西辺堀の外側肩が把握できる位置にあたるが、緩やかに掘り下がっており、必ずしも明確ではなく、堀の規模は不明である。5トレンチでは、北辺土壘外側に北辺堀の内側肩が確認された。いずれも、基底まで完掘していないため、埋土の一部を確認したにとどまる。土壘同様、南辺堀を基底まで確認した4トレンチの調査状況を中心に詳述する。

南辺堀の断面は逆台形を呈し、土壘外法側に最深部が偏っている。トレンチ東壁では13・14・16・19層が概ね水平堆積し、31・33層上面が不連続となっている。この不連続から、上記土壘側に偏る最深部の埋土と考えられる30~35層と、これより上部28・29層の間には時間的間隙があると考えられる。また、堀最深部が土壘外法側に偏る状況から、上部は当初の堀より外側に幅広く掘り直されたと考えられる。同様に、トレンチ西壁では35~37層上面が不連続となっている。この不連続から、上記土壘側に偏る最深部の埋土と考えられる35~39層と、これより上部30・33・34層の間には時間的間隙があり、堀の改修が行われたと考えられる。最深部及び上記不連続面の状況から、空堀であったと考えられる。

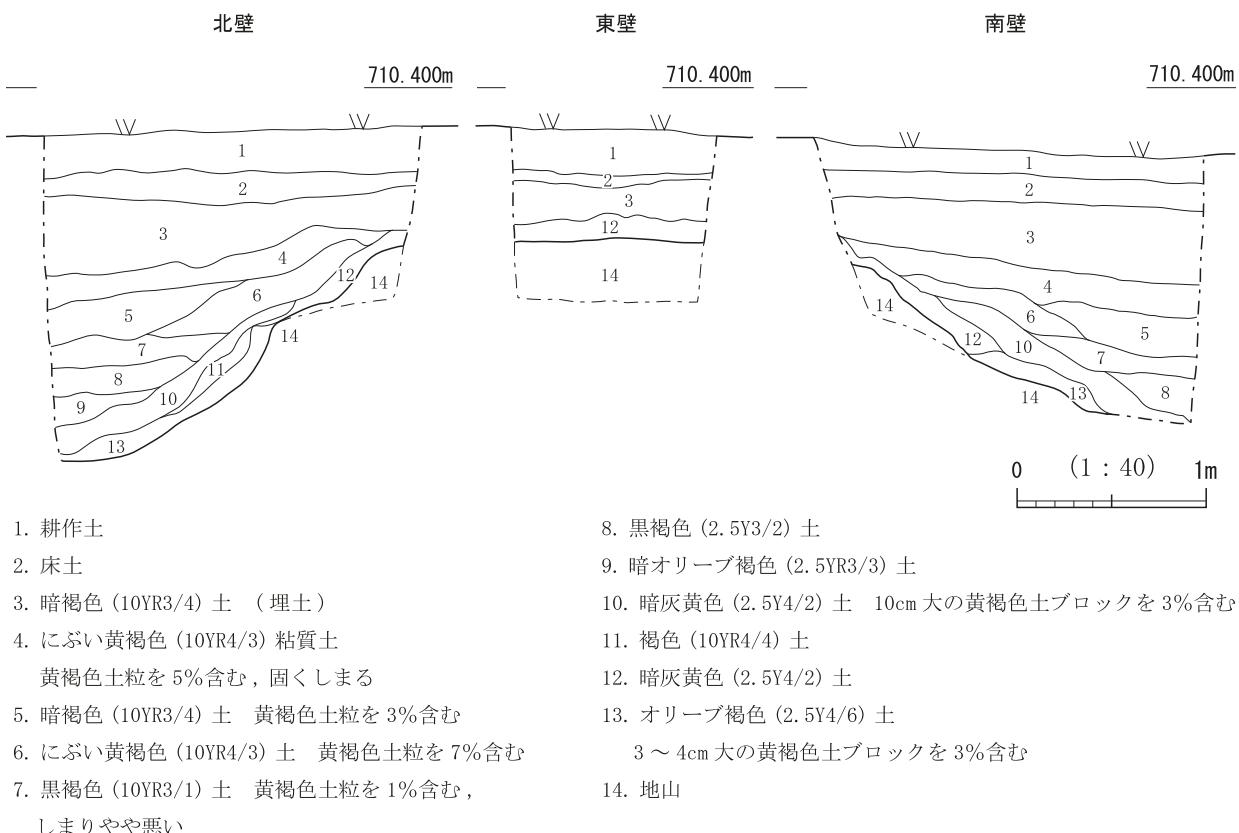
以上の所見に基づき、堀の規模を把握すると、当初の上部幅が推定3.9~4.3m、底部幅1.0m、深さ約1.9~2.0m、改修後の上部幅5.9~6.0m、底部幅2.6~3.3m、深さ1.5~1.6mである。また堀の形状は薬研堀から断面逆台形の箱堀に変更されている。

この他、1トレンチ・3トレンチの所見を整理しておきたい。両トレンチで1層耕土、2層床土としたが、2層はロームがブロック状に入り昭和30年代の土壘を搔き崩した土と考えられる。このことを裏付けるように、両トレンチとも直前の旧耕土と考えられる3層からはビニール片が出土している。3トレンチは堀底まで掘り切っていないため、10層が当初の堀肩か改修後の堀肩か不明であるが、4トレンチの検出高からすると改修後の肩付近と考えられる。同様に、1トレンチ9層も同じと考えられる。なお、1トレンチ北壁3層ではおそらく耕作か近々の搅乱により堀肩が大きく壊される。1トレンチ東壁で9層を掘り込む農具痕と考えられる痕跡がある。また、1トレンチ南壁8層以上は改修後の堀埋土である。

第1次1トレンチ土層断面図

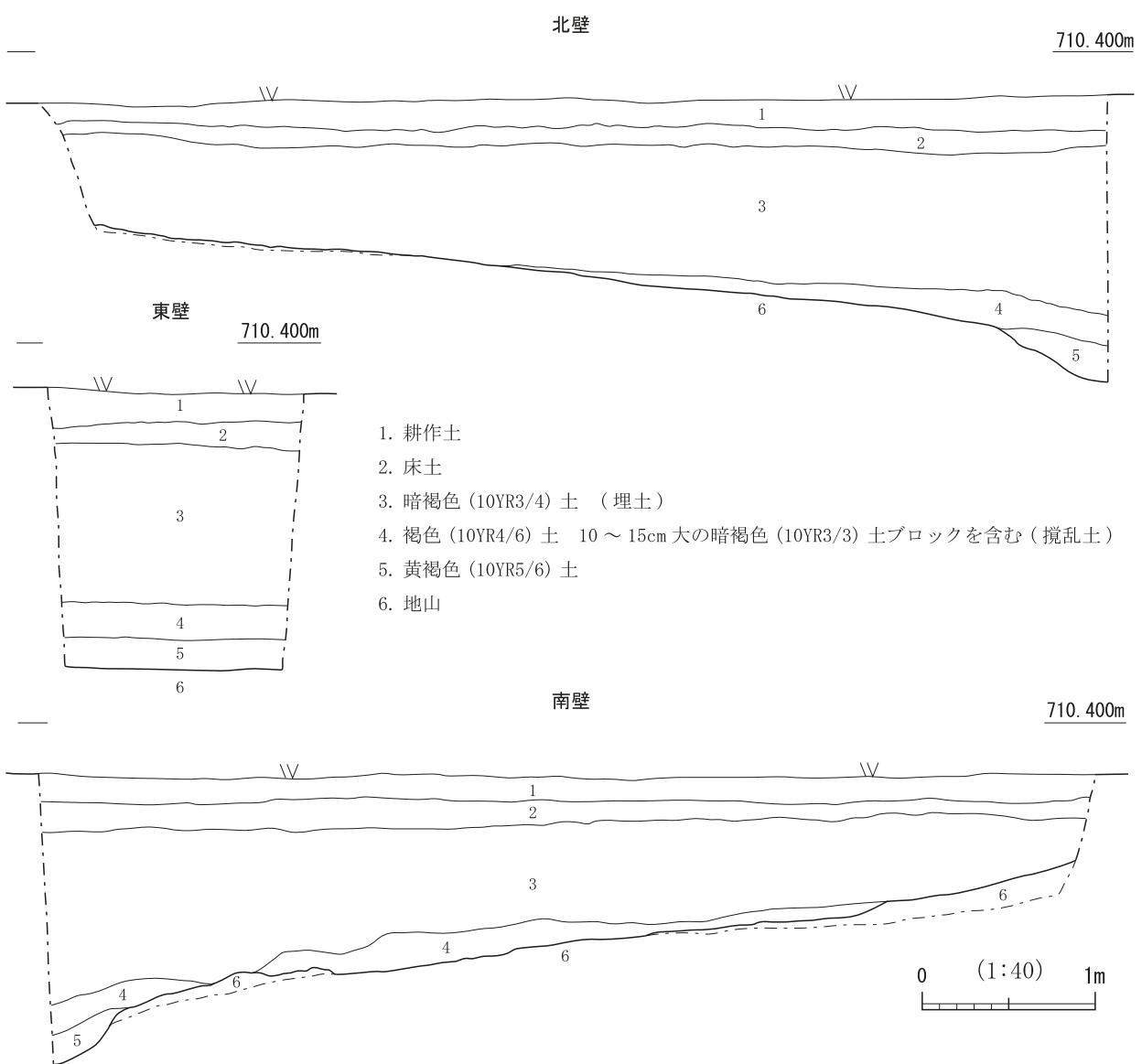


第1次2-1トレンチ土層断面図

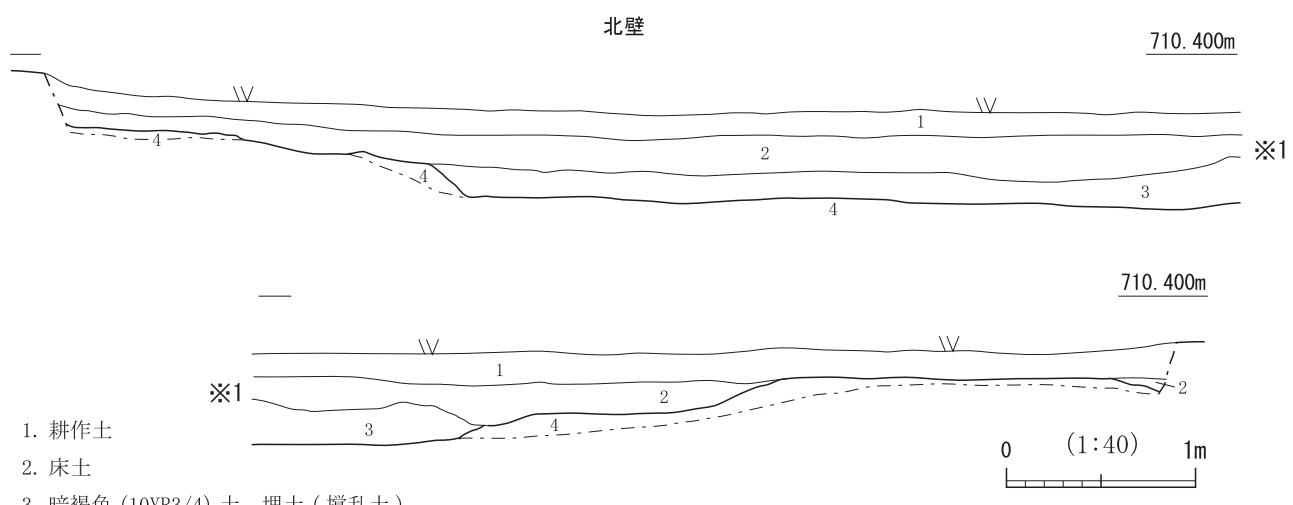


挿図6 第1次1・2-1トレンチ土層断面図

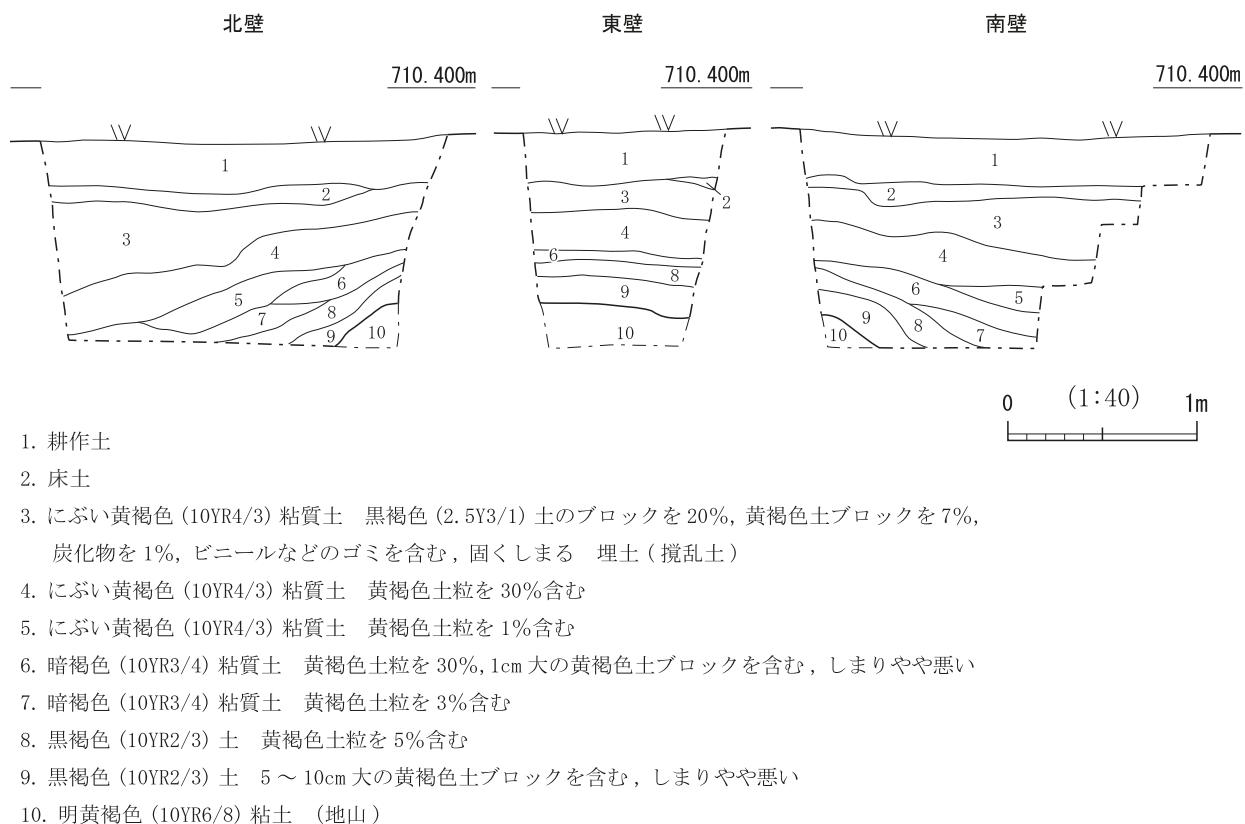
第1次 2-2 トレンチ土層断面図



第1次 2-3 トレンチ土層断面図



挿図 7 第1次 2-2・2-3 トレンチ土層断面図



挿図8 第1次3トレンチ土層断面図

3) 土坑(付図1)

4トレンチ東壁において地山層を掘り込む、焼土が混じる土坑が壁面で検出されたため、トレンチを東側に約50cm拡張し遺構の状況を確認した。土坑は南北径60cm、残存する深さは10cmの浅いものであった。地床炉ないしカマド火床のように長時間、強い熱を受けた様子は見られず、遺物も出土しなかった。遺構の性格、時期については不明である。

4) その他

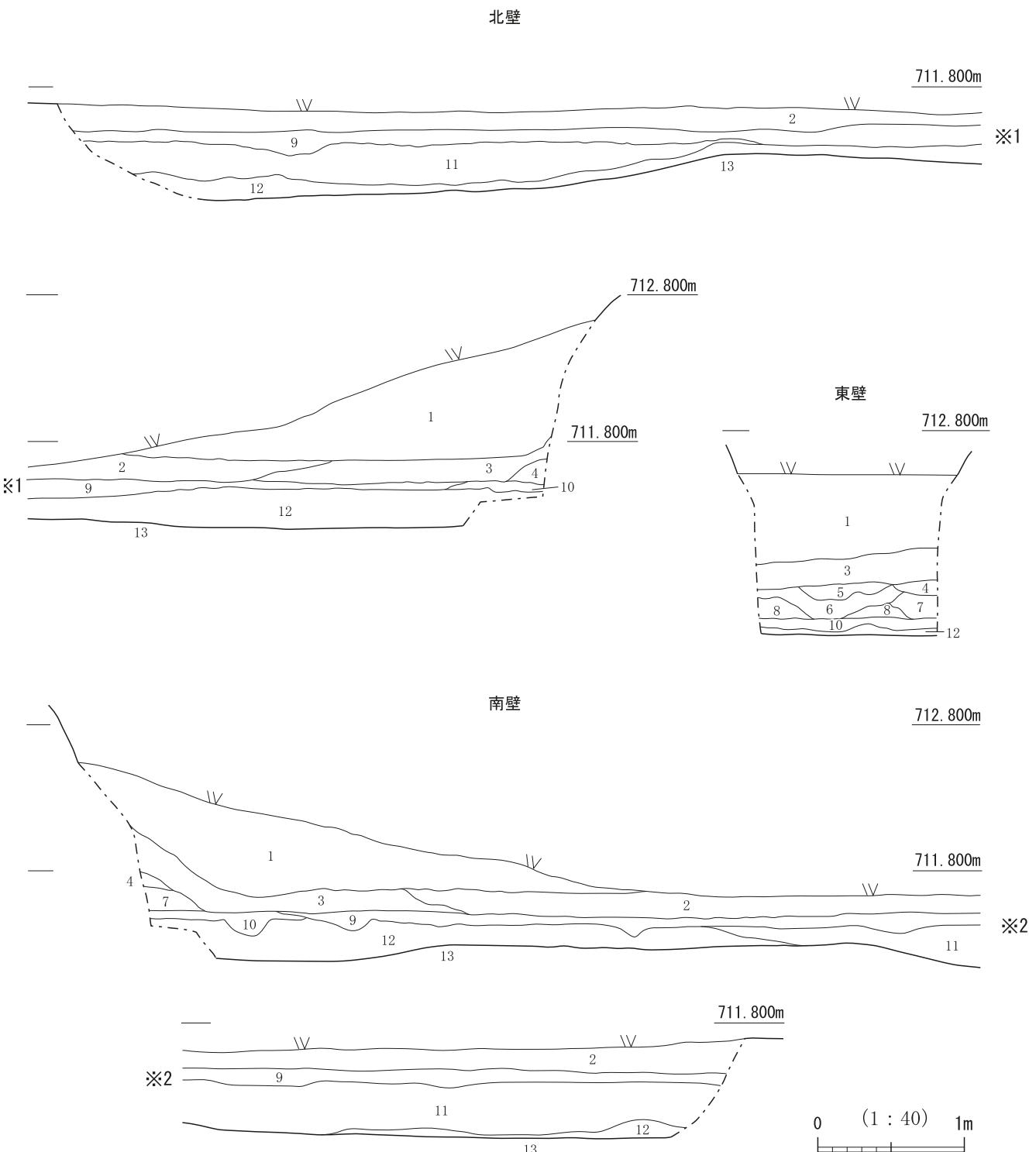
2-3トレンチ西側で幅広の溝状部分(図版2中・下)、4トレンチ堀より南側で2条の溝状部分(図版6上)、6トレンチ西側(郭内)に溝状部分(図版6中・下)があった。いずれも耕土直下の2層として捉えており、詳細図はない。出土遺物等はなく、時期、性格等詳細は不明である。

(3) 出土遺物(第1・4・5図、図版15・18)

1トレンチからは、縄文時代の硬砂岩素材の敲打器、近世から近現代にかけての陶磁器、時期・器種とも不明の鉄製品が出土した。

2トレンチは、縄文時代中期前葉深鉢片(第1図1~3)及び後葉の深鉢片(同4)、灰釉陶器皿が出土した。

3トレンチは、縄文時代の硬砂岩製敲打器(第4図27)、土師器甕A、光ヶ丘1号窯式灰釉陶器皿(第1図5)、近世から近現代の陶磁器片が出土した。



1. 黄褐色 (10YR5/6) 土 4 ~ 10cm 大の黒褐色 (10YR3/1) ブロックを 5%, ビニールなどの現在のゴミを含む (搅乱土)
2. 黑褐色 (7.5YR2/2) 土 (耕作土)
3. 黑褐色 (7.5YR2/2) 土 ビニールなどの現在のゴミを含む, しまりやや悪い (盛土)
4. 暗褐色 (10YR3/4) 土 黄褐色土粒を 70% 含む
5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 2 ~ 3cm 大の黄褐色土ブロックを 70%, 黄褐色土粒を含む
6. 黑褐色 (10YR3/2) 土 黄褐色土粒を 7% 含む
7. 暗褐色 (10YR3/4) 土 黄褐色土粒を 10% 含む
8. 暗褐色 (10YR3/4) 土 黄褐色土粒を 70% 含む
9. 床土
10. 暗褐色 (10YR3/3) 土
11. 暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 炭化物を 3% 含む (盛土, 搅乱土)
12. 褐色 (7.5YR4/3) 土 (ローム漸移層)
13. 地山

挿図 9 第1次6トレンチ土層断面図

4 トレンチから縄文時代前期十三菩提式土器片（同6）や須恵器甕片（同7～9）が出土した他、トレンチ内で縄文時代前期の諸磯式土器他の土器片、硬砂岩製の横刃型石器（第4図28・29）、黒曜石チップ、土師器小型甕A・同B・甕A・同B、黒色土器A杯A、須恵器甕B、灰釉陶器碗（第1図11）・皿（同10）、中世陶器、内耳土器、不明鉄製品、馬臼歯および四肢骨が出土した。中世陶器は15世紀前半に比定される天目茶碗（同12）、古瀬戸四耳壺（同13）である。馬歯骨の出土位置は堀の西側、堀外である。

5 トレンチからは、近世から近現代にかけての陶磁器が混入出土した。

6 トレンチは、詳細時期不明の縄文土器片、火を受けた硬砂岩製横刃型石器（第5図1）及び黒曜石チップ、土師器杯・小型甕・甕A、灰釉陶器碗・皿、内耳土器（第1図25～27）が出土した。

7 トレンチは、縄文時代前期から中期の深鉢片（第1図14～20）や黒曜石製石鏃（第4図30）及びチップ、不明鉄製品が出土した。土師器甕A、須恵器甕（第1図21～23）、軟質須恵器杯A、短頸壺、灰釉陶器碗（同24）、光ヶ丘1号窯式に比定される灰釉陶器皿が出土した。

この他、表採遺物として、縄文緑色岩製打製石斧（第5図2・4）、硬砂岩製打製石斧（同3・5）、黒曜石製石鏃（同6）がある。

第3節 第2次調査（挿図4）

（1）検出遺構（挿図10）

竪穴建物址2棟、溝址2条を調査した。

1) 竪穴建物址

①竪穴建物址1（挿図11、第2図、図版7・15）

調査区の北隅で検出した。方形を呈すると考えられる竪穴建物で、大半が調査区外にかかるため、規模等詳細は不明、深さ15～33cmを測る。南辺の方向はN86.5°Eを測る。埋土は上層が黒褐色、下層が黒色であり、床面より高さ28cmの1層中より後述する鉛製の鉄砲玉が出土した。溝址1・2が上に乗る。

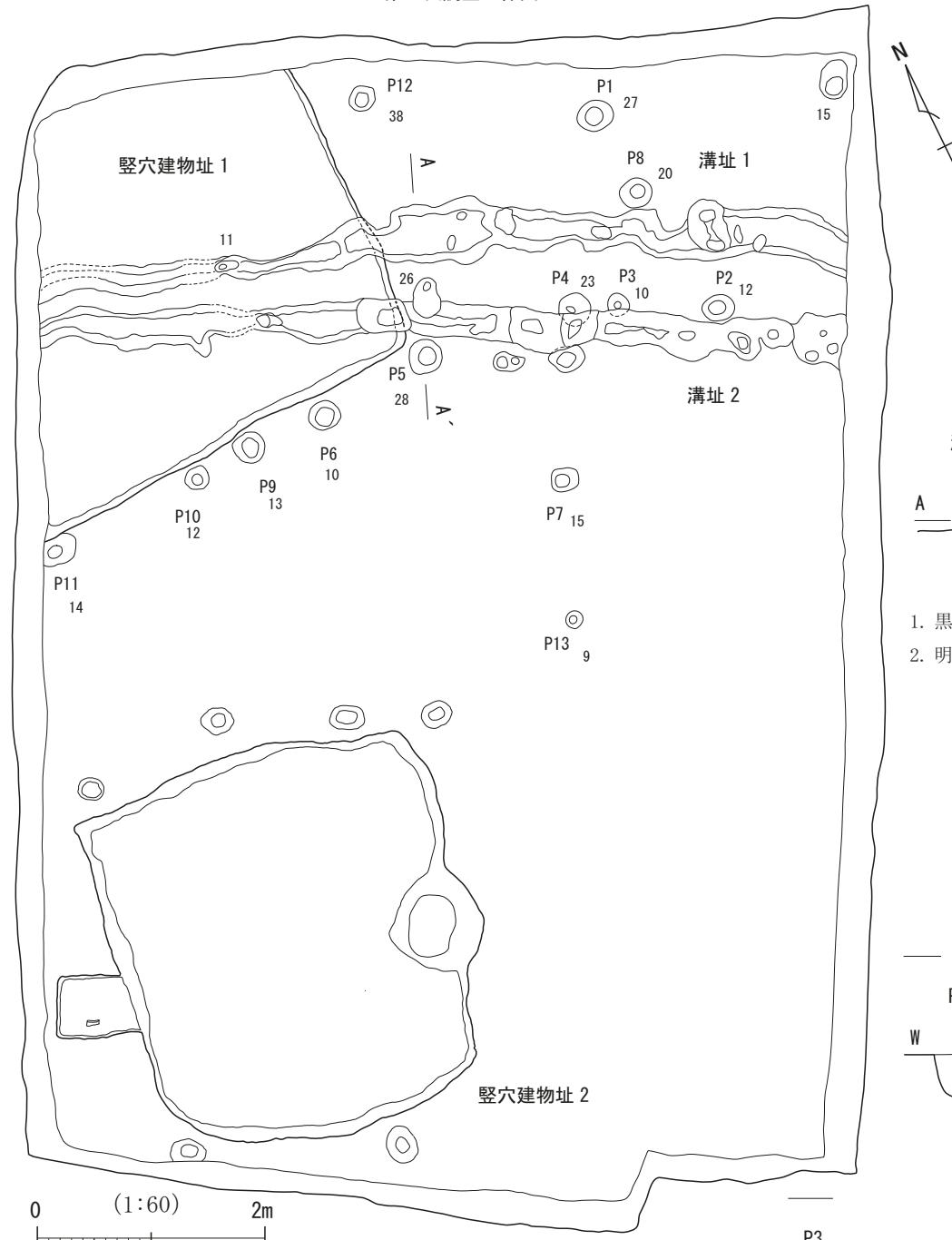
出土遺物は、土師器小型甕A・同B・長胴形の刷毛目が施される土師器甕B（第2図1～7）、須恵器壺、灰釉陶器皿がありP1・P2からも土師器小型甕B・甕B片が出土した。混入品として縄文時代中期から後期の土器（同8・9・15・18）・石器がある。

出土遺物から、平安時代9世紀後半の竪穴建物と考えられる。

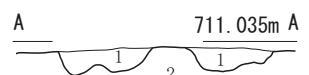
②竪穴建物址2（挿図12、図版7）

調査区の南西で検出した。3.1×3.5mの隅丸方形を呈する竪穴建物で、深さ20～29cmを測る。主軸方向はN101°Eを測る。埋土は黒色、黒褐色で全体的に黄褐色土の粒子を含む。また、床面より4～10cmの高さで、赤褐色の焼土が5～10cmの厚さでレンズ状に入る土層が見られた。カマドは東辺中央に構築されているが、破却されたと考えられ、両袖等がわずかに残存するのみであった。カマドの前面に20～45cmの礫が集中して出土する地点が見られた。また、カマドの南側の床面には南北20cm、東西45cmの範囲で、建物南西部分の床面には南北70cm、東西50cmの範囲で焼土が広がっていた。カマドの破却の際

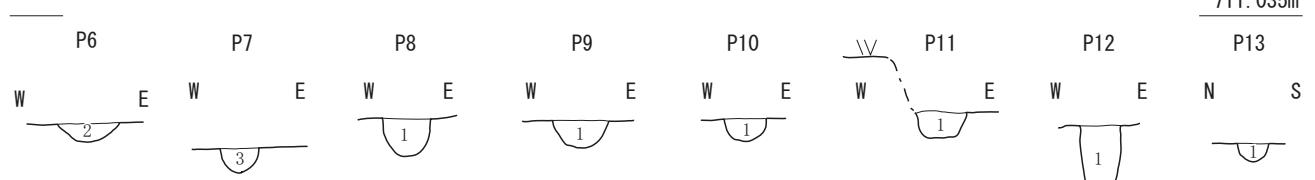
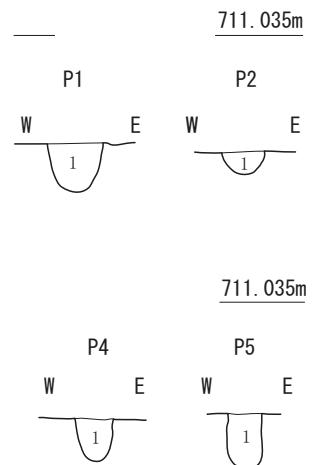
第2次調査全体図



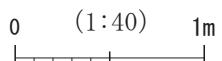
溝址 1・2 土層断面図



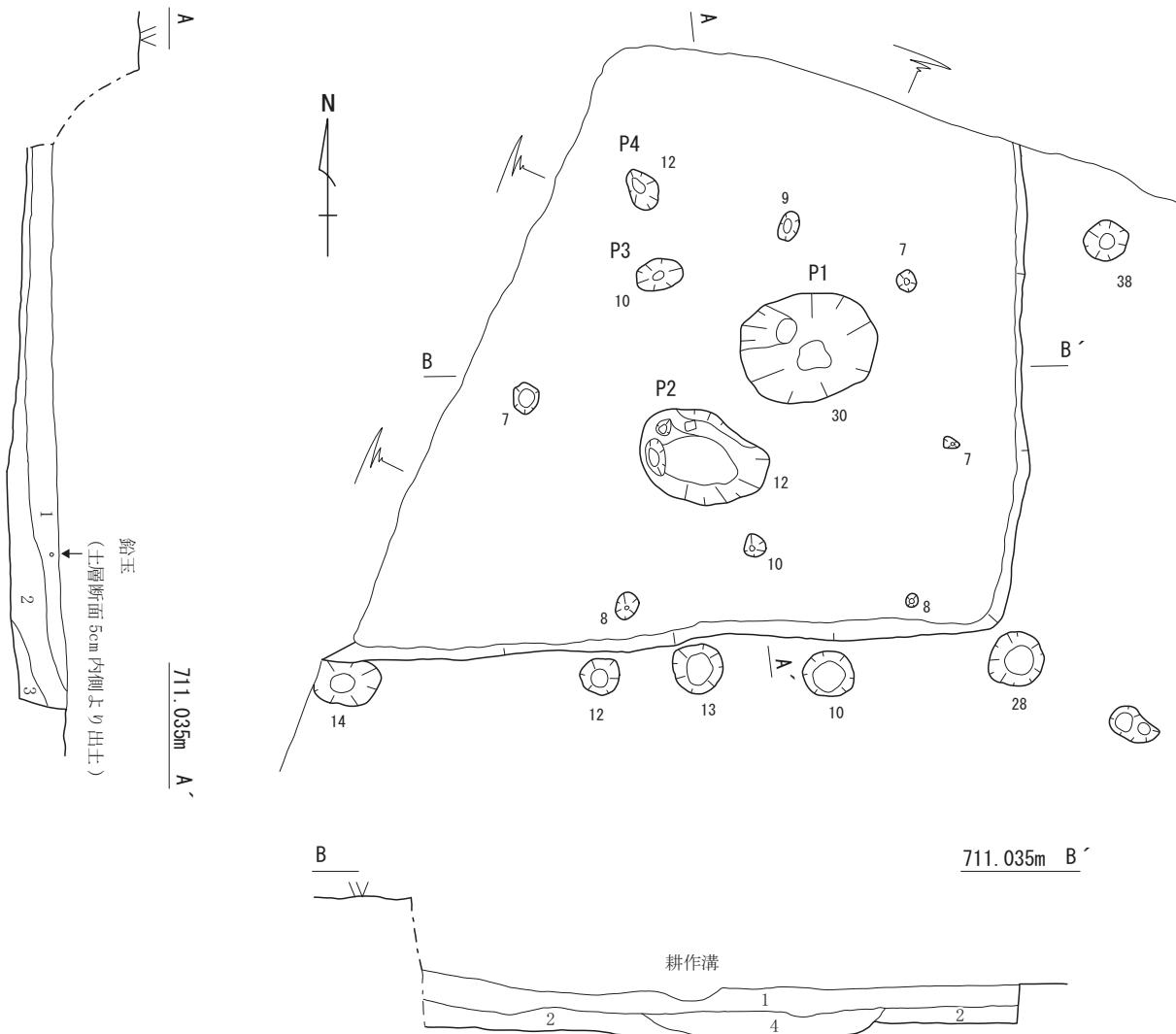
柱穴土層断面図



1. 黒褐色 (7.5YR2/2) 土 黄褐色土粒を 10% 含む
2. 黄褐 (10YR5/6) 土 黑褐色 (7.5YR2/2) 土 ブロック含む
3. 黒色 (5Y2/1) 土 黄褐色土粒を 5% 含む

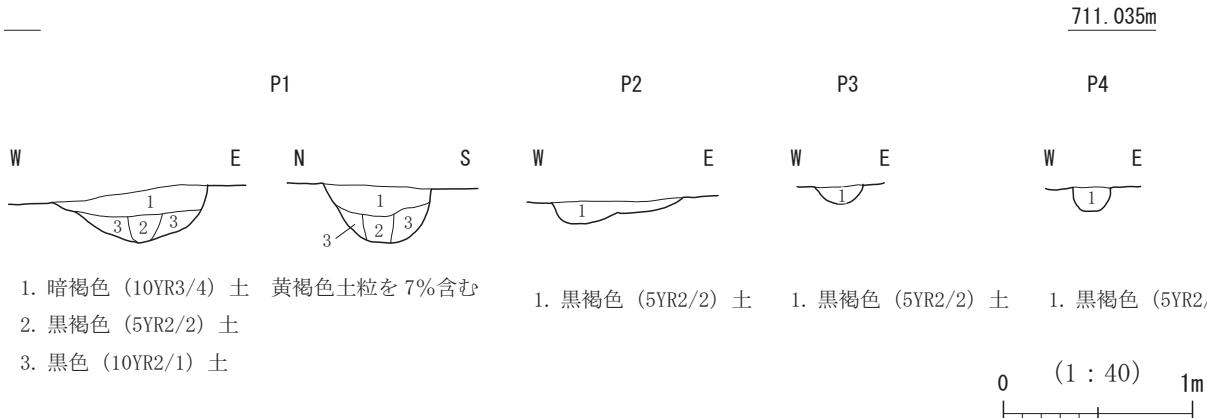


挿図 10 第2次調査全体図、溝址他土層断面図

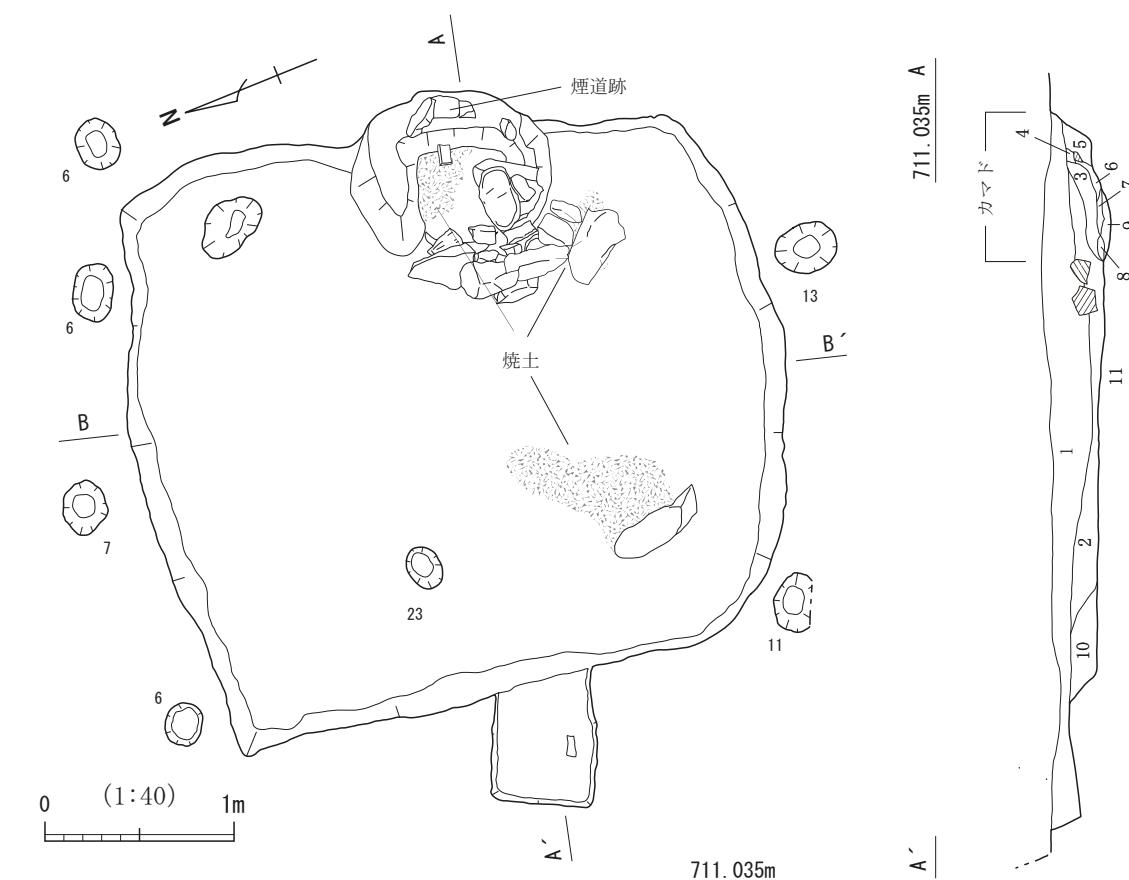


1. 黒褐色 (7.5YR2/2) 土 黄褐色土粒を 7% 含む
2. 黒褐色 (5YR2/2) 土 黄褐色土粒を 20% 含む

3. 黒色 (10YR2/1) 土 黄褐色土粒を 15% 含む
4. 黒色 (10YR2/1) 土

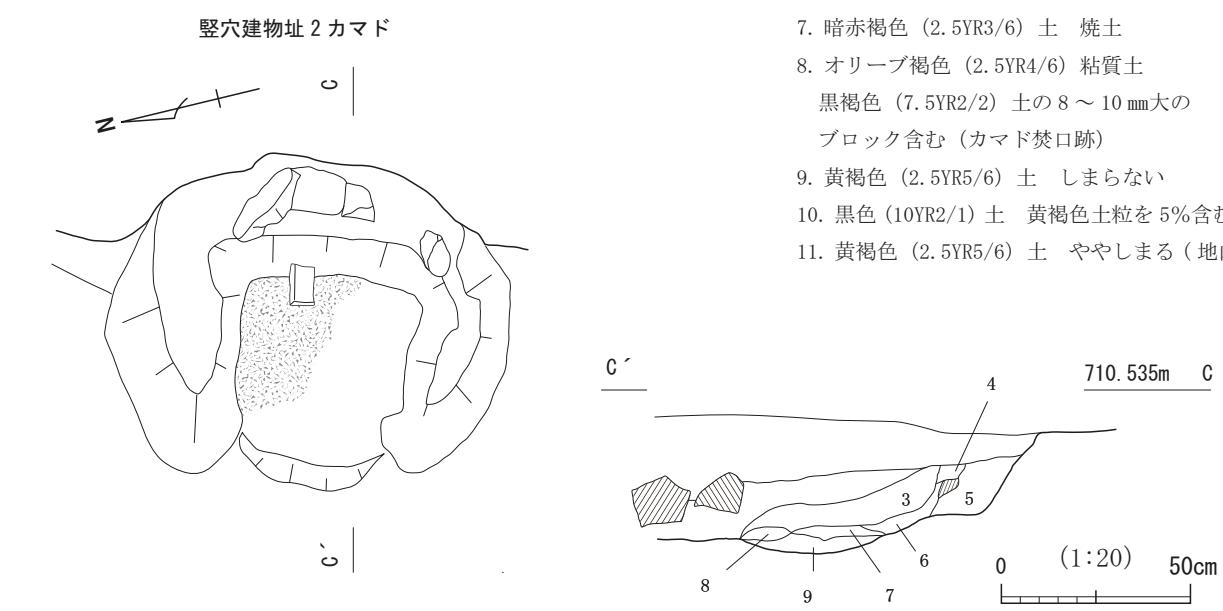


挿図 11 第 2 次堅穴建物址 1



1. 黒褐色 (7.5YR2/2) 土 黄褐色土粒を 7% 含む
2. 赤褐色 (5YR4/8) 土 焼土, 黒色 (10YR2/1) 土のブロック含む
3. 黒褐色 (5YR2/2) 土 黄褐色土粒を 20% 含む
4. 黑色 (10YR2/1) 土 黄褐色土粒を 5% 含む

1. 黒褐色 (7.5YR2/2) 土 黄褐色土粒を 7% 含む
2. 黒褐色 (5YR2/2) 土 黄褐色土粒を 20% 含む
3. 暗オリーブ褐色 (2.5YR3/3) 土 黄褐色土粒を 20%, 5 ~ 15 mm 大の黄褐色土ブロック含む
(カマドを構成していた土の崩落跡)
4. オリーブ褐色 (2.5YR4/6) 粘質土
(煙道を構成する土)
5. 黒褐色 (2.5YR3/2) 土 10 ~ 15 mm 大の
黄褐色土ブロックを含む (煙道跡)
6. オリーブ黒色 (5YR2/2) 土
7. 暗赤褐色 (2.5YR3/6) 土 焼土
8. オリーブ褐色 (2.5YR4/6) 粘質土
黒褐色 (7.5YR2/2) 土の 8 ~ 10 mm 大の
ブロック含む (カマド焚口跡)
9. 黄褐色 (2.5YR5/6) 土 しまらない
10. 黑色 (10YR2/1) 土 黄褐色土粒を 5% 含む
11. 黄褐色 (2.5YR5/6) 土 ややしまる (地山)



挿図 12 第 2 次豎穴建物址 2

に、カマドの芯材となっていた石材やカマド内の焼土が散乱したものと考えられる。

出土遺物は、土師器杯A・甕A・同B（刷毛目甕）、黒色土器A杯A、須恵器杯B・杯蓋B・甕A、灰釉陶器碗・皿がある。須恵器杯B・杯蓋Bは奈良時代後期から平安時代初め、美濃須衛、混入品として縄文時代中期（第2図10）他の土器片・石器がある。

出土遺物から、平安時代の9世紀後半の竪穴建物と考えられる。

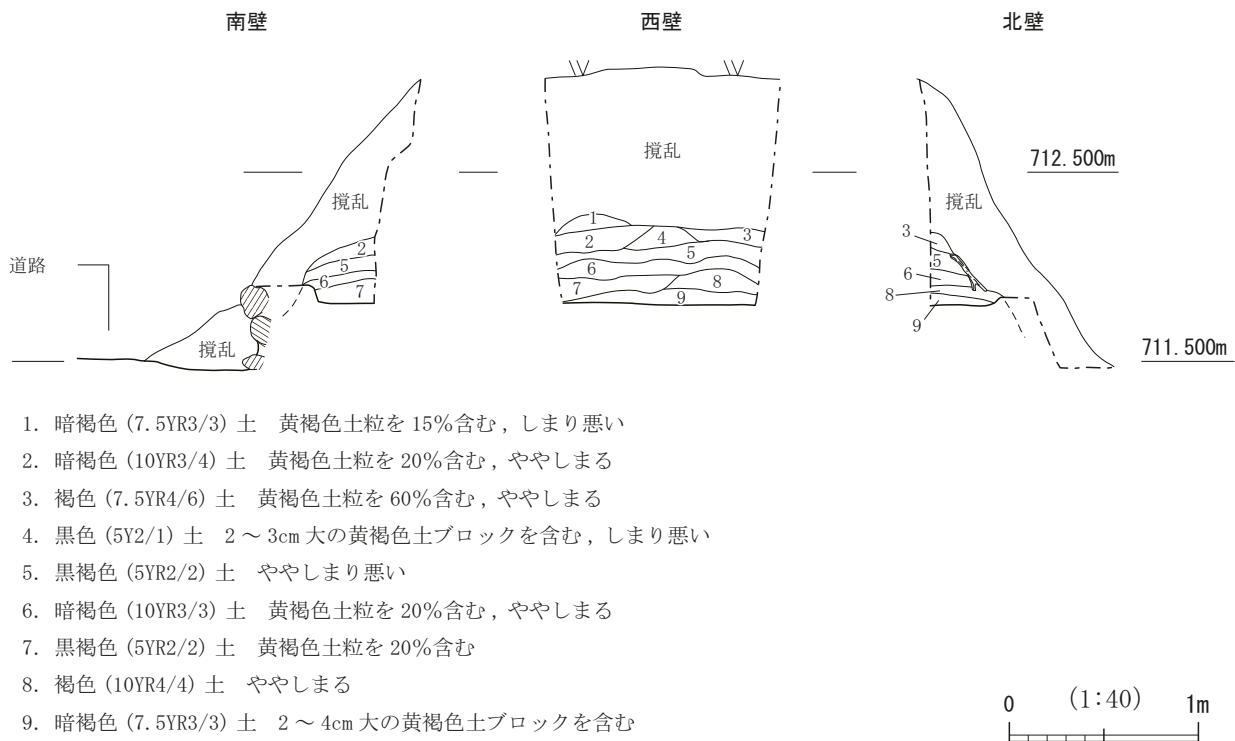
2) 溝址（挿図10）

調査時には上層溝として一括した。北側を溝址1、南側を溝址2とする。調査区の北側、竪穴建物址1の上部で検出した。溝址1は幅10~55cm、深さは9~29cm、溝址2は幅20~35cm、深さは4~21cm、両溝間は15~50cm程度を測る。東西方向に延びる溝址1、溝址2ともに底面の傾斜は見られず、埋土は黒褐色土の単層であり、水が流れていた痕跡は見られなかった。溝の間隔は西側が狭いが、検出状況から小畦畔の両側に小規模な溝が設けられたものと考えられる。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

（2）遺構外出土遺物（第2・6図、図版16）

縄文時代早・中期の土器片・黒曜石チップ、弥生土器壺、平安時代の回転糸切りされた土師器杯（第2図19）、灰釉陶器碗（同20）、中世の甕・壺、使用痕のある鉛製の鉄砲玉（第6図12）、近世以降の陶磁器、一錢銅貨がある。鉄砲玉は竪穴建物址1の上層埋土から出土した。



挿図 13 第3次8トレンチ断面図

第4節 第3次調査（挿図4・13、図版9）

土墨石積みの構築時期を把握するため、トレンチ調査を実施した。

石積みはいわゆる自然石の野面積みで、3段に積まれる。

出土遺物は、礫と礫の間からのゴミや鉄くずがあった。地権者からの聞き取り調査で、虎口両側の石積みは昭和15年に積んだと聞いていたが、東側の土墨外側のみに見られる石積みについても、昭和になってからのものであることが判明した。

第5節 第4次調査（挿図4・14）

既存の住宅があった地表面より約30cm下でローム層を確認した。その上層は、現代のごみが含まれる盛土であった。また既存住宅に伴う配管などでさらにその下層までの搅乱層がみられた。しかし、ローム層の範囲を確認中、遺構と考えられる落ち込みが見られたため、ローム層上面で遺構の検出作業を行った。その結果、竪穴建物址1棟、溝址1条を検出、調査した。

（1）検出遺構

1) 竪穴建物址

①竪穴建物址1（挿図14～16、第2図 図版9）

調査区の南西隅、地表下約70cmで検出した。南および西側の壁は調査区外にかかり確認できなかったが、規模は一×一m、深さ40～72cmを測る方形の竪穴建物址である。東辺の方向はN25°Eを測る。入口は東壁にあり、90×50cm、高さ30cmの段状の構造が見られた。北壁の中央付近には炭化物の広がりが40×30cmの範囲で把握されたが、検出の過程でカマドは確認できなかった。床面で直径20～60cm、深さ10～30cmのピット9基を検出し、このうちP1・P3・P6・P7が主柱穴である。それぞれ長径30～40cm、短径20cm程度の長楕円形を呈し、深さ16～32cmを測る。P4・P5は径20～25cm、深さ9～14cmで、間仕切りの可能性がある。P2北側に炭化物が広がる。また、掘り込みを囲むように直径10～14cm、深さ6～13cm、埋土黒褐色土のP10～P20を検出した。いずれのピットも住居を構成する柱に関係すると考えられ、このうちP15～P18は入口部の支柱と考えられる。

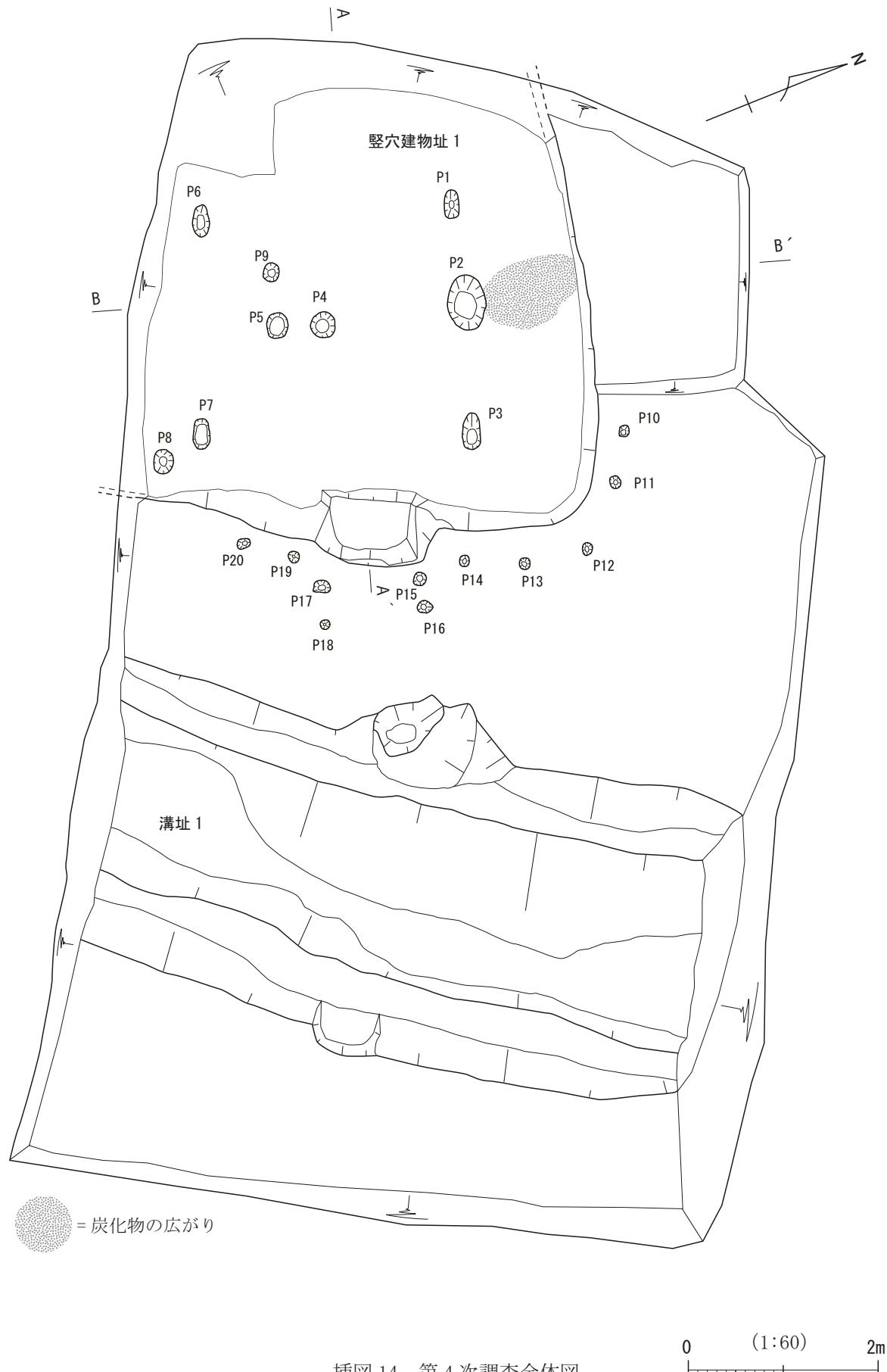
出土遺物はP2北側及びP2・P5間に分布し、土師器杯・小型甕・甕、灰釉陶器皿がある。他に縄文時代前期から中期にかけての土器（第2図22～32）・石器（第5図7・10）、弥生時代後期の壺（第2図34）・甕（同35）が混入出土した。

出土遺物から、平安時代の9世紀後半代の竪穴建物と考えられる。

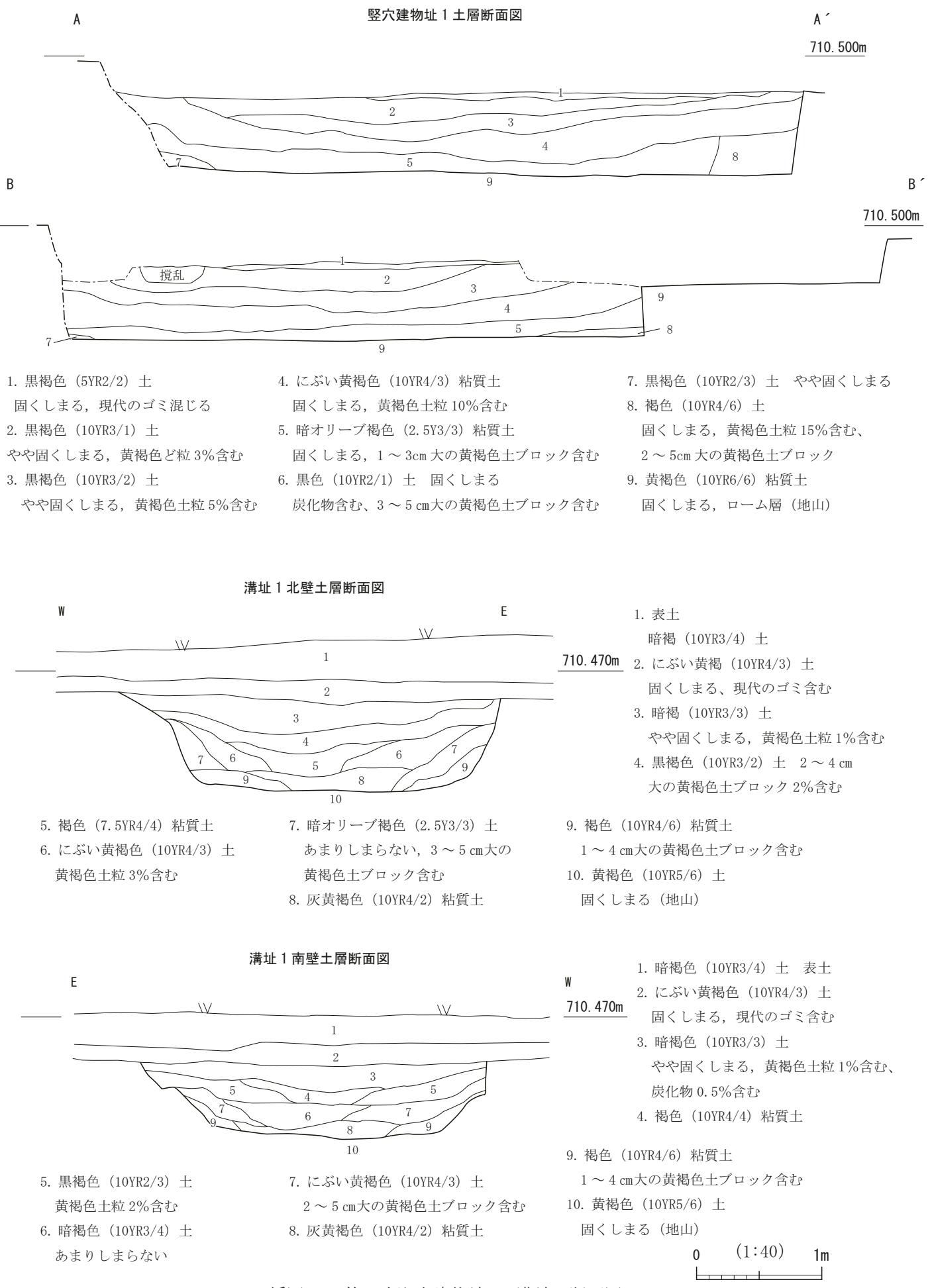
2) 溝址

①溝址1（挿図14・15、第2・5・6図、図版10）

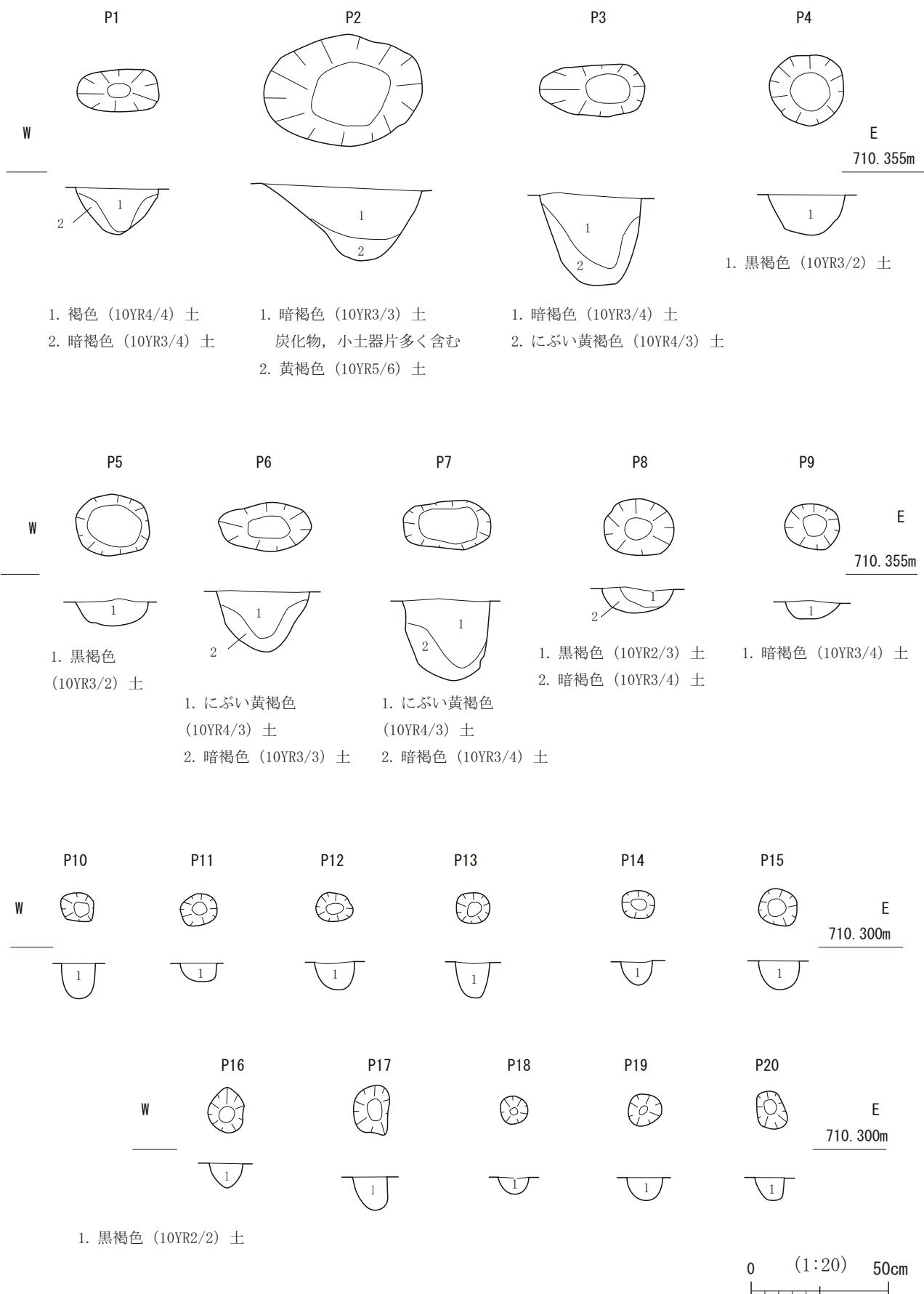
調査区の東側で検出した。南北方向（N36°E）の溝で南から北へ緩やかな傾斜をしており、上部幅3.2～2.8m、底部幅0.7～1.5m、深さ58～78cmを測る。断面逆台形を呈する。埋土はレンズ状に比較的締まらない土で徐々に埋まっていた様子が観察され、粘土やシルト質の土層は確認できなかった。埋土の状況からは、水が常に流れていたような溝ではなかったと考えられる。埋土からは、縄文時代前期から中期にかけての土器（第2図21・33）、硬砂岩製の打製石斧（第5図8）・横刃型石器（同9）・



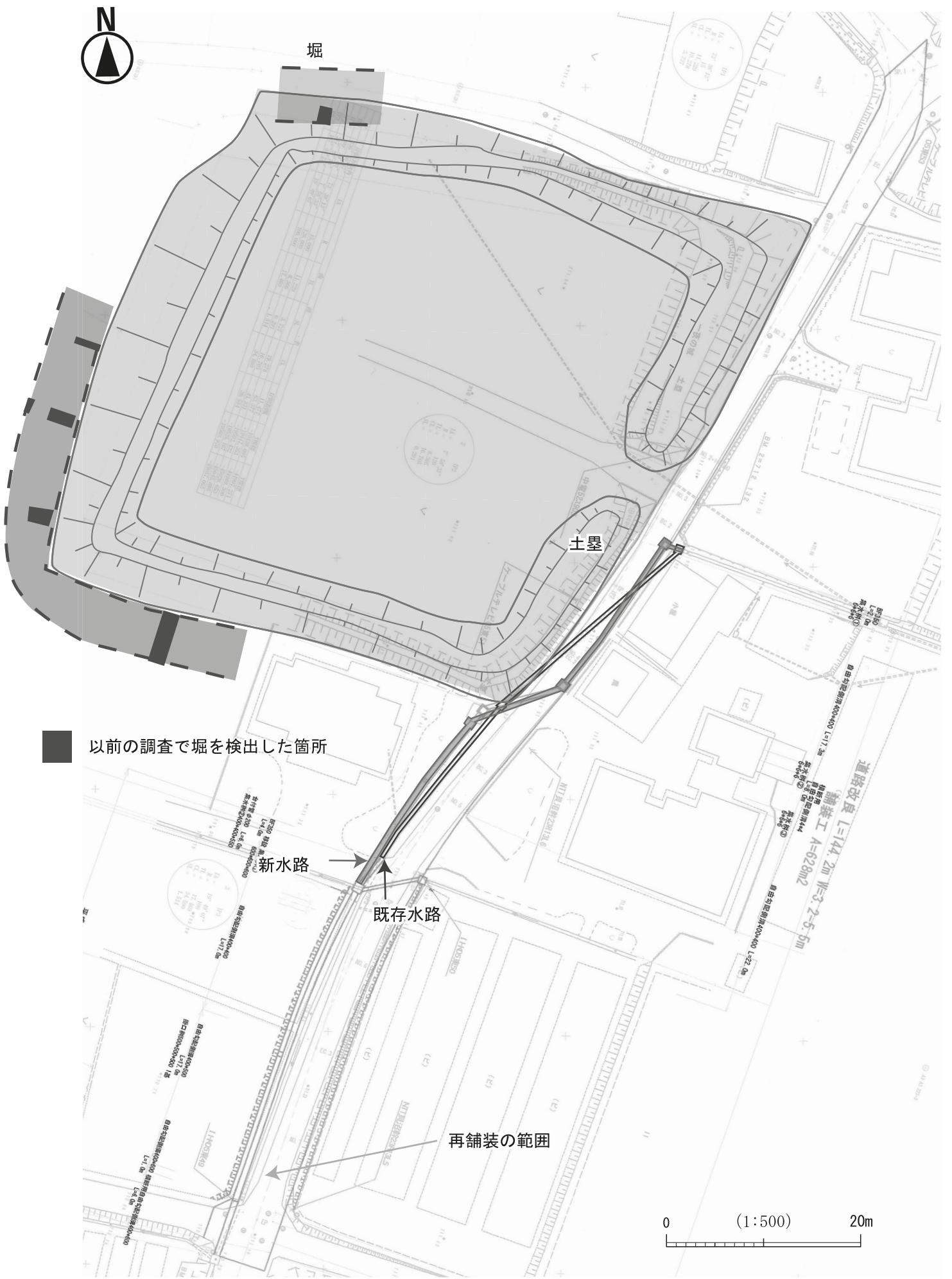
挿図 14 第4次調査全体図

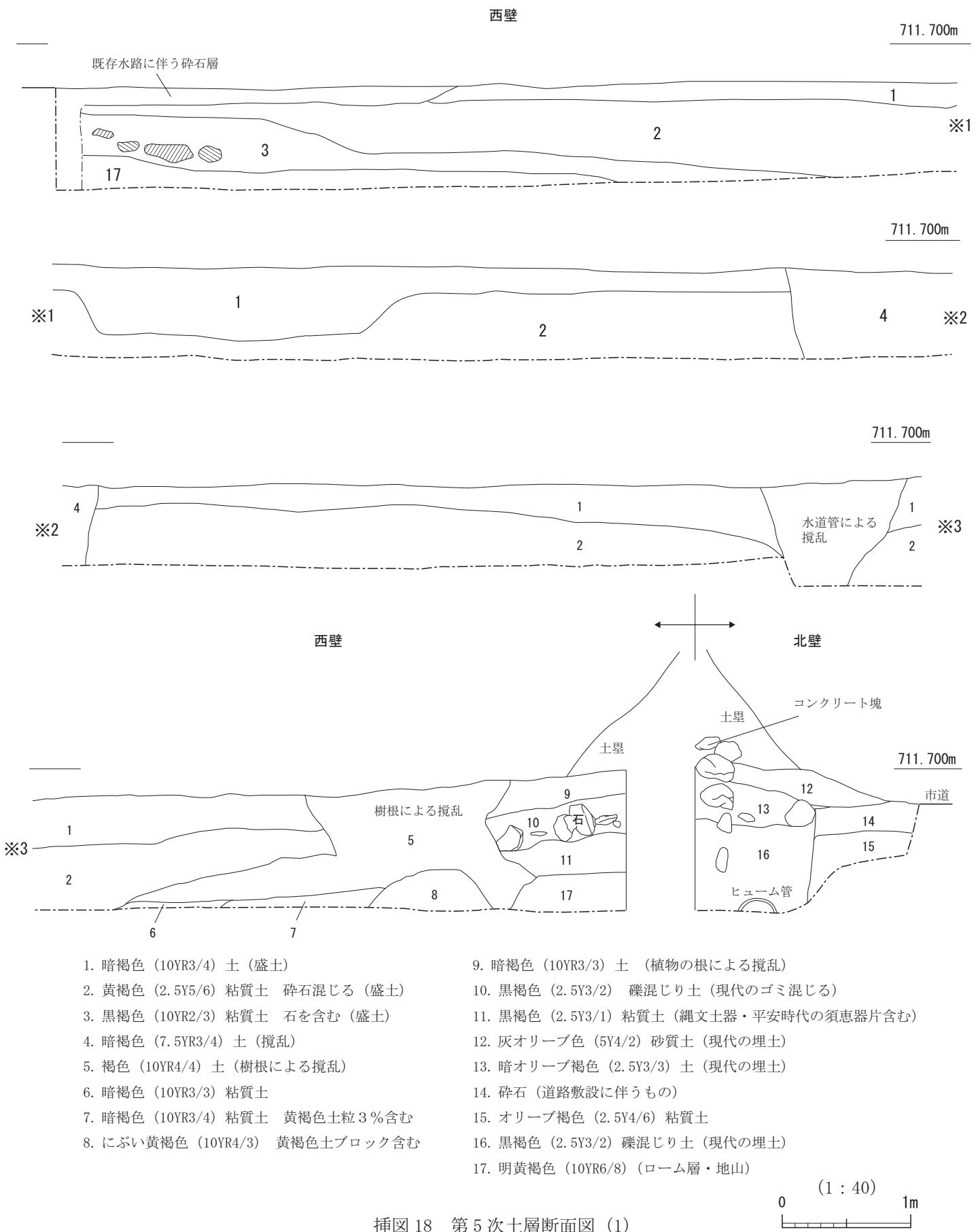


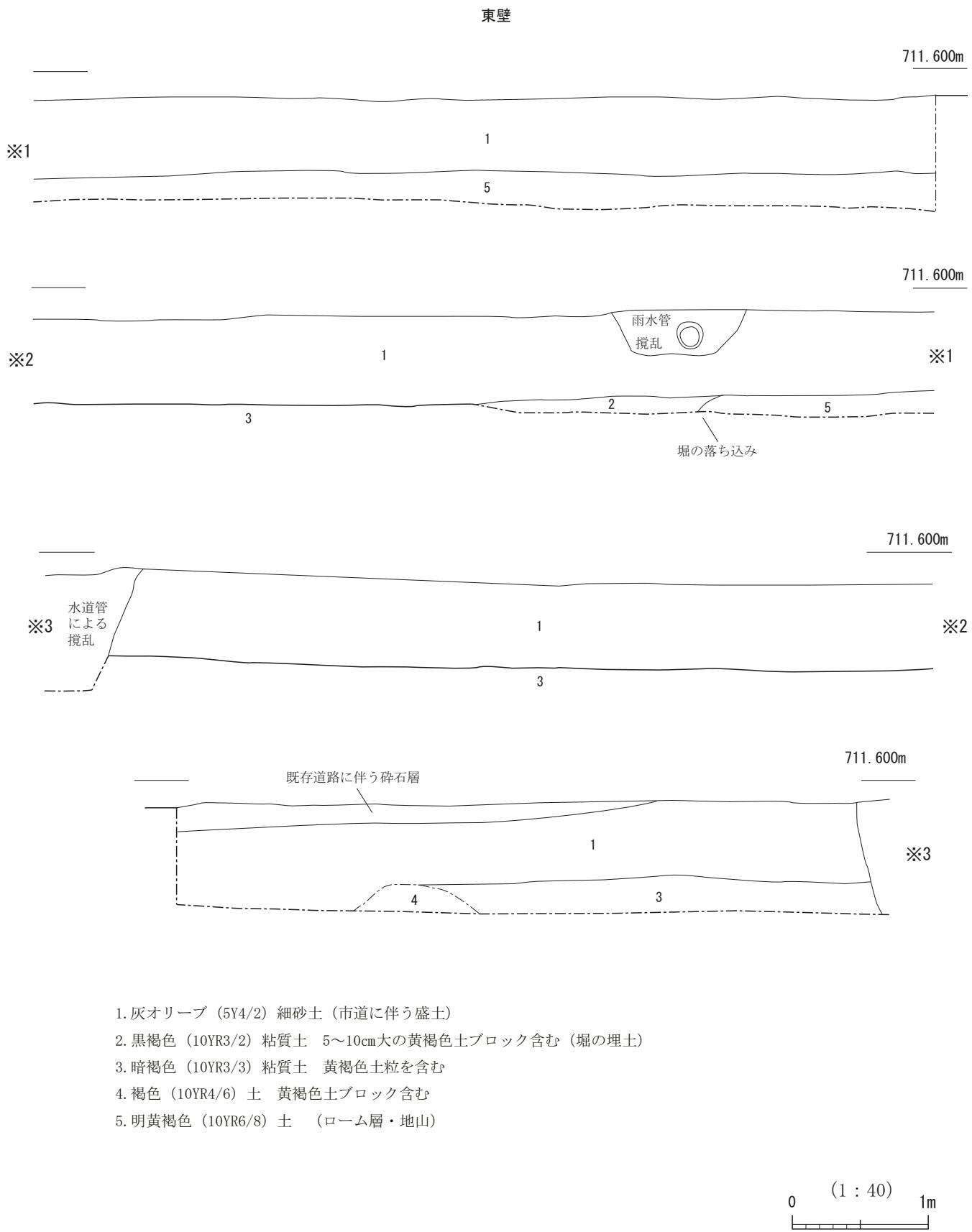
挿図 15 第4次豎穴建物址 1、溝址 1 断面図



挿図 16 第4次柱穴平面及び断面図







挿図 19 第 5 次土層断面図 (2)

石刀（第6図1）及び黒曜石製石鏃（同2）、平安時代の土師器杯・甕、須恵器、灰釉陶器皿、中世のカワラケ皿・陶器甕、鉄製品の刀子（第6図13）が出土した。

時期等詳細は不明であり、断面形は古代から中世にかけて、飯田下伊那地方でみられる灌漑のための遺構と類似するが、水が流れた痕跡がない点異なる。一方、断面形が堀とは異なるが、東側約11m先に隣接する一夜の城の土塁に平行していることから、城に関連する遺構である可能性が指摘できる。

第6節 第5次調査（挿図4・17～19、図版10・11）

一夜城跡の東辺土塁に東側に接する道路整備工事において、舗装の打替えの立会いと用水敷設替え掘削部に合わせたトレンチ調査を実施した。

舗装の打替えは、延長約144mについて既存舗装を約20cmの深さで除去するもので、道路に沿って布設されている水道管・下水管埋設時の搅乱が著しく、遺構遺物は確認できなかった。

既存用水の敷設替え部分では、集水枠と水路・ヒューム管撤去時の立会において、東辺土塁外法の3～4段の石積みについて、ヒューム管埋設後土塁補強のため設置したことが確認された。

土塁南東隅の集水枠から南側のトレンチ調査部分は、長さ25.3m、幅1.2m、深さ80cmである。トレンチの南側1／3までは現地表面から60～80cmの深さでローム面が確認された。それより北側17.1mは第1次調査で把握された南辺の堀の延長部分と考えられる。堀については掘削部分での把握に留めたため、遺物の出土はなく、規模・構築時期の詳細は不明である。

第7節 第6次調査

（1）検出遺構（挿図20）

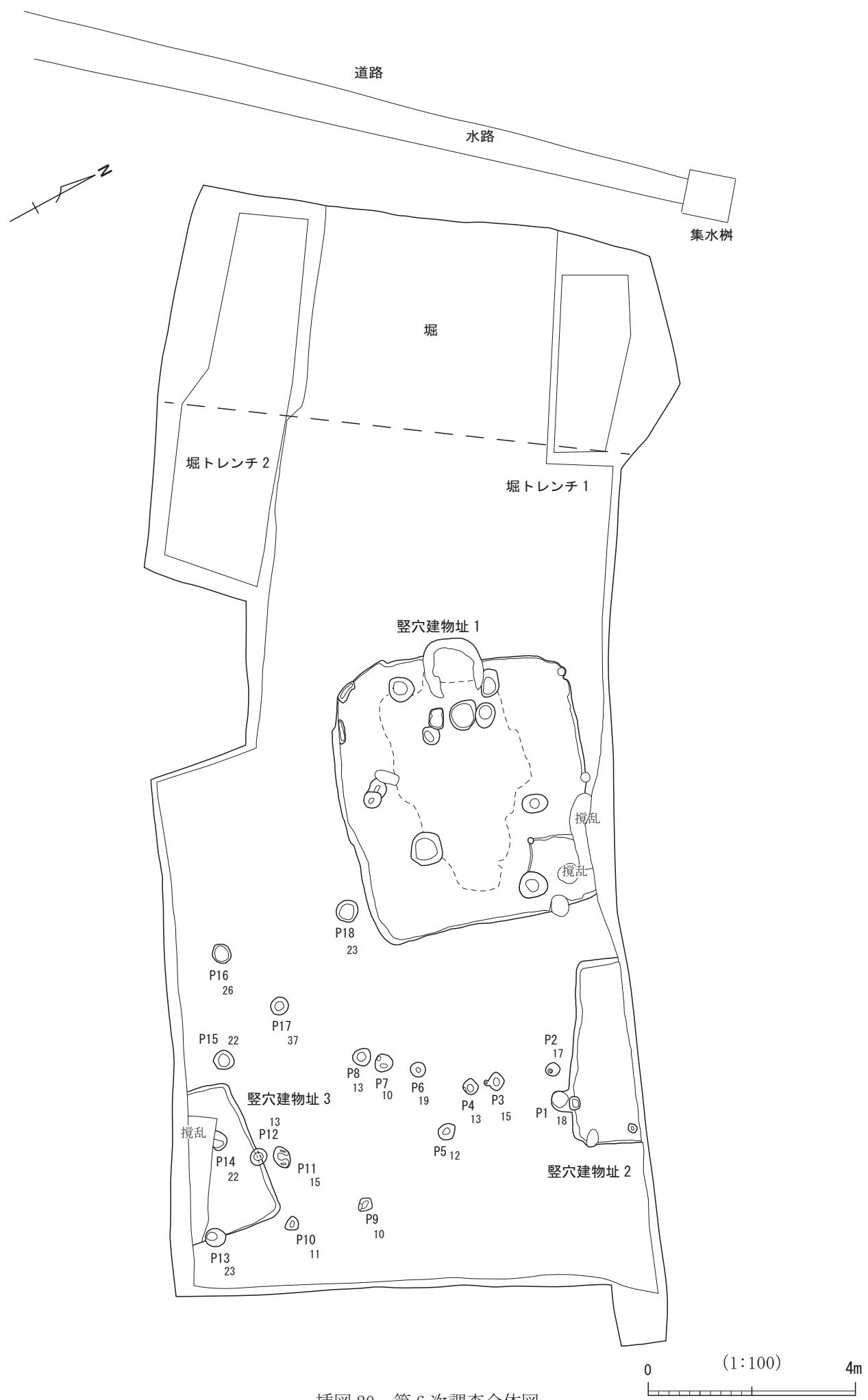
竪穴建物址3棟と一夜城跡堀を調査した。

1) 竪穴建物址

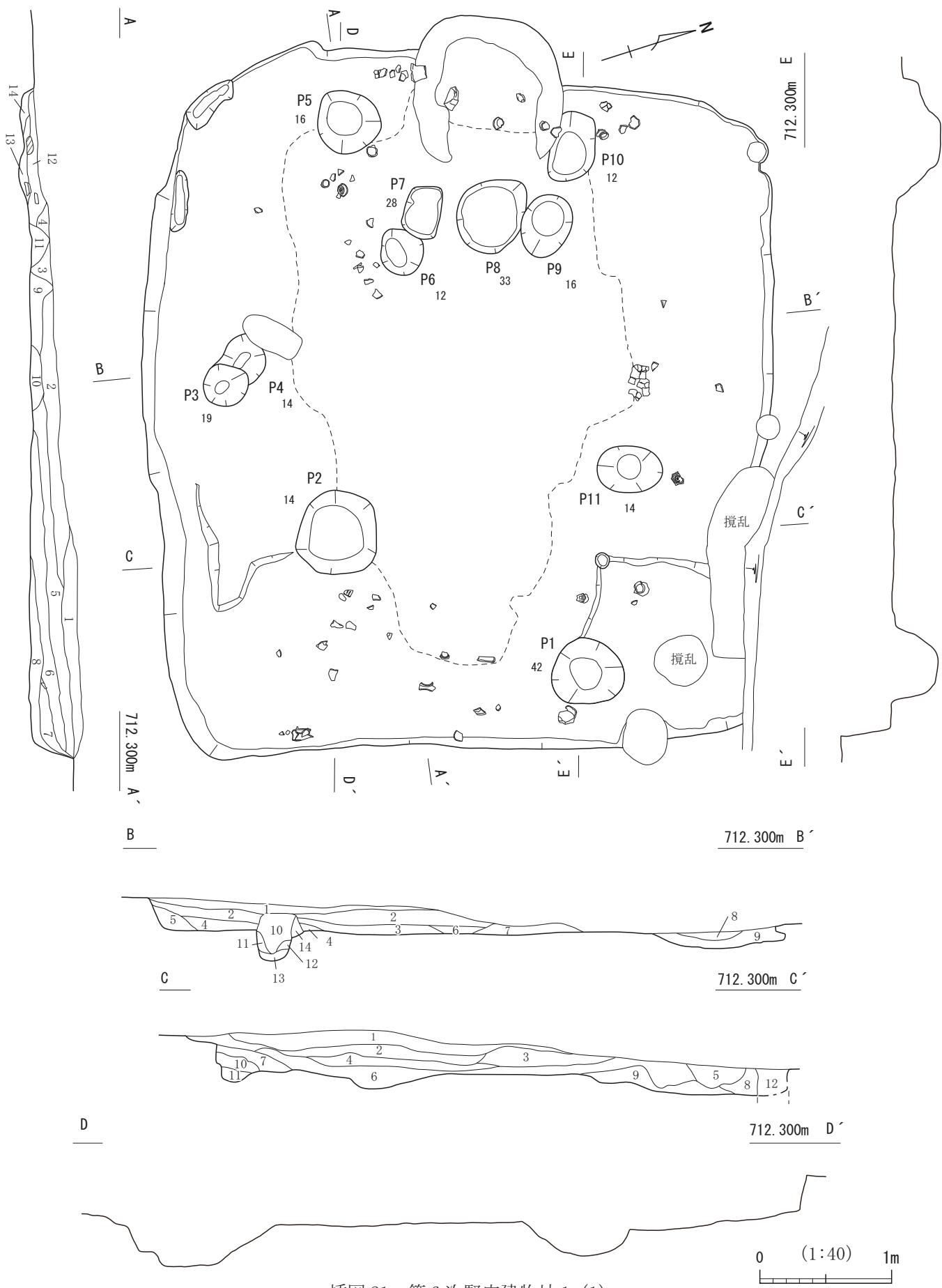
①竪穴建物址1（挿図21～23、第2・3図、図版12・13・17）

隅丸長方形を呈する、竪穴建物で、規模5.4m×4.8m、深さ3～30cmを測る。主軸方向はN89°Wを測る。西壁に石芯粘土カマドが設けられる。カマドの芯材となっていた高さ38cm、幅20cmの石材が南側の袖部分に残存し、北側の袖部分では石材の抜き取り痕が見られた。

出土遺物は土師器杯A（第2図36～第3図7）・小型甕A（同8・9）・同B・甕A・同B・同D・同G・鉢？・皿、黒色土器A杯A・皿、羽釜（第3図10）、灰釉陶器椀（同11・12）・皿（同13～19）、不明土製品（第4図1）、不明鉄製品、不明銅製品、砥石がある。また、カマドから土師器杯・甕A・同B、黒色土器A杯Aが出土した。杯Aのうち、第3図1～7は有台杯。小型甕A（8）は口唇部に指頭による押圧が施され、外反が作出される。羽釜（10）は羽釜Aと考えられるが、竪穴建物址3出土破片と接合した。灰釉陶器段皿（13）は外面に「有」と墨書される。柱穴出土遺物は、P2から土師器杯、P7から土師器杯A（第2図37）・甕A・羽釜と黒色土器A杯A、P8から土師器有段の杯A（第3図1）・甕A・同B・椀と灰釉陶器皿、P10から杯・鉢と考えられる破片が出土した。杯は黒色土器A杯Aや回転糸切りされたものがある。甕は長胴甕で細かい刷毛目が施される。砥石は仕上げ砥の持ち砥石



挿図 20 第 6 次調査全体図



插図 21 第6次堅穴建物址 1 (1)

A-A'

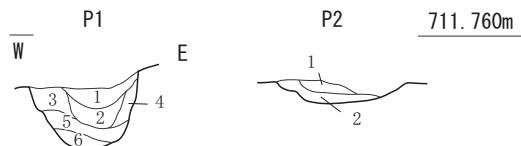
1. 黒褐色 (10YR2/3) 土 (搅乱土)
2. 暗褐色 (10YR3/4) 土
3. 暗褐色 (10YR3/3) 土
4. 暗褐色 (10YR3/4) 土 炭化物 10% 黄褐色土粒 20% 含む
5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土
6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 土
7. 暗褐色 (10YR3/4) 土 黄褐色土粒 20% 含む
8. 黄褐色 (10YR5/6) 土 (地山、床)
9. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土
10. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土 黄褐色土ブロック含む
11. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 黄褐色土粒 30% 含む
12. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 黄褐色土粒 10% 含む
13. 褐色 (10YR4/6) 土
14. 黄褐色 (10YR5/6) 土

B-B'

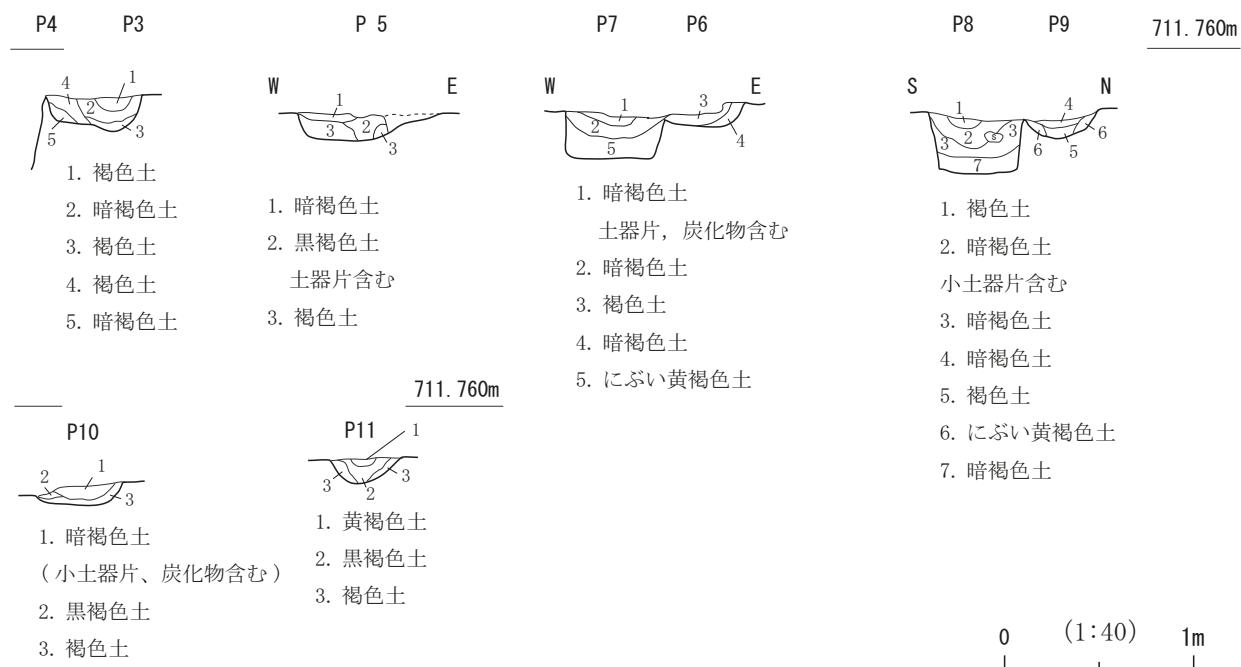
1. 黒褐色 (10YR2/2) 土 黄褐色土粒 1% 含む
2. 暗褐色 (10YR3/3) 土
3. 黒褐色 (2.5Y3/1) 土 黄褐色土粒 3% 含む
4. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土
5. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 土
2~6cm 大の黄褐色土ブロック含む
6. 黑褐色 (10YR3/2) 土
7. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 土
8. 黑褐色 (10YR3/1) 土 2~3cm 大の黄褐色土ブロック入る
9. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土
10. 暗褐色 (10YR3/4) 土 黄褐色土粒 15% 含む
11. 暗褐色 (10YR3/3) 土 黄褐色土粒 20% 含む
12. 黑褐色 (10YR3/1) 土
13. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土
14. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土

C-C'

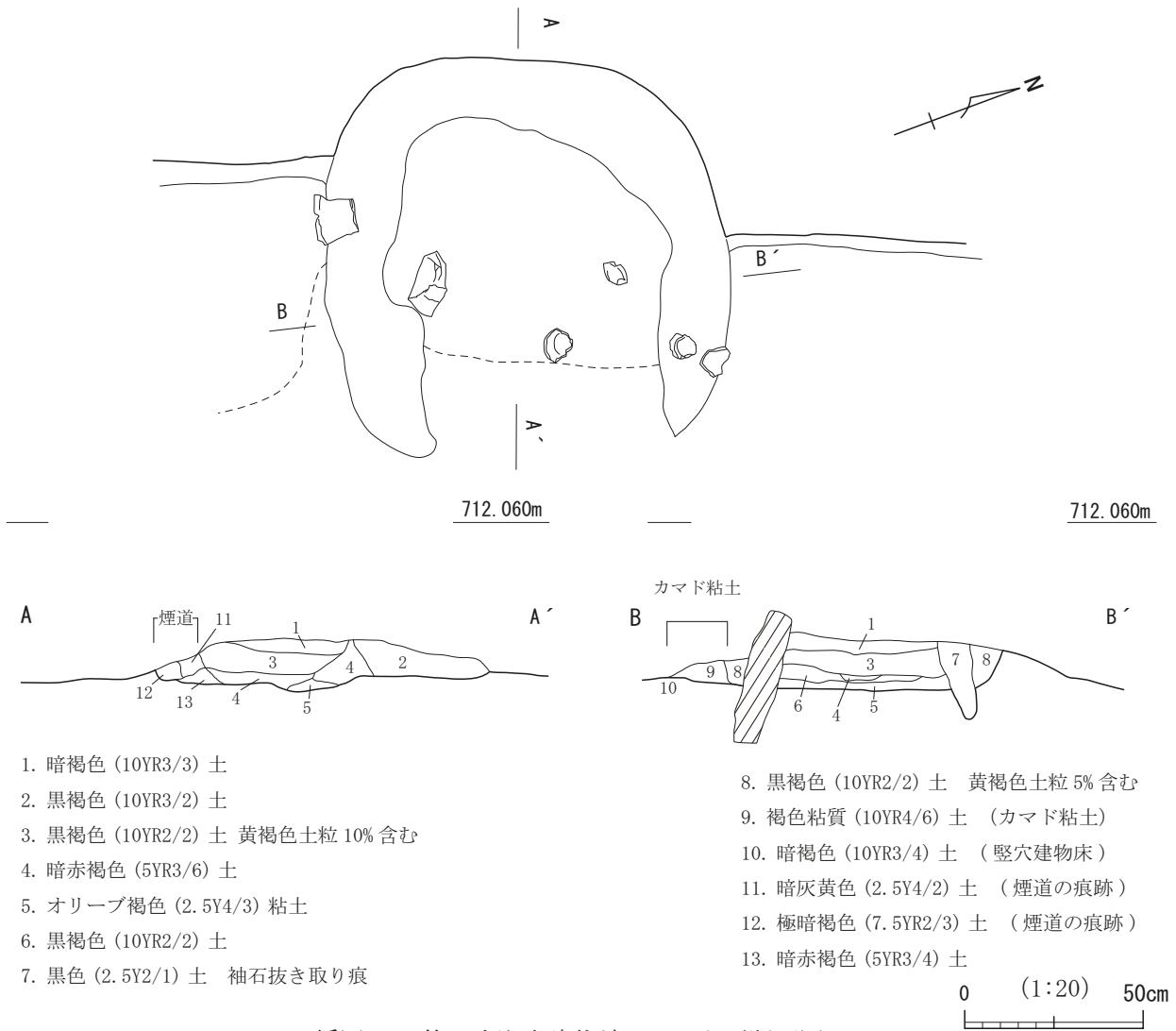
1. 黒褐色 (2.5Y3/1) 土 炭化物 2% 黄褐色土粒 2% 含む (搅乱土)
2. 暗褐色 (10YR3/1) 土 黄褐色土粒 1% 含む
3. 暗褐色 (10YR3/4) 土 黄褐色土粒 5% 含む
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 黄褐色土粒 5% 含む
5. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土 10cm 大の黄褐色土ブロック入る
6. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 黄褐色土粒 10% 含む
7. 黑褐色 (2.5Y3/2) 土
8. 黄褐色 (10YR5/6) 土
9. 褐色 (10YR4/6) 土
10. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 土 黄褐色土粒 3% 含む
11. 黑褐色 (2.5Y3/2) 土 黄褐色土粒 5% 含む
12. 黑褐色 (10YR3/1) 土 黄褐色土粒 30% 含む



1. にぶい黄褐色土
2. 褐色土
3. 暗褐色土
4. 黄褐色土
5. 黑褐色土
6. 暗褐色土 2~3cm 大の黄褐色土ブロック含む



挿図 22 第6次堅穴建物址 1 (2)



挿図 23 第6次竪穴建物址1 カマド平断面図

である。埋土内の混入遺物として縄文時代前期他の深鉢片、硬砂岩製打製石斧・横刃型石器、緑色岩製磨製石斧、磨石、硬砂岩製敲打器、緑色岩製石剣（第6図10）が、また、P11から緑色岩製磨製石斧（同8）、P17から硬砂岩製石錐（同9）が出土した。

出土遺物から、平安時代中期（10世紀中葉）の竪穴建物と考えられる。

②竪穴建物址2（挿図24、図版13）

調査区外にかかり検出された。規模は3.55m×1、深さ11~22cm、南壁の方向はN59°Wを測る。

出土遺物は、土師器杯・甕の他、縄文時代前期から中期前葉にかけての深鉢片、黒曜石チップがある。平安時代の竪穴建物址と考えられるが、時期等詳細は不明である。

③竪穴建物址3（挿図24、図版14）

1/2以上が調査区外にかかり、検出された。搅乱に大きく壊される。規模は2.88m×1、深さ16~21cm、北壁の方向はN85°Wを測る。

土師器杯・甕A・同Fの他、縄文土器片、不明鉄製品、近現代の磁器片が出土した。

平安時代の堅穴建物址と考えられるが、時期等詳細は不明である。

2) 堀 (挿図20・25、図版14)

道路に面した調査区の西端部2箇所で把握した東辺堀外側の肩が把握されたことから、調査区北壁に沿ってトレンチ1を、南壁に沿ってトレンチ2をそれぞれ設定し、掘下げを行った。両トレンチは堀の基底部まで達していない。このため、第1次調査4トレンチで確認された堀改修の痕跡はそれほど明瞭ではない。強いて言えば、トレンチ1では33層下面に、トレンチ2では40層下面に不連続を指摘できそうである。

トレンチ1からの遺物は、最深部からの土師器甕・須恵器甕各1点の出土がある。いずれも細片であり、掘削後の流れ込みと考えられる。また、トレンチ2の遺物は灰釉陶器皿1点の他、近世から近現代にかけての磁器1点がある。

出土遺物は堀に伴うものではなく、掘削時期等詳細は不明である。

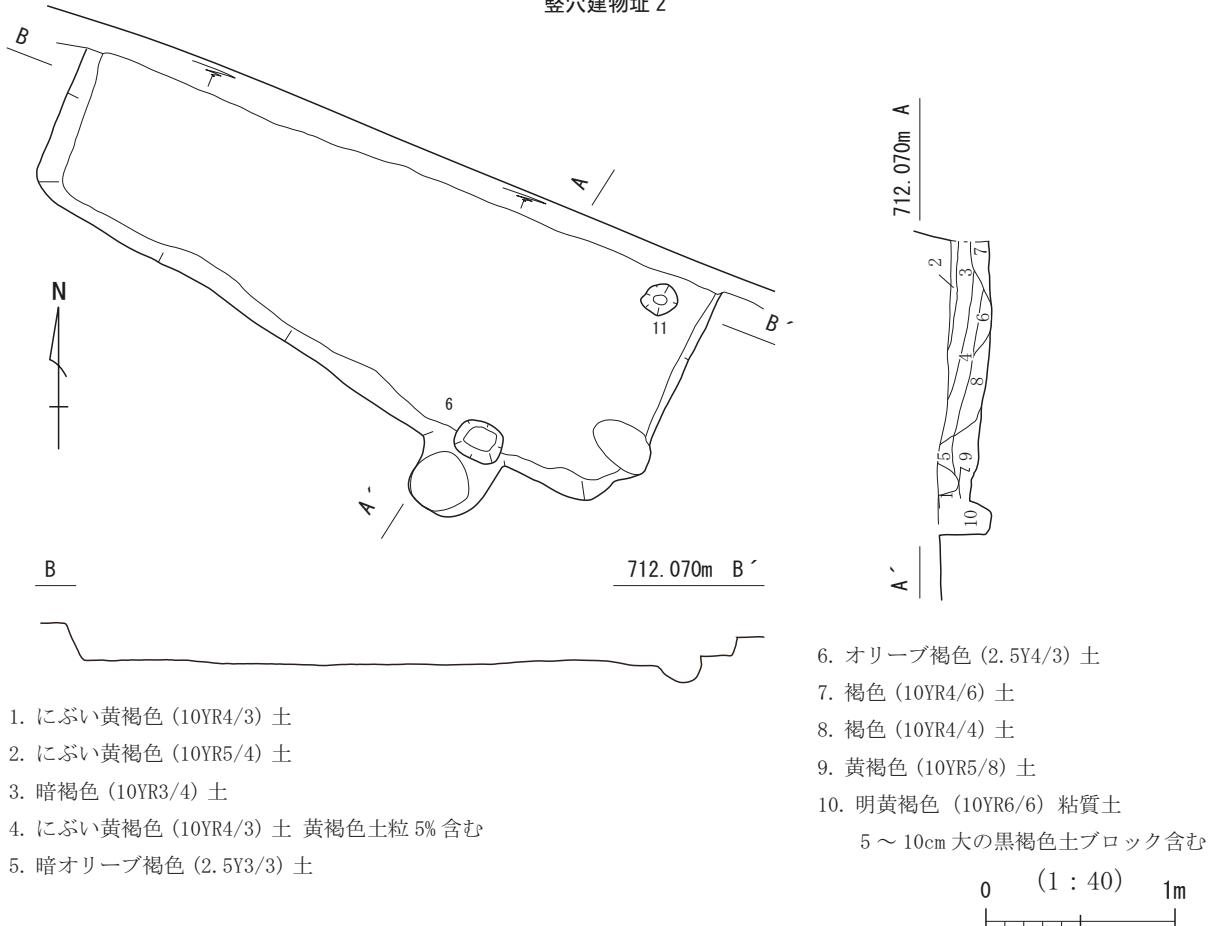
3) 柱穴 (挿図20・26)

堅穴建物址1～3の間で柱穴を検出した。

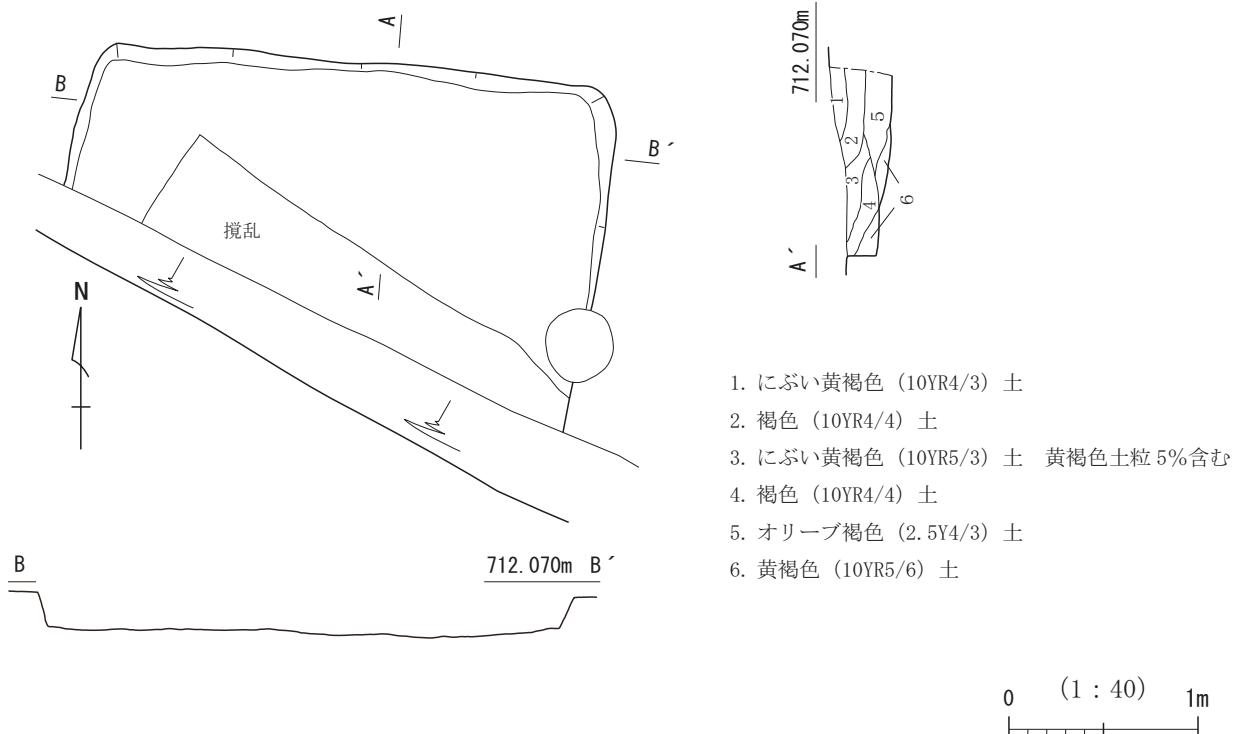
(2) 遺構外出土遺物 (第4・6図、図版17・18)

縄文時代前期から後期にかけての深鉢片 (第4図2～12)、および黒曜石チップ、土師器杯・甕・羽釜 (同15)、須恵器甕 (同13・14)、灰釉陶器椀・皿、不明鉄製品、近世から近現代の陶磁器がある。縄文後期の深鉢底部片には網代痕がある。土師器には、黒色土器A杯Aや回転糸切りされた杯がある。

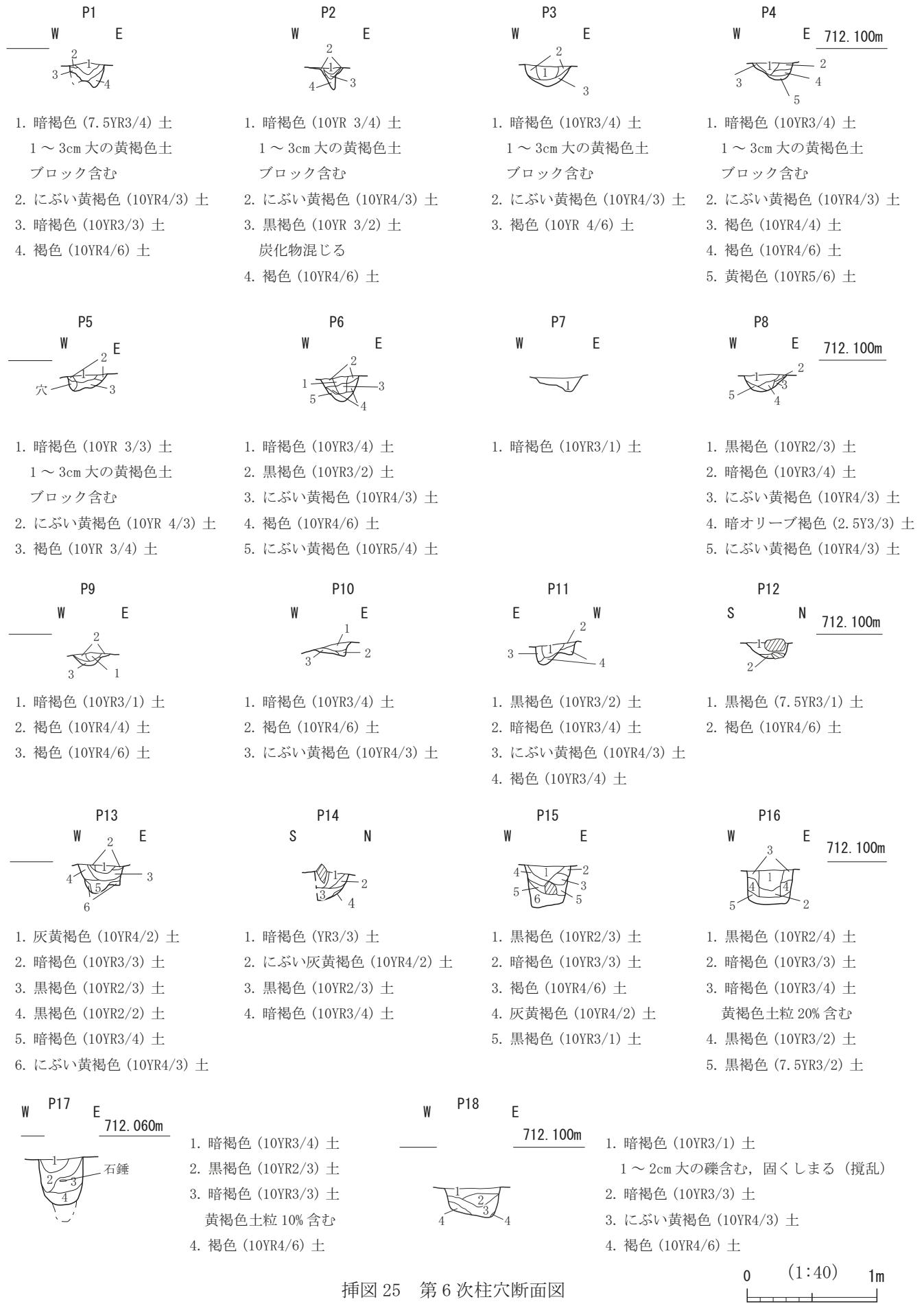
堅穴建物址 2



堅穴建物址 3

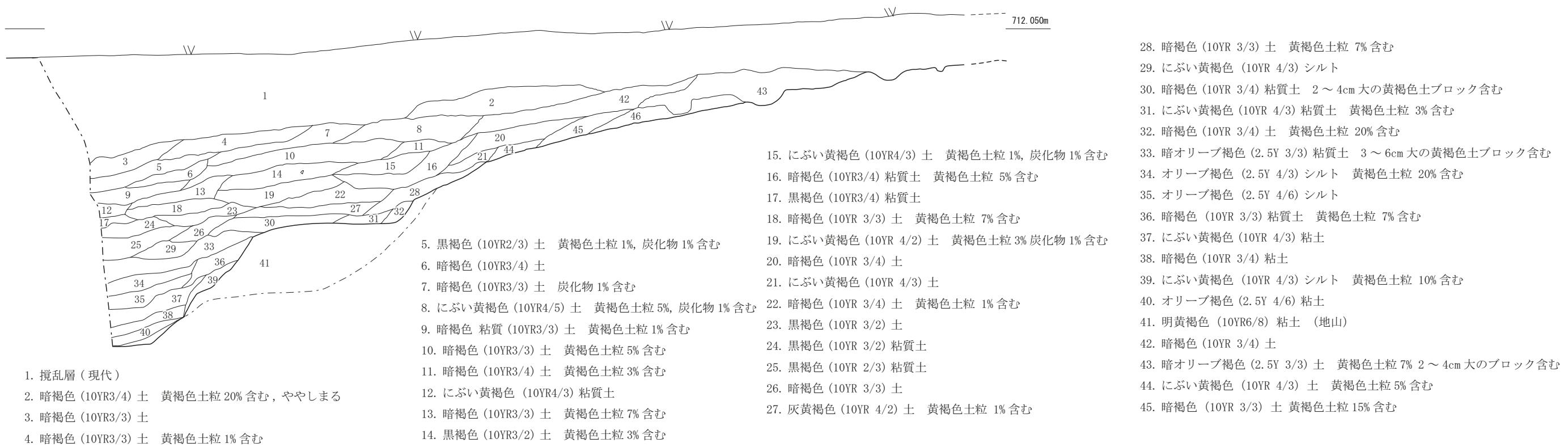


挿図 24 第 6 次堅穴建物址 2・3

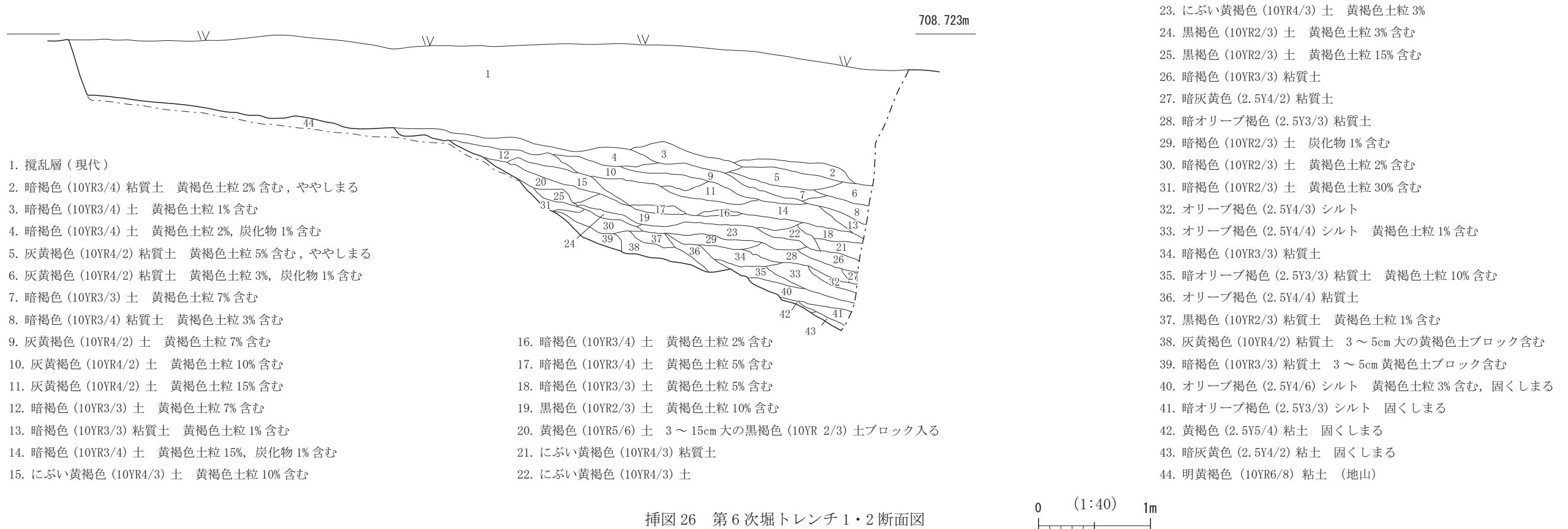


挿図 25 第6次柱穴断面図

堀トレンチ1断面図



堀トレンチ2断面図



挿図26 第6次堀トレンチ1・2断面図

第4章 総括

第1節 「一夜の城」について

「一夜の城」は『信長公記』(太田牛一著) 卷一五 信州高遠の城、中将信忠卿攻めらるゝの事の条に登場する三月朔日の記事、「かいぬま原に御陣取」に関わる城館跡として注目されてきた。文献、古文書等、その周辺調査を行う中で、「一夜の城」の名が歴史の舞台に登場してくるのは明治34年に刊行された『南信伊那史料』であり、それ以前は元禄検地水帳記載の「大光城」ないし明治8年の貝沼学校敷地願い記載の「延院坊城址」と呼ばれていたと考えられる。

(1) 発掘調査結果

一夜城跡は、土壘現況外縁で東辺59.0m・南辺54.4m・西辺50.4m・北辺64.0mを測り、不整方形を呈する。西・北辺の土壘は昭和期に削平を受け損傷が著しく、土壘と外縁／内縁の比高差は東辺約1.8m／1.5m、南辺約3.1m／約1.6m、西辺約1.6m／約0.2m、北辺約0.6m／約0.1mを測る。敷の幅は東辺9.8mを測る。東辺中央に虎口が設けられ、間口は3.0mを測る。堀は第1次調査1、2-1、3トレンチの東端で西辺土壘外側に西辺堀の内側肩が確認された。また、2-2トレンチは、西辺堀の外側肩が確認できる位置にあたるが、緩やかに掘り下がっており、必ずしも明確ではなく、堀の規模は不明である。5トレンチでは、北辺土壘外側に北辺堀の内側肩が確認された。第6次調査では東辺堀外肩が確認されており、四周に堀が巡らされていたことが把握された。ただし、虎口部分が土橋で掘り残されていたか、それとも橋が架けられていたかは、調査が及んでいないため不明である。

第1次調査4・7トレンチの調査で確認された土壘と堀では、改修の痕跡が確認された。土壘断面と堀断面でそれぞれ観察された時間的間隙は、水道管布設に伴う搅乱のため、前後関係の把握が困難である。しかし、土壘土層観察によって堀を掘るという行為と土壘を積み上げるという行為が同時に行われたと考えられる状況から、堀の改修と土壘の修築は同時一連の行為と考えられる。

以上から堀と土壘の構築・改修築過程を復元すると、城のおそらく始期に堀を掘り土壘が搔き上げられる。一定期間経過して土壘が一定程度崩壊するとともに、堀も一定程度埋没する。その後、埋まって浅くなった堀について幅を拡げ改修する必要が生じ、掘削土を土壘上に改めて積み上げたと考えられる。

次に、出土遺物から「一夜の城」の始期・終期、存続期間を整理する。

第1次調査4トレンチ出土の天目茶碗は、口縁の屈曲が弱く境が不明瞭で体部が丸い天目茶碗Ⅲ類(藤沢2008)であり、古瀬戸後期様式Ⅲ期のものと考えられる。また、古瀬戸四耳壺は頸部に絞り痕を明瞭に残し、内面に紐輪積み痕を留めることから後期様式I～Ⅲ期に比定される。さらに、内耳土器は主に古瀬戸後期様式Ⅳ期以降に明確に存在が捉えられることから、「一夜の城」の築城は少なくとも15世紀中葉以前に遡ると考えられる。また、平安時代中期10世紀中葉の集落と重複していることから、始期の上限が押さえられる。

一方、終期すなわち廃絶時期については、第1次調査5トレンチ内からの近世～近現代の陶磁器、第6次調査2トレンチ内での近世～近現代の磁器出土といった断片的な情報に留まり不明である。ただ、「一夜の城」の存在が永く認知されてこなかったことからみて、近世の相当早い段階で機能停止していたと考えられる。

以上、断片的な情報から押さえられる「一夜の城」の存続期間は、最短で120年、最長で600年程度と考えられる。

(2) 「一夜の城」の性格

伊那市内の城館跡について、『伊那市史 歴史編』(伊那市誌編纂委員会1983) では、立地から山城、平山式、丘陵式（ないし丘陵状）、平式、台地式、扇状地式に、郭の形状から方形、雑形、郭の配置から連郭式、単郭、機能から物見台・根小屋城、館城、館に分類している。富県の貝沼地区には一夜城跡をはじめ黒河内城跡・池田城跡・古城跡・荒城跡・埋橋の城跡といった、周囲に土塁を巡らせた『平式館単郭方形』の居館が特徴的にみられる。一夜城跡は郭内の発掘調査が具体的に行われていないものの、形態から見て館跡であることは疑いなく、この点笹本正治が一夜城跡を城ではなく居館の跡として捉え直すことを提案している（笹本2011）ことは至当といえる。

調査で把握した土塁・堀を改修するに至る動機については、複数が考えられる。まず、館主がその主体であった場合、築造からの時間的経過の中で徐々に土塁が崩れ堀が埋まつていったことに対する内的なものと、争乱期の危機的状況に対応する外的なものが考えられる。また、改修主体が他者であった場合、前館主の権威を否定するような改修を施すケースや、臨時の使用に対応する暫定的な改修等が考えられよう。争乱期に城の備えを厚くした結果であれば、堅牢化のため堀の幅を広げるのみならず深さについても配慮されたことが考えられるし、構造的な改変や虎口に破却の痕跡がないことからすれば、戦さ等による館主の交代は考えにくい。いずれの場合が考え得るか、調査が細部に及んでいない状況では即断しかねる。

(3) 織豊期の陣城について

「一夜の城」は、織田信長の嫡子信忠が高遠城を攻略するために一夜にして陣を構えたという伝承が残る。中には「一夜の城を築いた道具は桜井の二〇～三〇戸の家からすべて持って行き、女・子どもも伊那富士へ避難した。攻めた後で道具は全て洗って返してくれた。」(濱2012) というものもある。果たして、伝承どおり織田氏が一夜にして築いた陣城であろうか。

陣城とは、「『戦場で構築された臨時の城』で、単に自然地形に軍勢が駐屯するだけでなく、堀を掘つて曲輪の周囲に柵や土塁を設け、櫓をあげて攻撃や防御のできる施設や、城館・寺院・神社等が陣として使用され、改変されたもの」と規定される（高橋2018）。

陣城の種類について、高田徹の分類を基に高橋成計は、①敵の城郭を包囲する付城、②敵の城郭と対峙する陣城、③補給路の封鎖、確保のための繋ぎの陣城、④本城をサポートする陣城（支城）、⑤味方の城が包囲されたときの後詰の付城、⑥臨時の拠点、の6通りに分類（同前）している。このうち⑥の敵領内での臨時の拠点として、織田氏による伊賀制圧の際の短期的な居館改修事例を挙げている。

また、中井均（2011）は、織田・豊臣の攻城戦・対峙戦の特徴として、「方半町くらいの方形プランのお城を造って、それを付城や要害あるいは取出と呼んで陣城としていた」ことを指摘している。加えて、『信長公記』の記述をめぐって、要害・付城・取出の場合には、「要害を丈夫に構え」「付城を相構え」「御取出仰せ付け」と記しているのに対し、「一夜の城」の場合は「御陣取り」と書かれており、単に陣幕を張るだけでもいいことから、もともとあった在地の館跡を利用した可能性を指摘している（中

井2011・2013)。敵(武田)領内の郷士の居館を改修して陣城としたと考えられる。なお、天正10年(1582)8月21日に埋橋彦介宛てに高遠城攻めの勲功に対し感状が与えられていること、同様に他の郷士たちにも下賜された可能性が指摘されている(篠田1971)。おそらく、「一夜の城」はじめ諸城は織田軍により接収されたのではなく、機をみて敏なる富県の郷士たちが自分たちの居館を積極的に織田軍に提供したことに対する感状であったと考えられる。すなわち、前述の一夜城跡の堀・土塁の改修は、織田氏の高遠城侵攻に際し郷士が自発的に居館を提供したのを承け、陣城として急遽工事が施された可能性がある。

第1次～第6次の調査結果では、織田軍による築城とする伝承を直接裏付ける痕跡や出土遺物はない。飯田市内では松尾城跡本曲輪や飯田城跡二の丸の第一次空堀から三河地方の内耳土器が出土している(飯田市上郷考古博2009)が、こうした遺物はない。限定的な調査の故もあるが、一時的な陣城したことや、極めて短時日に高遠城攻略戦が終了したことから、直接それを示す遺物は残されなかつた可能性もある。

(4) 今後の調査研究課題

一夜城跡は、昭和期に土塁の一部が搔き崩されたが、郭内に盛土された状況が第1次調査で把握されていることから、他の遺構は良好な状態で保存されていると考えられる。今後、郭内の調査によって、土塁・堀の構築年代や郭内の建物配置や変遷等が明らかにされるとともに、当地域の城館跡の特質や在地勢力の消長等中世史研究が進むと期待される。

ところで織田信忠本陣の「御陣取り」した居館は、果たして一夜城跡であろうか。あるいは、上記貝沼諸城のうちいずれの居館であったろうか。『信長公記』卷十五 三月朔日の条にある織田信忠が「御ほろの衆十人ばかり召し列れ、仁科五郎楯籠り候高遠の城、川よりこなた高山へ懸け上げさせられ、御敵城の振舞の様子御見下墨なされ」た所から、そう遠くないと考えられる。しかし、一夜城跡は貝沼のうちでも高遠城に近いわば前線であること、上記埋橋氏への感状があることからすれば、本陣は埋橋氏の荒城辺りに置かれた可能性もある。中井が指摘するように、織田軍の東国に攻めていったときの陣城遺構として大変貴重な遺跡である(中井2011)という評価は揺るがないとしても、陣城遺構群として捉える範囲を第3章第1節(1)で設定した範囲よりもう少し拡げる必要があるかもしれない。周辺の城館跡を含めた調査により、高遠攻城戦の実態が明らかにされるとともに、織豊期の陣城研究進展の一助となると考えられる。

第2節 他時代の遺構・遺物

6次にわたる調査の結果、一帯の原始以来の変遷も明らかにされつつある。

(1) 繩文時代

明確に遺構は確認されていないが、縄文時代前期を中心に、後・晩期にかけての土器・石器や「第二の道具」と呼ばれる石刀・石剣が出土している。早期から前期にかけての遺構、特に竪穴建物址に関しては、第2章で見たとおり市内では城塙遺跡・上島遺跡等調査例は限られる。こうした傾向は伊那谷各所で同様の傾向がみられ、宮田村中越遺跡を除き調査事例は少ない。天竜川下流域の飯田市内でも早期

の石子原遺跡・美女遺跡・北田遺跡、前期の田井座遺跡・黒田大明神原遺跡では堅穴建物の検出にかなり苦労している。当該期の堅穴建物の埋土が中期中葉以降に比して把握しづらいことから、トレンチ調査では十分把握できていない可能性がある。

(2) 弥生時代

きわめて断片的であるが、第4次調査で弥生時代後期の壺・甕が出土した。歴史環境で整理したとおり、段丘面上の広範囲に後期には集落が拡散する状況があり、本遺跡やその周辺でも当該期の堅穴建物や墳墓群が確認される可能性がある。また、当該期の生産基盤は、畑作と、県道沢渡高遠線北側の段丘崖下ないし黒河内城跡との間の小さな洞地形部分を利用した稲作が想定される。

(3) 平安時代

第2次・第4次・第6次において、計6棟の堅穴建物址が調査されている。時期は9世紀代、10世紀半ばの2時期が考えられ、市内における同時代の集落の存続時期と同様の傾向を示している。本遺跡の一画に位置する宮ノ花八幡神社の創建年代は不明であるが、久寿2年（1155）に再建されたとされる（伊那市教委1968、同2001b）。本遺跡の調査結果からみて、八幡神社の創建は少なくとも平安時代中期まで遡ることが確実と考えられる。

調査により、一夜城跡の実態がある程度明らかにされた。特に、具体的な一夜城跡の変遷解明には至らなかったものの、一夜城跡の堀・土塁が改修を受けていたことを明らかにした第1次調査の成果は特筆される。この改修の事実により、『信長公記』に記載された織田氏侵攻との関連性に焦点が当てられ、武田氏滅亡を決定づけた高遠城の攻防に関わる織田軍や在地勢力の動静について地域の関心を集め、貴重な歴史資産を現状のまま保存することにつながったことは何よりの成果であった。残念ながら「一夜の城」と織田信忠軍との直接の関係性を示すものは把握できず、周辺の遺構群を含めた関連調査については今後に期するところが大きい。

今後本遺跡及びその周辺で諸開発が行われるに際して、第3章第1節（1）の現況調査結果に基づく遺構群の総合的評価を視野に入れた試掘確認調査や、着実な保護措置を実施することにより、「一夜の城」及び埋蔵文化財包蔵地一夜城の実態の解明が期待される。

【引用参考文献】

- 伊那市教育委員会 1967a 『三ツ木遺跡調査概報』
伊那市教育委員会 1967b 「長野県伊那市御殿場遺跡緊急発掘調査概報」『伊那路』11-1
伊那市教育委員会 1968 『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』
伊那市教育委員会 1970 『名廻東古墳（児塚）』
伊那市教育委員会 1973 『浜弓場遺跡』
伊那市教育委員会 1974 『上島遺跡』
伊那市教育委員会 1977a 『与地原・北割遺跡』

| | | |
|----------|-------|----------------------|
| 伊那市教育委員会 | 1977b | 『福島遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1977c | 『眼子田原B遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1978a | 『丸山清水遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1978b | 『中村遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1978c | 『砂場B遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1979a | 『児塚遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1979b | 『南村・東田遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1979c | 『カンバ垣外遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1979d | 『八人塚遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1980a | 『宮垣外・天庄II・堀の内・小花岡遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1980b | 『菖蒲沢・山の下遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1980c | 『丸山城跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1981 | 『高遠道・井の久保・表木原遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1983 | 『鳥井田・横吹・城の腰・安岡城遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1984 | 『芝王遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1990 | 『島崎遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1991 | 『伊那市の小字名』 |
| 伊那市教育委員会 | 1993 | 『伊勢並遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1995 | 『伊勢並・赤坂遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1998a | 『金鋸場遺跡(第I次～第IV次)』 |
| 伊那市教育委員会 | 1998b | 『辻西幅遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 1999a | 『金鋸場遺跡(第V次～第VI次)』 |
| 伊那市教育委員会 | 1999b | 『富岡遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 2000 | 『石塚遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 2001a | 『城塗遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 2001b | 『下手良中原・大原・松太郎窪遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 2002a | 『石塚遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 2002b | 『まこもが池遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 2004 | 『今泉遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 2012 | 『宮の平遺跡』 |
| 伊那市教育委員会 | 2015 | 『平成26年度 市内遺跡発掘調査報告書』 |

伊那市教育委員会・関西大学文学部考古学研究室 2022 『長野県伊那市 老松場古墳群—第1～4次
調査の概要報告—』

伊那市史編纂委員会 1983 『伊那市史 歴史編』伊那市史刊行会
伊那史料叢書刊行会 1942 『伊那史料叢書 第二十三卷』山村書院
飯田市上郷考古博物館 2009 『南信州の山城』
上伊那誌編纂会 1965 『上伊那誌 歴史編』上伊那誌刊行会

- 高遠史料叢書刊行会 1942 『高遠史料叢書 卷一』鮎澤出版社
- 高遠町誌編纂委員会 1942 『高遠町誌歴史編 一二』高遠町誌刊行会
- 富県小学校百年史編集委員会 1989 『富県小学校百年史』富県小学校百周年記念事業実行委員会
- 長野縣 1936 『長野縣町村誌〈南信篇〉』長野縣町村誌刊行会
- 長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—伊那市西春近一』
- 長野県教育委員会 1974 『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—伊那市内その2—』
- 長野県教育委員会 1983 『長野県の中世城館跡』
- 長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全1巻(1)遺跡地名表』
- 長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全1巻(3)主要遺跡(中・南信)』
- 長野県埋蔵文化財センター 1989 『吉田川西遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1990 『一松本市内その1—総論編』
- 高遠町教育委員会 1978 『高遠宮の原遺跡発掘調査報告書』
- 辰野町教育委員会 1995 『堀の内居館跡』
- 小林計一郎編 1996 『定本・伊那谷の城』(株)郷土出版社
- 飯塚政美 2002 『伊那周辺の城館と村落』(株)ぎょうせい
- 井原今朝男 1999 「第1章第3節 2郷村の発展と領主による用水・耕地開発」『長野県土地改良史 第1巻歴史編』
- 太田牛一 『信長公記』(1985 戦国史料叢書2 (株)人物往来社)
- 奥野高廣 1969 『織田信長文書の研究』吉川弘文館
- 奥野高廣 1988 『増補織田信長文書の研究 下』吉川弘文館
- 奥野高廣・岩沢原彦校注 1997 『信長公記』角川書店
- 唐澤貞治郎 1921 『上伊那郡史』上伊那教育会
- 笛本正治 2011 「戦国時代のムラと城」『高遠城の攻防と一夜の城—織田軍の陣城について考える—』 ほうすき書籍
- 佐野重直 1901 『南信伊那史料 上』
- 篠田徳登 1971 『伊那の古城』伊那毎日新聞社
- 下平利康 1998 「桜井の四つの城について」『伊那路』495
- 高橋成計 2018 『織豊系陣城辞典』図説日本の城郭シリーズ⑥
- 中井 均 2011 「伊那一夜の城の謎を探る」『高遠城の攻防と一夜の城—織田軍の陣城について考える—』 ほうすき書籍
- 中井 均 2013 「一夜の城」『長野の山城ベスト50を歩く』河西克造他編 サンライズ出版
- 濱 慎一 2012 「伊那市『一夜の城』発掘調査について」『伊那路』660
- 濱 慎一 2018 「一夜の城」『甲信越の名城を歩く 長野編』中澤克昭他編 吉川弘文館
- 東高遠古戦場 異櫓史料館編 1979 『高遠落城』伊那毎日新聞社
- 藤沢良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 宮坂武男 2002 『図解 山城探訪第4集 改訂 上伊那資料編』長野日報社刊
- 宮脇正実他 2015 「伊那市富県における中世城館跡群の研究(6)」『研究紀要第37集』上伊那教育会